

城山

(その3)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

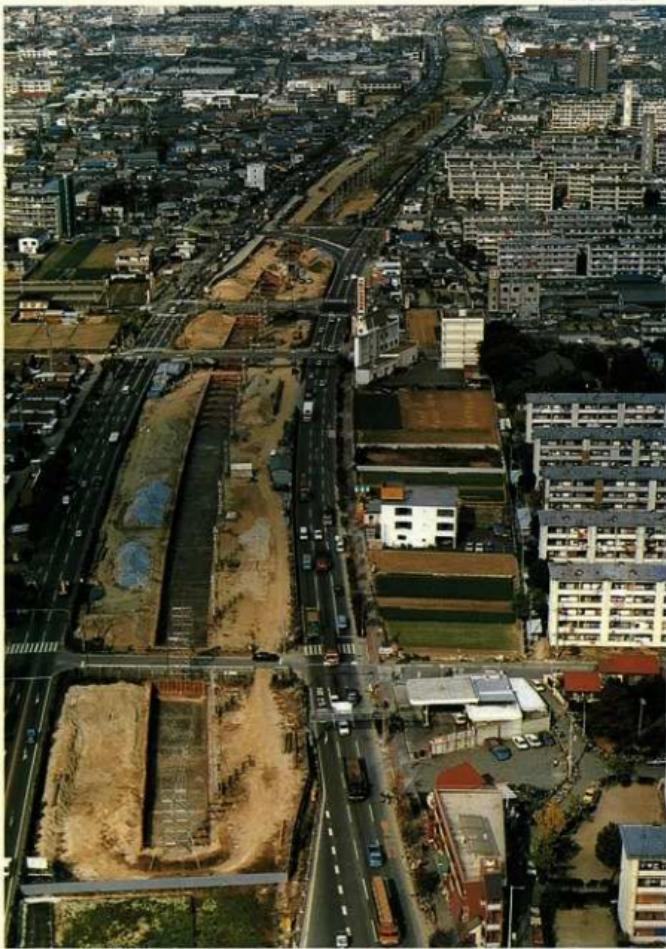
城山

(その3)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

巻頭図版1



J区上空より北を望む

卷頭図版2



I・J区切り抜け部の調査(南西より)

序 文

城山遺跡は、龜井、加美、久宝寺、山賀、瓜生堂遺跡等と共に弥生時代以来の河内の「クニ」の歩みを解明する上で不可欠の重要な遺跡であり、立地的にも羽曳野丘陵から北に派生した河内台地の縁辺、長原台地部に所在する等、河内平野中央部より穏やかな自然環境的位置を占め、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代はもとより、中、近世まで連續と明確にその足跡がたどれる複合遺跡である。又、河内平野中央部との比較の上でも大いに注目を集めている遺跡でもある。

本書は、近畿自動車道天理、吹田線（松原～東大阪間）が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施工されるに及んで確認された15遺跡の内一つとして昭和58年3月来、発掘調査を実施してきたものの調査概要を収録した。

今回の調査によって、特に条里に先行する長地形地割の整然とした水田址を検出すると共に、「富官家」の墨書き土器が出土する等、遺跡の実体に迫る大きな成果を得た。勿論、今回の調査資料だけで「官家」に具体像を与えることは非常にむつかしいが今後の調査成果を加えることによって、それも可能となる日も近かろう。今後の調査研究に期待したい。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房康幸

序 文

大阪は、日本史上でも極めて早い時期から、海上交通が発達し、大陸と朝鮮半島の門戸として発達した地である。

その昔、大阪平野に存在した河内湾、河内湖も、これらの海上交通には最良の場所となった。

河内の文化は、これら海上交通によってもたらされた外来的な要素と、在地文化とが自然にからみあって出来上がった当時の最新文化であったと言えよう。

この河内文化の解明こそが、我国古代史の解明に重要な意味を持つことは誰もが認めるところであろう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、既に長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、佐堂遺跡、久宝寺遺跡、大掘城跡、龜井遺跡、の調査が完了し、龜井北遺跡の調査を実施している。

本書は、昭和60年3月に調査が完了した大阪市平野区長吉長原～同長吉出戸町一帯に所在する城山遺跡の発掘調査の概要を記したものである。古墳時代、奈良時代を中心として検出された水田跡は、我国古代農業の姿、河内文化をさえた基盤を知る重要な成果であると自負している。

最後に、限られた調査期間の中で、およそ2ヶ年間連続で発掘調査を担当した調査関係者各位の努力に深謝するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な推進に多大の援助をおしまれなかつた日本道路公団の関係各位に厚く御礼申し上げ、今後とも、当センターにより一層の御理解、御支援を願ってやまない。

昭和61年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区長吉出戸～長吉長原に所在する城山遺跡の発掘調査概要報告書である。長原遺跡の一部追加分も含んでいる。
2. 城山遺跡の発掘調査はその1(A～C地区)、その2(D～F地区)、その3(G～J地区)に分けて行なったが、本書で報告するのはその3調査区、及び長原遺跡の追加部分の調査結果である。
3. 本調査は大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した。
4. 本調査に要した費用369,988,000円はすべて日本道路公団が負担した。
5. 本調査は昭和56年2月1日から昭和60年3月31日までの間実施した。
6. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査及び本書作成に關係した者は以下の表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜（60年1月まで、以後理事専任）
	専務理事	住羽地米治
	事務局長	畦 謙造
	事務局次長兼総務課長	尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主查 田中喜代子、主事 秋山芳廣 灰本明子、千野和久、田口宗義、鎌山洋子、 宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子
調査総括責任者	業務課長	石神 怡（59年3月まで）
	同	泉本知秀
	業務課主幹	吉村信男
長田分室	主幹兼業務第1係長	中西靖人、技師 片山彰一
長吉分室	業務第2係長	赤木克視、技師 平井貞子
	業務第3係長	広瀬和雄、技師 石神幸子、藤沢真依、杉本二郎、辻本 武、藤永正明、上林史郎、入江正則 阿部幸一、岩瀬 透

7. 調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪市土木局東南工営所、平野警察署等に格別の配慮を受けた。

また調査及び遺物・図面の整理においては以下の学生諸君の協力を得た。

(大阪工業大学) 泉 佳男、松田繁雄、山口隆、山崎英喜、吉本和信、(関西学院大学) 植村聰一、浦上幸博、中井 充、中谷雅浩、林 精一、(近畿大学) 山中 真、(大阪外大) 中野晋吾、(桃山学院大学) 田中直樹、(早稲田大学) 石田佳久、(大谷大学) 輪違光雄
(同志社大学) 原田昭文、(武庫川女子大学) 石田雅子、川端雅美、(園田学園女子大学) 原村典子、(大阪女子短期大学) 原村尚子、(帝國女子大学) 大西由江、(神戸女子大学) 長谷川美代子、(大阪樟蔭女子大学) 黒田尚子、仲谷祐美子、平田真規子、

8. 花粉分析は、広島大学総合科学部、安田喜恵氏に依頼した。また ^{14}C 年代は、京都産業大学理学部、山田治氏に依頼した。

9. 調査・整理中、財団法人大阪市文化財協会の諸氏から多面にわたって多くの有益な御教示を得た。

10. 本書の造構実測図の方位はすべて国土座標の北を示す。

11. 造構実測図作製の際の縮尺は、1/20、1/50、1/100を基本とした。

12. 調査の際に使用した絶対高は、すべてT.P.+値である。

13. 遺物実測図は、土器を1/4で、石器を2/3で示した。

14. 本書の記述は、赤木克規・藤永正明・阿部幸一が行ない、花粉分析結果については広島大学総合科学部助手、安田喜恵氏にお願いした。全体の編集は藤永と阿部が行なった。

15. 本調査にあたっては、写真・実測図などの他、カラースライドを作製している。これらはすべて財団法人大阪文化財センターで整理・保管している。広く利用されることを希望したい。

城山

(その3)

近畿自動車道 天理～吹田線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概要報告書

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査に至る経過及び調査の方法	赤木克視	1
第1節 調査に至る経過		
第2節 調査の方法		
第Ⅱ章 造跡の立地と環境	阿部幸	4
第Ⅲ章 層序	藤永正明	8
第Ⅳ章 各期の造構		
第1節 近世	阿部幸	14
第2節 中世	藤永正明	16
第7水田～第6水田～第5水田		
第3節 古代	ア	18
古代砂堆上の造構群～第4水田～第3水田～第2水田～第1水田		
第4節 古墳時代後期	阿部幸	34
18層上面の造構～20層上面の造構		
第5節 弥生時代～古墳時代初頭(20層・24層上面)	ア	38
第6節 弥生以前	藤永正明	57
第Ⅴ章 各期の遺物		
• 9層上面～8層内～10層内(平安以後)	ア	59
• 11層内～12層内～16層内～17層内～北部16～18層(古墳後期以後)	ア	59
• 古墳時代各溝内～19B層内～S P 01内(古墳後期)	ア	62
• 20層土坑群内(弥生中期～古墳前期)	阿部幸	63
• 20層内～21層内～22層内～24層内(弥生以前)	藤永正明	67
• 墓書「富官家」について	ア	68
第Ⅵ章 水田について	ア	92
第1節 水田の層位と年代		

第2節 水田の特徴	93
第3節 水田の位置	98
第Ⅶ章 城山遺跡の泥土の花粉分析	安田喜憲 107
花粉分析の方法—花粉分析の結果—考察	
あとがき	藤永正明・阿部幸一 139

插図目次

第1図 調査区位置・地区割図 (1/2500)	2
第2図 城山遺跡周辺の遺跡分布図 (約1/40,000)	5
第3図 城山 (その3) 土層模式図	11・12
第4図 G区近世の遺構 (1/250)	15
第5図 第4水田面微地形図 (1/2000)	19
第6図 第2水田面微地形図 (1/2000)	21
第7図 地山に喰い込む足跡 (7 I グリッド) (1/60)	25
第8図 各期の水田 (1/1000、1/1500)	28・29
第9図 各期水田の畦畔断面図 (A~C、1/40)	31
第10図 各期水田の畦畔断面図 (D~K、1/40)	32
第11図 各期水田の畦畔断面図 (L~P、1/40)	33
第12図 古墳時代 S D01断面図 (1/40)	34
第13図 S D07平面実測図 (1/200)・古墳時代の遺構概要図 (1/800)	35
第14図 S D02・04・05・06・10断面実測図 (1/40、1/50)	36
第15図 S P01平・断面実測図 (1/20)	37
第16図 S D07断面実測図 (1/40)	38
第17図 S K109・114 土器 (122・118) 出土状態実測図 (1/25、1/20)	40
第18図 S K120~123実測図 (1/100)	41
第19図 G区土坑群下層遺構 (1/200)・S K136・137下層実測図 (1/40)	42
第20図 G区土坑群断面実測図 (1/50)	43
第21図 G区土坑群断面実測図 (1/50)	44
第22図 I区土坑群断面実測図 (1/50)	45
第23図 S K2-01 土器 (181) 出土状態実測図 (1/20)	46
第24図 S K2-02 土器 (175) 出土状態実測図 (1/20)	47
第25図 H区 (288+2.5m ライン) 東西断面実測図 (1/50)	49
第26図 地山下の黒灰色粘土分布図—3 J グリッド (1/200)	57

第27図	流路2 土層断面—10 I グリッド南壁 (1/40)	57
第28図	8~10層出土遺物 (1/4)	72
第29図	11~16層 (含第4・第2水田) 出土遺物 (1/4)	73
第30図	16~18層 (含第2・第1水田) 出土遺物 (1/4)	74
第31図	16~18層 (含第2・第1水田)・古墳時代各溝内出土遺物 (1/4)	75
第32図	19B層 (流路1・2上部)・S P01出土遺物 (1/4)	76
第33図	20層土坑群出土土器 (G区-1) (1/4)	77
第34図	20層土坑群出土土器 (G区-2) (1/4)	78
第35図	20層土坑群出土土器 (G区-3) (1/4)	79
第36図	20層土坑群出土土器 (H区-1) (1/4)	80
第37図	20層土坑群出土土器 (H区-2) (1/4)	81
第38図	20層土坑群出土土器 (I区-1) (1/4)	82
第39図	20層土坑群出土土器 (I区-2) (1/4)	83
第40図	20層土坑群出土土器 (I区-3) (1/4)	84
第41図	20層土坑群出土土器 (I区-4) (1/4)	85
第42図	20層土坑群出土土器 (I区-5) (1/4)	86
第43図	20層土坑群出土土器 (I区-6) (1/4)	87
第44図	20層土坑群 (I区-7)・流路1最下部出土土器	88
第45図	20層以下出土石器 1	89
第46図	20層以下出土石器 2	90
第47図	弥生時代土坑群出土石器	91
第48図	第2水田畦畔配置図 (約1/2000)	94
第49図	第2水田とその周辺図 (約1/4000)	95
第50図	弥生時代前期頃の地形 (1/20,000)	99
第51図	7~8世紀の流路と地形 (1/20,000)	101
第52図	平安時代以後の川と集落 (1/20,000)	104
第53図	城山遺跡Jトレンチ 331地区北壁 模式層序	108
第54図	城山遺跡Aトレンチ 140地区東壁 セクション	110
第55図	尾瀬ヶ原の過去7600年間の気候変化 (阪口1984)	113
第56図	城山遺跡Jトレンチ 331地区北壁 花粉ダイアグラム	121・122
第57図	城山遺跡Iトレンチ 303地区東壁 花粉ダイアグラム	126
第58図	城山遺跡Iトレンチ 292地区東壁 花粉ダイアグラム	129・130
第59図	城山遺跡Iトレンチ 290地区東壁 Aトレンチ 140地区東壁 } 花粉ダイアグラム	133・134

- 第60図 瓜生堂遺跡（小阪ポンプ場）第2号方形周溝墓北壁の断面図（安田1981）……… 135・136
 第61図 瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓の周溝部 花粉ダイアグラム（安田1981）……… 137・138

表 目 次

第1表 土層の対比	13
第2表 第7水田各筆のレベルと面積	30
第3表 第5水田各筆のレベルと面積	30
第4表 第4水田各筆のレベルと面積	30
第5表 第3水田各筆のレベルと面積	30
第6表 第2水田各筆のレベルと面積	30～31
第7表 20層土坑群一覧表	52～56
第8表 「官家」の用例一覧	70
第9表 城山遺跡Jトレント331地区北壁 花粉・胞子出現率表	119・120
第10表 城山遺跡Iトレント303地区東壁 花粉・胞子出現率表	123・124
第11表 城山遺跡Iトレント292地区東壁 花粉・胞子出現率表	127・128
第12表 城山遺跡Iトレント290地区東壁 花粉・胞子出現率表	131・132
第13表 城山遺跡Aトレント140地区東壁 花粉・胞子出現率表	131・132

図 版 目 次

第Ⅶ章 PL1. 花粉化石顕微鏡写真(1)	115
PL2. 花粉化石顕微鏡写真(2)	116
PL3. 花粉化石顕微鏡写真(3)	117
図版1 城山遺跡周辺の航空写真	
図版2 近世鶴跡(2G・4Jグリッド)	
図版3 中世水田(第6水田, 第7水田)	
図版4 中世水田(第7水田, 第5水田)	
図版5 第5水田(J区, 長原15区)	
図版6 古代砂堆上の遺構群(I区, J区)	
図版7 第4水田(G区, 3Iグリッド)	
図版8 水田の重なり(第4・第3・第2水田)	
図版9 水田の重なり(第4・第3・第2水田)	
図版10 第2水田(I区)	

- 図版11 第2水田（J区、大畦1）
- 図版12 第2水田（大畦2・3、小畦2）
- 図版13 第2・第1水田（J区鋪跡、J区第1水田）
- 図版14 第1水田・足跡
- 図版15 水田畦畔断面
- 図版16 18層・G区SD01（上）SD01断面（下）
- 図版17 20層・I区SD05（上）18層SD07（下）
- 図版18 I区SP01～04（上）SP01（下）
- 図版19 I区SD04（上）SD07（下）
- 図版20 G区土坑群（上）G区SD02・03（下）
- 図版21 1Gグリッド土坑群（上）1GグリッドSK109
- 図版22 2Gグリッド土坑群下層
- 図版23 H区土坑群上層（上）下層（下）
- 図版24 2Hグリッド土坑群（搅拌土）（上）2Hグリッド南断面（下）
- 図版25 I区298地区土坑群下層（上）I区291地区土坑群下層（下）
- 図版26 I区20層上面土坑群
- 図版27 I区24層上面遺構
- 図版28 24層SD10
- 図版29 弥生以前
- 図版30 弥生以前
- 図版31 弥生以前
- 図版32 9層上面・8層出土遺物
- 図版33 10層出土遺物
- 図版34 11層・12層出土遺物
- 図版35 12層出土遺物
- 図版36 16層・17層出土遺物
- 図版37 北部16～18層出土遺物
- 図版38 古墳時代各溝内・19B層（流路1内）出土遺物
- 図版39 19B層（流路2内）・SP01内出土遺物
- 図版40 SP01内出土遺物
- 図版41 20層土坑群出土遺物（G区）
- 図版42 20層土坑群出土遺物（G・I区）
- 図版43 20層土坑群出土遺物（G・H区）
- 図版44 20層土坑群出土遺物（H・I区）

- 図版45 20層土坑群出土遺物 (G・I区)
- 図版46 20層土坑群出土遺物 (G～I区)
- 図版47 20層土坑群出土遺物 (I区)
- 図版48 20層土坑群出土遺物 (I区)
- 図版49 20層土坑群出土遺物 (I区)
- 図版50 20層土坑群出土遺物 (I区)
- 図版51 22層出土遺物 (I区流路1内)
- 図版52 各層出土石器

付 図

- 1 造構変遷図 (1) (各1/1000)
- 2 造構変遷図 (2) (各1/1000)
- 3 近世の造構平面図 (1/400)
- 4 第7水田平面図 (1/400)
- 5 第5水田・古代砂堆上の造構群 (H・I区) 平面図 (1/400)
- 6 第4・第3水田平面図 (1/400)
- 7 第2水田平面図 (1/400)
- 8 第1水田平面図 (1/400)
- 9 G区 18・20層土坑群平面図 (1/200)
- 10 H区 20・24層土坑群平面図 (1/200)
- 11 I区 20層上面造構平面図 (1/200)
- 12 I区 24層土坑群下層平面図 (1/200) 及びCライン土層断面実測図 (1/40)
- 13 24層平面図
- 14 城山遺跡その3 G～Jトレンチ・長原15トレンチ拡張部東壁断面図 (H=1/40, L=1/400)

第Ⅰ章 調査に至る経過及び調査の方法

第1節 調査に至る経過

城山遺跡は、大阪市平野区長吉出戸から長吉長原にかけて所在する。近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内に存在する15遺跡のうち、南から3番目の遺跡であり、北で龜井遺跡、南で長原遺跡と接している。着手当初の遺跡範囲は、日本道路公団の測量測点でSTA 137+80から148+11までの約1031mである。

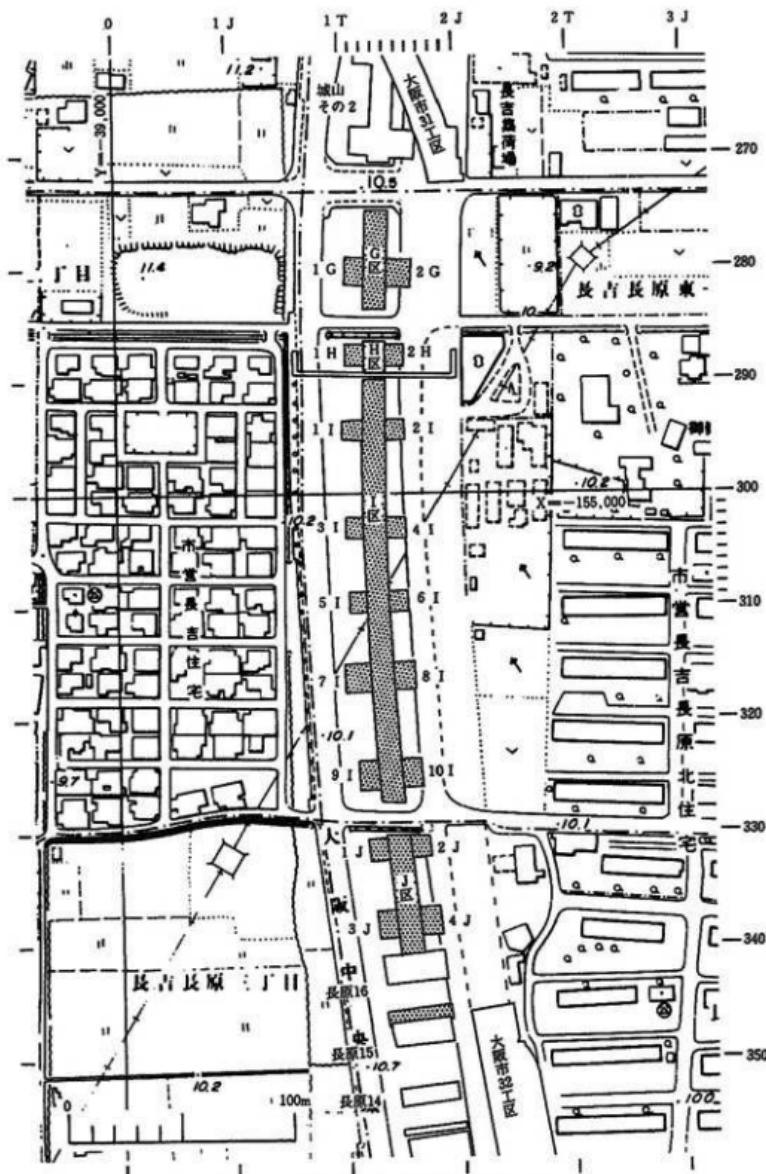
日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線（通称・大阪線）は、昭和42年度に基本、及び整備計画が決定され、翌43年度に建設が開始されている。遺跡の存在する東大阪～松原間約13kmについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団との間で協議が重ねられてきた。周知の遺跡については、遺構分布の範囲、埋没深度を探る目的で第1次調査を実施することになり、財大阪文化財センターによって昭和48・49年度に実施された。城山、長原遺跡の存在は、協議時点では知られていなかった。

しかし、同じ頃、この地域に地下鉄谷町線の延長が計画されていた。大阪府教育委員会と大阪市交通局との協議の中で、この地域が遺跡である確度が高いと判断されたため、試掘調査が実施されることになった。この試掘調査も、財大阪文化財センターが担当することになり、昭和48年11月から49年5月にかけて地下鉄の準備工に合わせて随時実施された。この結果、城山遺跡と長原遺跡の存在が明らかになった。しかし、調査方法が機械掘削後の断面観察を中心としたものであったため、遺構、遺物の稠密な分布を示す所しか遺跡と判断できず、多くの空白地を作ってしまった。地下鉄建設に伴う本調査は、長原遺跡調査会によって、遺跡名を長原遺跡と統一して昭和49年8月より実施された。弥生時代後期の竪穴住居跡群や古墳時代の古墳群、水田等多数の遺構が検出され、試掘時には想像もつかない大遺跡であることが判明した。

一方、大阪線の本調査は、昭和51年7月より長原遺跡から開始したが、以上のような成果を踏まえ、空白地も調査対象とした。大阪線においては、既に長原、城山遺跡を分離して関係機関と協議を進めていたため、大阪市が城山遺跡を使用していないのにも関わらず、城山遺跡をそのまま使用している。そのため、遺跡名が混乱しているが、将来的には是正する必要があろう。

城山遺跡の調査は、当初は長原遺跡に引き続いで実施される予定であった。しかし、長原遺跡調査終了後、計画変更があって大幅に遅れ、昭和58年2月より開始された。調査は、遺跡区間が長いこともあり、北より1、2、3調査区と3分割された。その3調査区は、STA 144+80から148+11の約331mである。なお、長原遺跡のNo.15トレンチであるが、高速道路の高架橋脚の位置が若干移動することになり、その部分をNo.15トレンチ拡張区として追加調査している。

その3調査区は、予定通り昭和60年3月現地調査を終了している。



第1図 調査区位置・地区割図 (1/2500)

第2節 調査方法

近畿自動車道天理～吹田線の調査は、長原遺跡から開始されたが、その時の調査範囲は、大阪府教育委員会と日本道路公団の協議の結果、造構が破壊される高速道路の橋脚基礎部のみを対象としていた。しかし、実際に調査をしてみると、その橋脚部に保存に値する古墳等の重要造構が検出され、保存協議が両者の間で行われた。その結果、日本道路公団は、それらの造構を避けるように橋脚位置の設計をやり直すことになった。ところが、その変更した場所で新たな保存協議対象造構が検出されることになり、再び橋脚位置の変更を余儀無くされた。

長原遺跡の調査は、このように数度の設計変更を繰り返したため、調査期間、経費等非常にロスの多いものであった。そこで、次の瓜生堂遺跡からは、調査方法を全面的に改めることになった。そこで採用されたのが「トレンチ調査方式」である。この方式は、まず、路線中央を縦断する幅10mのトレンチを設定し、最終造構面までの調査を実施する。これが「トレンチ部の調査」であるが、これによりこの地域の造構、遺物の分布を把握する。その結果は、すみやかに側大阪文化財センターより大阪府教育委員会に報告される。そして、それを基に大阪府教育委員会は、できるだけ造構、遺物の破壊の少ない場所に高速道路の高架橋脚の位置を決めるべく、日本道路公団と協議を行う。この協議によって決定した橋脚位置が「切抜部の調査」として調査されるが、これにより重要造構が検出されても橋脚位置の変更はしないということになっている。

この方式は、路線全域を調査しないという点で一部に非難があった。しかし、最終造構面が浅いゆえに調査終了後に保存協議ができる台地上の遺跡と異なり、沖積地の遺跡の場合は、造構面が重複しており、しかも深く埋没している。このため、最終造構面まで調査した段階では、上層造構はすべて喪失していることになる。この場合、造構保存を図るために、重要造構検出のたびにそれ以下の掘削を停止しなければならない。ところが、沖積地の調査には安全のため厳密な強度計算を伴う鋼矢板等の土留工を必要とする。全面調査の場合、調査区の中に壁として残る保存地区の土留工を施工することは、その広さの関係から膨大な費用をかけない限り不可能である。現状では、トレンチ調査方式が沖積地の調査方法として妥当なものと思われる。

なお、この方式においても、トレンチ部で保存に値する造構が検出された場合は、適宜それより下層の調査を停止し、保存協議にかけることになっている。

その3調査区は、道路、水路等によって分断され、G～Jの4本のトレンチが設定された。切抜部のトレンチ番号は、それぞれのトレンチ部の北西隅を1、北東隅を2とし、以下南へその順に命名している。表記は、1F、2Fトレンチのようになる。

地区割は、国土座標の第VI系のX-153,500.000、Y-39,000.000を原点とし、東へ算用数字を使用する100m区画を設定する。その区画をさらに5mに分割し、西を起点にA～Tとする。南北方向へは5mで細分し、算用数字3桁で通し番号を付けている。区画名は、南、東のラインを併記する。そのため、杭は南東隅がその区画を代表する。表記は1A001区のようになる。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

城山遺跡は大阪市の東南部、平野区長吉出戸地区を中心とした南北1kmの範囲に所在する縄文時代からの各時代の遺構が累層的に存在する複合遺跡である。当遺跡は昭和48年大阪市営高速鉄道2号線建設に伴なう試掘調査によって発見されたが、その後の調査によって、北接する亀井遺跡や南の長原遺跡と一連性をもつことが明らかにされている。⁽¹⁾

城山遺跡の所在する大阪市東南部の地理的な環境については数多く⁽²⁾報告されているが、改めて簡単にまとめておく。

大和川南部にひかる羽曳野丘陵から、河内台地と称される台地が北に派生している。この台地は「馬池」の所在する開析谷によって西の瓜破台地と東の長原台地に分かれている。当遺跡は長原台地の東北の縁辺部から旧大和川が形成した冲積地にかけて立地している。試みに、これまでの調査を参考に、縄文晩期以前の基底面のレベルを拾ってみると、大和川右岸でT.P.11.0m、城山J区T.P.7.0m、城山A区T.P.4.0mを測り、平均3/1000程度の緩やかな勾配を示すが、亀井ポンプ場や平野川左岸ではT.P.1.0m前後にあり、A区との250mの間に3mのレベル差が存在する。また、那須孝悌氏等の調査や城山遺跡その1AN地区の調査で低位段丘面が2m以上急に下がることが確認されており、ポンプ場の南約80mに縄文海進時の汀線があったと考えられている。これらのことから、A区付近に長原台地の北端を規定する小規模な段丘崖の存在を想定できる。⁽³⁾

城山遺跡では弥生時代後期の集落を除くと亀井・長原の両遺跡に包括される内容を持っているが、さらに周辺には歴史的空間を共有した数多くの遺跡が立地している。そこで以下、周辺の遺跡について河内台地を中心に概観したい。

旧石器時代から縄文時代早期の遺跡としては、近畿地方の様式遺跡である国府遺跡が当遺跡の東南5kmの国府台地に立地している。河内台地では長原遺跡東南部、八尾南遺跡、長吉野山遺跡、瓜破遺跡、上町台地の山之内遺跡、桑津遺跡などで翼状剣片や尖頭器が出土している。特に長原遺跡では昭和52~53年の調査で、いわゆる長原地山層から接合資料を含むサヌカイトフレーク群が出土しており、この地域の

1. 瓜生堂遺跡
2. 巨摩廢寺
3. 若江北遺跡
4. 山賀遺跡
5. 友井東遺跡
6. 美園遺跡
7. 佐堂遺跡
8. 久宝寺遺跡
9. 亀井北遺跡
10. 亀井遺跡
11. 長原遺跡
12. 城山遺跡
13. 大堀城跡
14. 衣羅遺跡
15. 加美北遺跡
16. 加美遺跡
17. 長樂寺遺跡
18. 加美耕作遺跡
19. 寒連東遺跡
20. 出戸四丁目遺跡
21. 瓜破遺跡
22. 瓜破北遺跡
23. 瓜破廢寺
24. ゴマ堂山古墳
25. 花塚山古墳
26. 長吉野山跡
27. 長吉川辺遺跡
28. 竹測遺跡
29. 萱振遺跡
30. 東郷遺跡
31. 宮町遺跡
32. 小坂合遺跡
33. 成法寺遺跡
34. 久宝寺遺跡
35. 跡部遺跡
36. 龍華寺跡
37. 中田遺跡
38. 老原遺跡
39. 太子堂遺跡
40. 城山古墳(?)
41. 植松南遺跡
42. 六反古墳(?)
43. 木の本遺跡
44. 田井中遺跡
45. 川北遺跡
46. 太田遺跡
47. 八尾南遺跡



第2図 城山遺跡周辺の遺跡分布図 (1/40,000) (国土地理院2万5千分の1、大阪東南部より)

旧石器時代解明に重要な手がかりを与えた。

縄文時代前期から中期には海進の影響により河内平野全体が内湾化し、汀線が城山遺跡北部にまで達していた。これを裏づけるように、この時期の遺跡は生駒山麓や国府台地などの河内平野をとりまく台地や扇状地の頂部近くに立地しており、河内台地では遺跡の存在は確認されていない。

縄文時代後期になると海退現象による河内湾の干涸化と大和川による沖積平野の形成が開始されるが、これとともに集落も低地に進出する傾向が見られる。城山遺跡、長原遺跡、八尾南遺跡で河道内などから遺物が出土しているほか、沖積平野中にある久宝寺遺跡でも多数の土器が良好な遺存状態で出土している。

縄文時代晩期では、長原遺跡が終末期の標式遺跡として著名であり、集落や石器工房址、土器棺墓群などが検出されている。また、美園遺跡、若江北遺跡など沖積地に立地する遺跡では弥生時代前期の土器と併存して検出されている。

弥生時代にはいると、丘陵や扇状地の縁辺部、沖積平野の自然堤防を中心に遺跡数は激増する。河内台地では当遺跡や長原遺跡、瓜破遺跡があり、北には平野川の自然堤防上に龜井遺跡、加美・久宝寺遺跡、上町台地には山之内遺跡、遠里小野遺跡、桑津遺跡などがある。当遺跡と一部重複する龜井遺跡では龜井大土器とともに大規模な中期の方形周溝墓群や後期の銅鏡、貨泉、銅鋳片などが出土しており、その内容からこの地域の中核的な集落に位置づけられる。この他、加美遺跡では墳頂部で南北22m、東西11m、封土高2mを測る巨大な方形周溝墓をはじめとする中期の方形周溝墓群が検出されている。

古墳時代の遺跡は、台地上では前代の集落を継承しているが、平野部では大和川の度重なる氾濫や河道の変化によって消長を繰り返しながらも広範囲に分布している。加美遺跡では弥生時代の方形周溝墓が埋没した後、新たに古墳時代初頭から前期の住居址や古墳が多く土器、銅剣を伴なって検出されている。長原遺跡では4世紀末頃の塚の本古墳をはじめ100基以上の5・6世紀の古墳が検出されているが、その大部分は後世の開発によって上部を削平されている。しかし当遺跡の西に位置する出戸4丁目所在遺跡では2基の埋葬主体や円筒埴輪列を残す古墳が検出されている他、長原遺跡でも最近の調査で6世紀初め頃の前方後円墳が発見され、横穴式石室の一部が残っていた。

古墳時代の集落は八尾南遺跡で前期の住居址や水田が検出されているほか、出戸4丁目や竹渕遺跡で5・6世紀頃の集落址が検出され、古墳群造営主体の一端は明らかになったが、今後も、台地全体に分布する古墳群の変遷や造営主体の具体的な解明が待たれる。

7世紀以降、この地域では耕地開発が急速に進展する。その契機を求めるすれば、東除川の開鑿による灌漑施設の整備を上げることができる。古墳の間を巡らす畦畔の景観は壯觀であり、一豪族を越えた国家的な規模での開発をうかがわせる。

城山・長原地区は大阪市内では数少ない条里遺構の遺存する地域である。これまでの調査で現在の条里が9世紀頃まで溯ることが明らかにされているが、その下層にある7世紀の水田との

関連は不明であり、今後より詳細な調査検討が期待される。

(1) (助)大阪市文化財協会では、行政的な手続き上の経緯もあり、城山遺跡を含めて長原遺跡と総称している。

(2) (助)大阪文化財センター『長原』1978

助)大阪文化財センター『長原遺跡発掘調査報告Ⅰ』1978

「 同 II』1982

「 同 III』1983

日下雅義『歴史時代の地形環境』などに詳しい。

(3) 亀井遺跡では縄文海進時の含貝層（土砂とほぼ同量の貝殻が出土する）が存在するが、AN区では同レベル(T.P.+1.5m)に含貝層が観察されないことから、縄文後期以降にできた開析谷の可能性もある。

ックをなして堆積していたために、上位の土層から分離できたものである。ただしSD-01から離れたH・I区などでは、こうしたブロック土が存在しないために分離できなかった。

19層 黒色ないし黒褐色の粘土層で調査区全体にある。ただしG区からI区最北部にかけては連続しているが、以南では凹地内にしかなく断続的である。これは水田土壤中に取り込まれた結果かと思われる。連続する層を19B層とし、断続的な部分を19A層として分ける。

19A層 厚さ10~15cmあるが南ほど薄い。層内から弥生後期の遺物が出土し、上面には初期須恵器の破片が散在していた。5世紀後半以降に、18層によって覆われたものと思われる。

19B層 凹地内にレンズ状に堆積したもので厚さは最大40cmある。19A層より相対的に高い位置にある。層内には6世紀後半までの遺物が含まれている。高いために18層で覆われるのが遅れ、新しい遺物も含むようになったものかと思われる。

20層 青灰色ないし緑灰色の粘土・微砂で厚さは最大40cmある。流路1の南方では所々で途切れ、流路2の南方では存在していない。北方のG区では、内部を上位の粘土と下位の微砂とに細分できる。流路1付近ではすべて微砂質で、この南方では粘土質に漸移的に変化する。流路2内には同質の層はないが、19B層の下位には灰色粘土がある。これを20B層とした。I区南の当層から縄文晚期かと思われる土器の細片と石鏃が出土している。G区からI区北部にかけて当層上面で弥生中期~6世紀前葉の溝・土塙・ピットが検出された。南方ほど造構の時期が新しいという傾向がある。

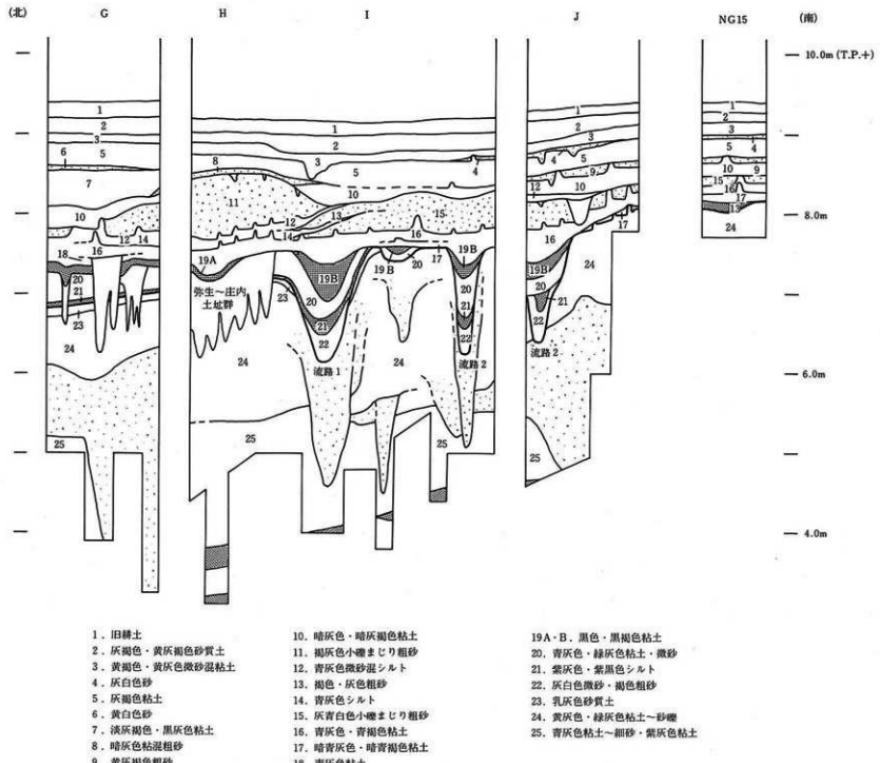
21層 紫灰色ないし紫黒色シルトで厚さ2~10cmある。流路内で最も厚くなる。I区南部以南の流路外では、下層上面の乾痕内部にしかない。流路2内の当層から縄文晚期と思われる石鏃が出土している。

22層 灰白色微砂~褐色粗砂で2本の流路内の底付近にしかない。流路1内の当層から炭化物と共に縄文後期前葉の土器と石刀が出土している。

23層 乳灰色砂質土で、流路1の以北で連続的に、以南で断続的に存在している。粘土が少し混ざっているが、ガサガサしている。G区では10~15cmの厚みがある。流路1によって切られている。遺物は出土していない。

以下の土層からは遺物は出土していないが、いわゆる長原地山の確認のために幅2mで筋堀り調査を行なったものである。

24層 上位は緑青灰色の粘土・粗砂混粘土で、下位には褐色・灰色の砂礫層がある。いずれも固くしまっている。しかし場所によっては砂礫層は存在しない。砂礫層の切り込み面は一様でないことは確かだが一つ一つについて確定できるまでには至らなかった。流路1と2の間では、T.P.+7.0~7.2mのレベルで一応の面があり、上位の粘土と下位の粗砂の混入の多い粘土とに分離できるが、これを南北に追求するのは困難であった。断面図だけを見ると流路1と流路2の一部はその淵源が非常に古いように見え、またその可能性もあるが、筋堀りだけでは古い流路の方向



第3図 城山(その3)土層模式図

までは決められない。総じて、この平均1.8~2.0mの厚みの層準内では明らかに不整合面を確認できず、したがって沖積層下部層とされる長原地山の下面を明らかにできなかった。

25層 T.P.+5.1~5.5mを上面とした青灰色粘土層以下の層準である。上面は全体としてほぼ水平な面が確認できる。ただし所々で著しく侵食されている。青灰色粘土以下は青灰色シルト・細砂、暗褐色粘土が交互に重なっている。比較的細かい粒径の土壤で占められている。いずれも固くしまっている。J区の当層の最上部で採取した木材片は¹⁴C年代で4万年近く前のものと/orた。またT.P.+4.7m付近の暗褐色粘土層からの木材片は更に古い数字がでている。花粉分析によると当層の下位から上位にかけて寒冷化が進行したことが明らかとなった。

以上の土層と大文協の分類とを対比させると、第1表のようになる。土層を大別するにあたっては大文協の分類を当初より意識していたので対比が大略スムーズなのは当然ではある。ただし大文協の第4A層と第5~6B層をこまかく分ける結果となつた。当調査区の15層を大文協の第5層とするか第6A層とするかには多少の問題がある。この点は第7章で触れる。24層はその

上面が長原地山上面であること間に疑問の余地はない。しかしその下面是長原地山の下面とは異なっている。下位に多い砂礫の切り込み面を認定できるかどうかがポイントになるが、明らかにできなかった。25層は深すぎるために周辺ではまだ確認されていなかった。ただし約1km北の龜井のポンプ場では、T.P.+0m付近に固くしまった緑灰色粘土がある。上面が侵食されたうえに厚い礫層で覆われている。⁽²⁾ 25層上面と相似した状況ではある。龜井の報告ではこれを埋没低位段丘面としている。

第1表 土層の対比

当調査区	大文協	当調査区	大文協
1層	第1層	19A・B層	第7B層
2層	第2層	20層	第8層
3層	第3層	21層	第9層
4~9層	第4A層	22層	第10層?
10層	第4B層	23層	?
11層	第5層	24層上部	第13~15層
12~15層	第5~6A層?	24層下部	低位段丘層
16~18層	第6B層	25層	(新資料)
17層	第7A層		

- (1) ⁽¹⁾ 大阪市文化財協会「長原遺跡発掘調査報告」Ⅲ 1983 対比に際しては、
趙哲濟・木原克司・田中清美各氏の御協力を得ることができた。厚く感謝いたします。
- (2) 那須孝悌、樽野博幸「地山層以下の沖積層」(大阪文化財センター『龜井・城山』
1980所収)

第Ⅳ章 各期の遺構

第1節 近世

近世の遺構は、3層（黄灰色シルト）上面で検出されたが、層序の項でも触れたように、2層（灰褐色砂質土）内から掘削されたものが多いと考えられる。しかし、調査中にはそれらを明確に分離することはできなかった。検出面の高さは、G・J区でT.P.9.0m前後、H・I区は15~20cm低い8.85m前後を測る。検出された遺構は耕作に伴なうとみられるもので、G・J区では南北に方向をとる溝及び小溝列、H・I区では東西に走る溝である。長原、城山地区は、条里型地割が良好に残っている地域であり、GとH、IとJ区を分ける道路が坪境にあたるところから、H・I区とG・J区では用途が異なっていたのかもしれない。

G区 南北方向の2条の溝と鰐跡とみられる13条以上の中溝列が検出された。

S D01は幅170~220cm、深さ15cmを測る。溝底の中央部に溝と平行して幅30cm、深さ5cmの小溝が走る。埋土は2層の灰褐色砂質土で、人為的に埋められたものと考えられる。S D02は2A地区にあり、幅120cm、深さ20cmを測る。埋土に砂・微砂の薄層が含まれていることから耕作用の水路と考えられる。

小溝は13条検出されたが、東の2E地区に密集し、西側では比較的疎らである。規模は幅30~70cm、深さ5~10cm程度で長さは、2.3mで途切れるものから40m近く延びるものまである。溝の間隔は2溝が重複するものから2m以上の間隔があく所もあり、規則性は見出せなかった。調査区の東端、2F地区には段差があり、約15cm低くなっているが、2・3層の混合土を客土して平坦化されており、その上下両面で小溝が検出されている。

J区 真北に対し約3°東に振っている30条の中溝列が検出された。（付図3）

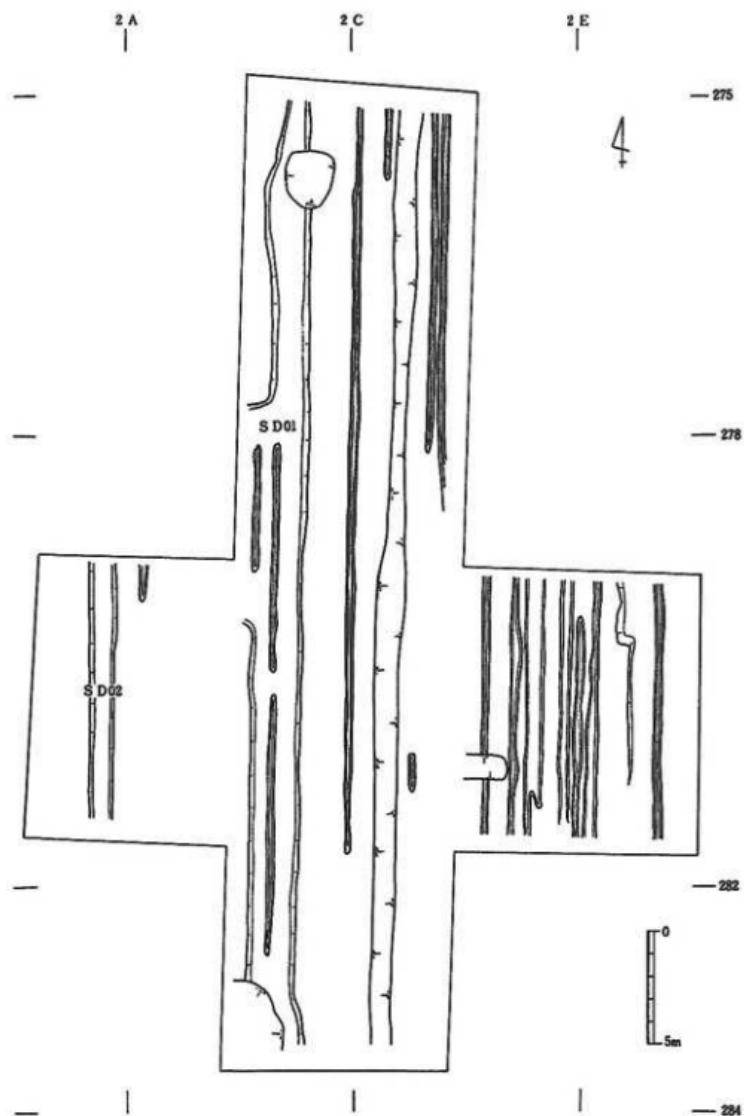
溝は幅25~35cm、深さ5cmを測る。断面はU字形を呈し、溝は10条前後で縦まり、3つのグループに別れるが、溝の間隔は心々間で50~120cmの間にある。

H・I区 東西方向に走る6条の溝が検出された。（付図3）

この地区の3層はレベルが低く、有機物を含んだ青灰色粘土の混入が全域でみられ、G・J区とは様相が異なっていた。検出された溝も2条を除いて形状が歪つて浅いことから青灰色粘土の染み込みの可能性が高い。

S D03は288区で検出された西から東へ流れる溝である。溝は幅150cm、深さ15cmを測り、逆台形の整った掘り形を示す。埋土は下層に灰褐色シルト、上層は2層の黄灰色土が堆積していた。2Cラインより東側では3層まで現代の擾乱が及んでおり、検出することはできなかった。

S D04は297区で検出された。幅150cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色土である。S D04はS D03の東55m（心々間）にあり、ほぼ1/2町にあたる。



第4図 G区近世の造構(1/250)

第2節 中世

第7水田（第8図1、29頁）

4層の砂で覆われた水田である。灰褐色粘土（5層）を水田土壤としている。I区南端部から長原15区にかけて南北約110mにわたって検出された。氾濫の砂層が薄く、また後世の削平を受け失われた部分も多いので残りはよくない。廃絶時期の上限は13世紀後半頃で、下限は室町時代後半頃。

I区の南端に東西方向の畦畔がある。幅0.5~1.0mと広いが、高さは10cm程度しか残っていない（第9図A）。畦畔から北へ約10mで微砂（4層）が確認できなくなり、これに伴って水田を面としては追求できなくなった。J区では南北方向の小溝が3条ある。東からSD1（巾20cm、深さ8~10cm、長さ6m以上）、SD2（巾30~50cm、深さ10cm、長さ30cm以上）、SD3（巾30cm、深さ8~10cm、長さ6m以上）である。いずれも断面U字形を呈し底まで4層の砂で埋まっている。SD3は他の2本と向きが少し異なっており、或いは氾濫時のえぐれかもしれない。SD2のすぐ東には、これに平行して東に下がる低い段（高さ5~8cm）があり、北端で東に折れる。本来はこの段とSD2の間50cmが畦畔になっていたと考えられる。またSD3のすぐ西側には鉄分が多く沈着したらしく褐色の強い部分がある。これは幅50~60cmで南北に延びており、畦畔の痕跡と考えられる。これの北への延長部がJ区にもあり、つなぐとSD2とほぼ平行になる。これら推定復元した畦畔2本の心々間距離は10.8m前後となる。畦畔配置はI区では東西に軸をもち、J区では南北に軸をもつかに見える。田積は不明だが、5の田は北限が坪界線にあると思われ、そうすれば半段かあるいはそれを越える田ということになる。ただこれを一筆内におきめると、水田面における南北20cmのレベル差は大きすぎるようと思える。堺市西浦橋遺跡で推定したごとき仮設的畦畔があったのかもしれないが、定かにできなかった。⁽¹⁾

水田面には人と牛の足跡が無数にあり、すべて砂（4層）によって埋まっていた。歩行状態は復元できない。足跡の深さは5~20cmと一定していない。

(1) 安里進 第4節「古墳時代～江戸時代の遺構と遺物の吟味」（『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告Ⅱ—西浦橋遺跡—』、大阪文化財センター 1984所収）

第6水田（図版3上）

G区において6層の砂を除去した時点で、無数の足跡を検出した。人と牛の足跡がある。足跡内には6層が入っている。検出面の7層上面は灰褐色を呈する単なる水平な平坦面（T.P.+8.5m）で、畦畔や溝等はなかった。部分的に酸化の著しい所もあるが帯状に続くものではなく、それを畦畔の痕跡と考えるには無理があった。一方北接する（その2）調査のF区でこれと同一面が確認されており、そこでは畦畔が検出されている。これによりG区のこの面もF区に統く水田であ

ったことが推定できる。すなわち南北40m、東西30mが一筆の中にすっぽり入ることになる。当調査区では出土遺物がなく時期の詳細は明らかでない。ただ層位的には8層の形成期、もしくはこれより新しいことができ、廃絶の上限を平安後期頃とすることができる。

第5水田（第8図2、29頁）

9層の砂で覆われた水田である。灰色～褐色の粘土（10層）を水田土壤としている。I区南部から長原15区まで南北約150mにわたって検出された。I区南部には9層そのものはまったくなかったが、10層相当層上面に畦畔の痕跡と見られる色調の異なる帶が認められたので、これを第5水田の畦畔位置と推定し、つけ加えた。水田5・8の東部は後世の削平を受けて水田面が失われていた。また水田13の東部では水田土壤そのものが粘土から砂層へと漸移的に変化しており、水田面の追求は不可能であった。水田3と4の間は砂層が非常に薄く畦畔が不明確だったが、鉄分が多く沈着し、足跡がまったくない部分が帶状に続いているのでこれを畦畔として復元した。

水田1～2を画す2本の東西畦畔は心々間距離が11.8mある。1と2の間の畦畔の東西への広がりは明らかでない。坪界線より南では南北に長く延びる畦畔がありそれに東西の畦畔が取りついでいるかに見える。南北畦畔は少なくとも75mの長さがある。方向は座標軸の南北にほぼ平行し、水田5の途中から北側でやや東に傾いている。坪内を東西にほぼ2分する畦畔である。東西畦畔の間隔は25m前後と19m前後のものがある。畦畔はいざれも幅70～100cm、高さは残りのよい所で10～15cmある（第9図B・C）。大畦・小畦の差別は特に認められなかった。田積が明らかな田はないが、水田5は本来400m²を越えていたと思われる。小さい田でも200m²を下まわるものはなさそうだ。水田面は一筆内においても南ほど高いが、比高差は数cmと小さい。ただ水田3だけが10cm近い比高差を内包している。

水田3～6の境には畦畔に沿った小水路がある。幅70～80cm、深さ5～6cmと浅いもので、底のレベルからすると水は南から北へ、西から東へと流れているようだ。水田4と6の間を西から、更に水田6と7の間からも西から水が流れ込んだと考えられる。ただしこの水路は水田を埋めた砂によって底まで埋まっている。ヘドロ状の土はまったく堆積していない。絶えずさらえていたものか、或いは仮設的なものであろうか。

水田土壤となっていた粘土の厚さは水田14・15で10～15cm程度であり、直下には古代の砂層がある（第9図C）。また粘土そのものが厚いところでも断面観察によると攪拌層の下面と覚しき一線が引け、この攪拌層の厚さはやはり10～15cmの厚さであった。

水田面には人と牛の足跡が無数についている。それらは砂（9層）によって埋まっている。

水田土壤中から黒色土器等平安時代前半期の遺物が出土し、上を覆った砂（9層）上面付近には瓦器の比較的古い形式のものが出土している。

第3節 古代

古代砂堆上の遺構群

1. H・I区の遺構（付図5）

8層を除去し砂堆の上面を出した時点で、溝・ピット・土塙を検出した。これらの遺構はその縁辺部において8層下位にある灰褐色粘土（10層に相当）の下位にもぐり込んでいる。遺構内の埋土はいずれも粘土ないシルトで、8層を直接埋土とするものはない。したがってこれら遺構群は11層による砂堆形成直後から8層形成以前のものとなり、砂堆が微高地として存在していた時期のものとなる。

溝は計10本以上ある。幅30~40cm、深さ10~20cm程度のものであるが、場所によっては幅2mに及んでいる。東西・南北に向かうものと、南西一北東に向かうものがある。切り合いからすれば、東西・南北のものが古い。限られた調査範囲の中では砂堆の方向や大きさが明らかでないため、溝と砂堆との関係についてもよくわからない。或いは砂堆によって南部にせき止められた水を北方へ逃がすためのものか。

遺構の時期を示す遺物は出土していない。わずかに8世紀前葉～中葉の遺物が散見されたが、現状では混入の可能性が強い。層位的には平安時代初頭から後葉にかけての遺構群といえる。

2. J区の遺構（付図2-5）

第5水田の土壠の下位には自然堆積層と思われる青灰色シルト・微砂層がある。この層を除去し砂堆（15層）の上面を出した時点で、溝と落ち込みを検出した。溝はほぼ南北方向に延びている。幅30cm、深さ10~15cmで、長さは少なくとも13mはある。内部は青灰色シルトで埋まっている。落ち込みは方形を呈すようで、深さ15~20cmと浅い。またこれらの南部には砂堆がえぐられ、下の第2水田の表面もえぐられた部分がある。これは上幅6~7m深さ40cm程度で南西一北東に延びている。かなりの水が流れることによって侵食されたものかと思われる。

遺構からの遺物がほとんどないので時期は不明だが、上を覆う青灰色シルト層から7世紀末葉頃の土師器の杯の完形品が出土している。この青灰色シルト層は砂堆上のわずかな凹地に堆積したもので、第4水田の土壠となる青灰色粘土・シルト（12層）と同時期の堆積かと思われる。とすれば遺構は第3水田と同時のものかと思われるが、定かにはわからない。

第4水田（第8図3、28頁）

11層の砂で覆われた水田である。G区中央部からI区北半にかけて約120mの間にある。青灰色微砂含み粘土・シルト（12層）を水田土壠としている。南ほど微砂質が強い。G区北部では約10cmの比高差で高くなり砂の堆積が及んでいない（第10図D）。砂のない所では珪片が検出できなかった。この微高地のすぐ北側には同時期の川が流れていた（その2調査区南端）。G区北端で、この川の氾濫によると見られる微砂層がわずかに見られるが、その下面是第4水田面に一致して

いる。水田28・31付近から南は水田土壤となるシルト層が、砂堆(13層)の上にのり上げ、レベルを上げながら薄層となって途切れる。シルト層の厚さが10cm以下になると上面に畦畔が検出されない。ただし、水田範囲とそれ以外の所を分離する何らの施設も検出できなかった。また水田15と18の境の畦畔は途中で途切れ、その東部は足跡こそあれそこが確かに水田であるという確証はもてない。これより東の遠からぬ所に前述の川の上流部があるため、或いは沼地状になっていたかも知れない。同様のことは水田1の東部や水田10についても言える。

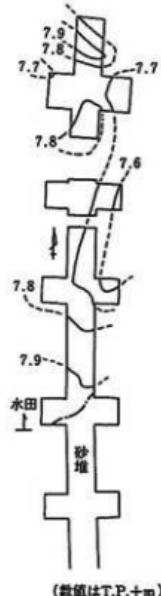
畦畔は幅40~80cm、高さ10~20cm程度であり、特に大畦・小畦の区別はできない。南南西から北北東に延びる畦畔とこれに直交するものが多い。この中にあって水田25と29の間にある畦畔は、東西に延び、他の畦畔の起点となっている。しかしこれは後述する第2水田の畦1をほぼ同じ位置で踏襲したものであり、東端で少しづれたものである(第10図F)。同様に他のほとんどの畦畔も第2水田の畦畔と同じ位置にある。ただ水田3・4の間、また水田27・28の各南端の畦畔は、第2水田なく新たに付設されたものである。これは第2水田以後の微地形の変化や、砂の流入に対処したものと思われる。

田積が明らかな田は1例しかない(25の30.22m²)。この1例は第4水田中比較的小さい部類に属している。一般的には50~70m²程度のもののが多かったかと思われるが、中には水田19など80m²を優に越えるものもある。水田11は内部のレベル差が大きいため、とうてい一筆とは考えられない。中央部を南北に畦畔があったものと思われる。⁽¹⁾水田面には人の足跡が散在していた。水田土壤中には6~7世紀の土師器・須恵器が含まれていたが、上を覆う砂層(11層)の上位からは8世紀末葉を下限とする遺物が多く出土した。水田の廃絶時期は8世紀代に下る可能性もある。

(1) 調査トレンチの位置の関係で見落としがあった可能性がある。

第3水田(第8図4、28頁)

13層の砂で覆われた水田である。I区中央付近のわずかの範囲でしか確認されていない。青灰色のシルト(14層)を水田土壤としている。水田1・2以北では砂(13層)が途切れ、上位の第4水田土壤からこれを分離できなかった。水田4・5以南では水田土壤そのものが砂堆(15層)の上にのり上げ、薄層となって消滅する。シルトの厚さが10cm以下のところではやはり畦畔は検出されない。すなわち検出範囲は南北約20mの範囲でしかない。その範囲内で見ると畦畔は下層の第2水田の畦畔の直上にあり、ほぼそのまま踏襲している。



第5図 第4水田面
微地形図(1/2000)

検出範囲の北部にも本来水田が広がっていたと思われるが、その場合畦畔は第4水田と同様に第2水田の畦畔を踏襲していたものと思われる。

第2水田（第8図5、28~29頁）

16層を水田土壤とした水田である。調査範囲のほぼ全面（南北約350m）で確認できた。水田土壤は北ほど色調が暗く粘質が強い。最南部では微砂を含んだシルトに変化している。水田33・34より南では最大厚60cmの砂礫層（15層）によって覆われている。砂礫層の最下部は薄い微砂層になってしまっており、多くの場所でこれが水田面を直接覆っている。一方北部でこの砂層は第3水田土壤の下にもぐり込んで尖滅し、かわって第3・第4水田の土壤となるシルト層によって直接覆われるところとなる。しかし第2水田の土壤はこのあたりで粘質が強く色調も暗いために上位の水田土壤とは明らかに区別できた。ここでは第4水田の畦畔の直下で、第2水田の土壤が畦畔状に高まっている所と、そうでない所のあるのが観察された（第10図E~H）。この畦畔状の高まりは、平面的に追求することができる。それによるとほとんどは第4水田畦畔と同位置同方向にあるものの、部分的にずれていたり全体がずれているものも存在した。そこでこの層位的に下位にあるものを第4水田による掘り残しではなく、第2水田畦畔の残存と判断した。また南のJ区中央部では後世の水流によって表面を少しせぐられた部分がある。ここでは水田土壤中において、鉄分の沈着によるものか褐色の強い部分が帯状に延びるのが観察された。畦畔そのものは残存しないが、これをその位置・方向から第2水田畦畔の痕跡と判断した（水田77と78の間の畦畔）。

水田面は第6図に見るよう、全体として南と西に高く、北と東に低い。標高7.8~8.2m付近に比較的急な傾斜があるものの、他は緩傾斜である。視覚的には水平な平坦面に近い。しかし微地形図を見ると意外に起伏があり、古い流路の痕跡をとどめていることがわかる。

水田土壤からは7世紀末葉頃を下限とする遺物が出土している。

〔畦畔〕

大畦畔と小畦畔の別がある。またそれぞれ正方位のものとそうでないものの別がある。

大畦畔 計3本ある。北から順に大畦1・2・3とする。

大畦1は幅70~100cm、高さ20~25cmある（第10図J）。約30mにわたって直線的に伸び、調査区外に更に伸びている。方向は座標軸の東西にほぼ平行している（25m東で0.2m北）。畦畔の中心線の位置はトレーン中央でX=-155.082.60である。東端部に多少の乱れがある。

大畦2は大畦1と同様の規模がある（第9図B、第11図N）。ただし水田面のレベル差の関係で南側からの高さが低くなっている部分がある。方向は座標軸の東西にほぼ平行している（25m東で0.5m北）。畦畔の中心線の位置はトレーン中央でX=-155.192.80である。水田68と88の間に水口がある。一部で氾濫によってえぐり取られた部分もある。

大畦3は幅120~150cm、高さ10~20cmある。断面観察によれば畦の上部が削られていることが想定できる。（第11図O）とすれば大畦3は第2水田の畦畔中で幅・高さ共に最大規模となる。北

端は大畦2に取り付いて止まっている。南への延長は長原16区で既に検出されている。更に南の長原15区でも延長上に畦畔があるが、ここでは他の小畦畔と規模は変わらない。長原16区の中央で既に一度細くなっているので、或いは段階的に細くなっていたものかもしれない。こうした部分も含めると延長50m近く確認したと言える。ただし大きな畦という語義に反しない範囲はせいぜい30m程度であろう。

小畦畔 畦畔の大部分をなすものである。この中には東西にまっすぐ延びるもののが2本、南北にまっすぐ延びるもののが2本ないし3本ある。東西のものを北から小畦1・2、南北のものを東から小畦3・4・5とする。

小畦1 は幅40~50cm、高さ10cm程度であるが、第3・第4水田によって高さは多少減じているかもしれない(第10図F)。方向は座標軸の東西にほぼ平行している(10m東で0.2m北)。周辺の他の小畦畔と規模は変わらないものの、それらの方向とは無関係にまっすぐ延びている。

小畦2 も小畦1と同様の規模がある(第10図H)。東西に延長約27m分確認できた。西端と東端とを直線で結べば座標軸の東西とまったく平行になるが、全体的に南に張り出すような格好で少し弯曲している。その張り出し方は最高で約50cmである。小畦2も周辺の小畦畔の方向とは無関係に延びている。

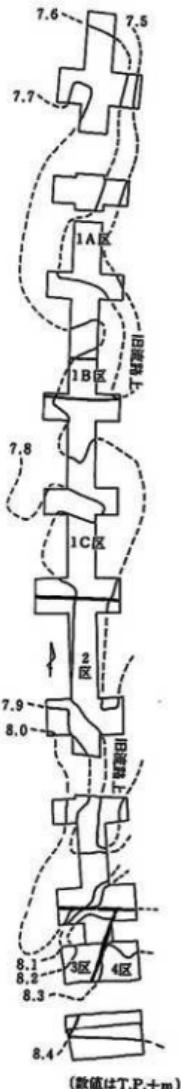
小畦3 は幅40~50cm、高さ10~15cm程度である(第11図L)。南北にまっすぐ延び、北端は大畦1に、南端は大畦2に取り付いて止まっている。

小畦4 も小畦3等と同様の規模があり(第10図K)、同じく大畦1・2を結ぶように南北にまっすぐ延びている。南端が水田78の西部に出るはずであったが、後の水流によって少しえぐられた部分にあたっており、ここでは畦畔の痕跡さえつかめなかった。

小畦5 は大畦1から南へ約5mしか検出されていないが、これより南での小畦畔の状況より推して南北にまっすぐ延びるものと推定される。規模は他の小畦と変わらない。

他の小畦畔は水田の各筆を囲うもので、幅30~50cm、高さ5~10cm程度のものである。田を格子状につくるところでは、一見畦畔が長く連続しているように見える。しかしよく見ると一筆毎、あるいは2~3筆毎に少しずつずれているのがわかる。

前記した大畦等も含めて畦畔の土壤は、それ以外の大部分の土壤と



第6図 第2水田面微地形図 (1/2000)

大略変わらない。周辺の土壤をかき取ってつくられたものと考えられる。ところが土質が同じでも色調は周辺部と異なりやや褐色味が強い。発掘後時間が経過するにつれ褐色味は更に強くなる傾向がある。断面観察によると、この褐色の強い部分は幾分すそ広がりに畦畔のかなり下位にまで及んでいた。例外はあるが、大部分の畦畔でこの事が観察された。前述した水田77と78の間での畦畔の復元は、こうした事実を逆に利用したものであった。褐色の強い部分と周辺部分との境には明確な一線を見つけにくく漸移的に変化するものなので断面図にも表現しにくいが、明記して因の不備を補っておきたい。

〔各地区の特徴〕

3本の大畦によって4つの地区にわけることができる。これを北から1～4区とする。更にその内部にまっすぐな小畦がある場合にはそれを境にA・B……と小区にわけておく（第8図5）

1区は大畦1より北側すべてとし、小畦1・2を境に北から1A・1B・1C区とする。

1A区は北限の状況が明らかでない。また水田面は、第3・第4水田の段階で多少掘り下げられていると思われるので、第6図に示した等高線も当時の状況をそのまま表わしたものとは思えない。しかし内部の小畦畔は大略当時の微地形に対応して適合的に設置されていたと思われる。ただ南限付近で小畦1に近づくと田はいびつになる。田積は50～70m²程度のものが多かったと思われる。水田1は東でかなり低くなりレベル差が大きい。東半部では第4水田土壤との間に砂層が挟在している。このすぐ東側には当時の川がある。或いはこのあたりが水田の縁辺部にあたっていたかもしれない。

1B区は南北距離が14.2～14.4m（小畦1・2の心々間距離）しかない。ここも水田面そのものは残っていない。小畦畔は数m間隔で平行して設置され、長い平行四辺形の田が並列している。田積は70～100m²程度と思われる。

1C区は南北距離が70.3～70.8m（小畦1・大畦1の心々間距離）ある。第3水田の土壤となる14層で直接覆われているのは水田31・32・35・36・37と水田33・34の一部である。これ以外はすべて微妙層を含む砂礫層によって覆われ、水田面がほぼ当時のまま残っている。南部の畦畔はほぼ格子状に設置されている。しかし微妙な地形の起伏に応じてねじれ、全体としては扇形を描くが如くである。このため北部の各筆の形状はかなり乱れている。田積は南部では50～70m²が多かったと見られ比較的そろっているが、北部では各筆の差が大きい。水田34は約28m²だが、隣接する33・39などは100m²を優に越えていたはずである。北限の小畦2には水田33のところで水口がある。ここは旧流路の直上にあたっており周辺では最も低いところである。余分の水を排除するためのものかと思われる。

2区は大畦1・2の間とし、小畦3・4・5を境に東から2A・2B・2C・2D区とする。南北距離は110.00～110.60mある。旧流路上にかかる部分もあって誤差が大きいようだが、南北一町の地区としてよいであろう。

2A区は南北距離(両大畦の心々間)が110.00mある。大畦1がここで南に少しふれているので

その分他より短くなっている。水田60~67は旧流路の直上にあたりレベルも相対的に低い。西限の小畦1を除けば内部の小畦畔はかなり乱れている。68はレベル差が大きく、とても一筆の田とは思えない。傾斜の強い所が後の水流でえぐられていて水田面が残っておらず、畦畔痕跡も明確でなかったが、或いは内部に小畦畔があったのかもしれない。68の南端は2区の中で最も高い位置にあるが、ここで大畦2に水口が設けられている。取水用のものと思われる。

2B区は南北距離(両大畦の心々間)が平均で110.40mある。大畦2の西端が南に少し張り出す傾向があるので、その分当区の西部で少し距離が延びる傾向にある。東西距離(両小畦の心々間)は平均で11.50mある。ただ北端部では12.40mと少しひろがっている。内部の東西方向の小畦畔は9.2~10.5m間隔で設けられている。平均で10m間隔とすれば、南北を11単位に分割することになる。水田70はこの2単位を1筆としている。

南西の隅点が不明なので全体の面積も不明だが、小畦4を南に延長して隅点を求めれば面積を推定できる。この面積を先の平均距離に基づいて計算すれば1269.6m²となる。しかし長さと幅は必ずしも均一ではないので、実際には少し広く1286m²前後になるかと思われる。2B区は形状からすれば一町内部を長地形に分割したものであるが面積は一段よりやや広い。

等高線は小畦3・4に沿ってまっすぐ延びる傾向にある(第6図)。また第10図K、第11図Lに見るように、小畦3・4を境に隣接する田の比高差は大きい。おそらく水田の造成の際に加えられた労力の大きさは、他地区よりも相対的に大きかったと考えられる。

2C区は南北距離が不明だが、2B区よりやや長くなるかと思われる。東西距離は北端で見る10.55m(両小畦の心々間)で、2B区よりやや狭い。この10.55mに2B区の平均幅11.50mを加えると22.05mとなり、一町の五分の一になる。東西方向の小畦畔は2B区のものと南北位置が同じである。また水田79と80の間にも畦畔があり、ここでは先の2単位1筆にはなっていない。

2D区は小畦5の西側であり、わずかの部分しか検出されていない。

3区は大畦3の西側である。大畦3は前述のように南方で先細るが、この部分も含めて境の線としておく。3区の西部は旧流路上にあたっており、かなりの傾斜でレベルを下げる。小畦畔を密に設置しないと水が溜まりにくいと思われるが、水田88の西部では畦畔が検出されず、この点不可解ではある。もっともこの部分は15層の砂が溜まっておらず、周辺で砂堆が形成された後に始めて粘土の堆積が及んだ所であるから、この間に多少荒らされ、畦畔が失われた可能性はある。

4区は大畦3の東側である。調査区内では最も高い位置にある。長原古墳群の立地する台地の先端部にあたっている。内部の小畦畔は比較的整っているが、未調査部分を境に畦畔の方向がくい違っている。大畦3の水口は4区の最も低い位置にある。

[水利]

水路は検出されていない。畦畔には所々で水口が切られている。あり方は様々である。田の隅にあるもの(40・45、70・71の間等)、田の一辺の中央にあるもの(56・57の間)などがある。一ヶ

所に水口が集中する部分もある(75・76・85・86の交点)。法則性はないかの如くである。

水口はいまだ充分な定義がなされていない。定義付けを可能にするような検出状況が、これまでなかったからに他ならないが、それは水田廃絶の季節によるとも言われる。しかし水口の存否に関わらず、当期の水田は一つの田から隣の田へ余剰水を移すという方法で用水が流されている。この連続によって全体にまくばられている。その際水がかりの悪い田に便宜的に設けられたのが水口なのかもしれない。とは言え、水田40・45の間のように水口の位置をあらかじめ予定して畦畔を設置したらしい場所もある。微地形を克服して水をまくぼるためには、水口の位置がおのずと決まっていたということも当然予想される。

当調査区では大畦にも水口が検出された。大畦2と3の水口である。大畦2の水口は2区の最も高所にある。2区は地形上、西から用水を受けていたはずだが、内部に旧流路の痕跡である凹地が走るために68・69付近にまでは行き渡らない。この行き渡りにくい場所に水を配るためにあって大畦を切ったものと思われる。大畦3の水口は4区の最も低い位置にある。ここから3区の水田88に水を下すのであるが、水田88は3区の隅にあって水がかりが悪く、同時に2区の最高所に隣接している。用水は大畦に切られた2ヶ所の水口を通って4区→3区→2区へと流れたであろう。この水の流れは既に見たように単に排水のための言わば通過交通だけでなく、用水分配の経路でもあった。すなわち大畦で区切られた各地区は水利的には分離されていない。調査範囲が限られ、また水路との関係が不明なので、これが水田全体の中でどのように位置づけられるのかはわからない。しかし部分的ではあれ、このような現象を想定できるということは、大畦の設置が必ずしも水利的な分割を前提としていることが言えるのかもしれない。

用水の水源は旧東除川にある。旧東除川は近世初期まで調査区の西約400mの所を北走していた。この川は7~8世紀当時は一本ではなく何本かの分流の集合であった(第V章参照)。各分流からは水路を延ばし、水路からは支水路を延ばして周辺の水田を潤していた。現段階では分配の経路全体まではわからない。しかし前述の事情からすれば、畦畔で表現されるまとまりと水利的にまとめられる範囲とが必ずしも一致していないかった可能性がある。

(足跡)

1C区以南の水田面には各地区を通じて人と牛の足跡がついている。足跡内には15層の砂が入っている。一般に牛の足跡の方が深く、地山面下1~3cmまでくい込む例がある。第7図はその例であるが意味不明の凹みと共に牛の足跡がついている。ここは2区の北端部で、大畦1の直下にあたっている。足跡内には砂ではなく水田土壤と同じ粘土が入っている。地山面での足跡には第2水田期以前のものも含むことは明らかである。牛の存在そのものは後述する第1水田期にまでさかのぼる可能性が高い。しかし唐鑄による耕起の痕跡はつかめなかった。牛がどのように使われていたかは残念ながら明らかではない。

1A・1B区では1C区以南の水田面とは比較にならないほど多くの凹みがある。これはこの地区的水田土壤が、結果的に第3・第4水田の床土の役割を果たした段階で新たに生じたものと

思われる。

[跡跡]

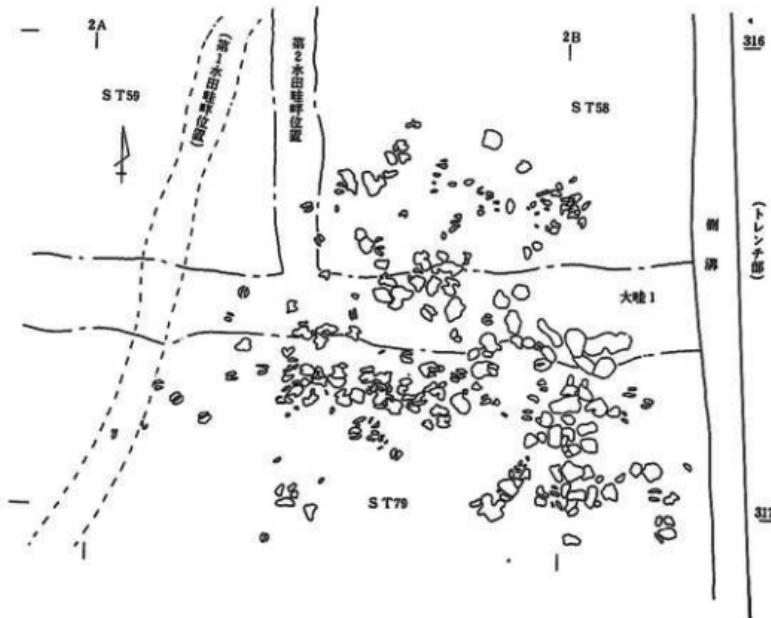
3区の水田88内部にある。89・90の田境の畦畔とほぼ同方向で、2~3列をなしてまっすぐ縱に掘り進め、大畦2にまでいたっている(図版十三)。内部には砂がつまっている。元々あった小畦畔を鋤でつぶした痕跡かと思われる。第1水田ではここに畦畔があった。

第1水田(第8図6、28~29頁)

第2水田の土壤を掘り下げていく過程で、それとは異なる褐色味の強い粘土の帯を確認した。地山のブロックを含む場合もある。その帯は明確でない部分もあるが幅30~50cm程度のもので位置・方向に下記の2種類があった。

- ①第2水田の畦畔と同位置・同方向のもの
- ②第2水田の畦畔とは異なる位置・異なる方向のもの

である。①は既に記したように第2水田の畦畔における褐色味の強さが下位にまで及んだものである。一方②はこれとは異なり、第2水田以前の畦畔の痕跡ではないかと考えられた。これは断面観察によって確認された(第11図N)。これを第1水田とする。



第7図 地山に喰い込む足跡(71グリッド S=1/60)

②のような畦畔痕跡は第2水田の2区を中心とした範囲にしか存在しなかった。1区においては一部を除く他は先の①に属するものしかなかった。ただその中には位置が少しづれる部分もあった。このずれは畦畔を維持するにあたって少しづつずれた可能性もあり、これだけではそれが第1水田の時期まで遡るという保証はない。断面観察によってもこの畦畔痕跡そのものを層位的に明らかにするに至らなかった。しかし例えば第10図1に見るように、第2水田の畦畔の下で、層位的には第1水田土壤の続きである暗青褐色粘土(17層)の下面が段をなしている。この段の上には第1水田期既に畦畔のあった可能性がある。とすればここでは第2水田と第1水田の畦畔位置が多少のずれこそあれほぼ一致していたことになる。第8図6にはずれの見られた部分だけを示したが、1区では他にも点線位置を参考に畦畔を想定することはできる。

最南部の長原15調査区においても、先の①に属するものがあった。ところがここでは畦畔を明らかに上下2層に分離することができた(第11図P)。この下位の畦畔も第1水田のものとする。

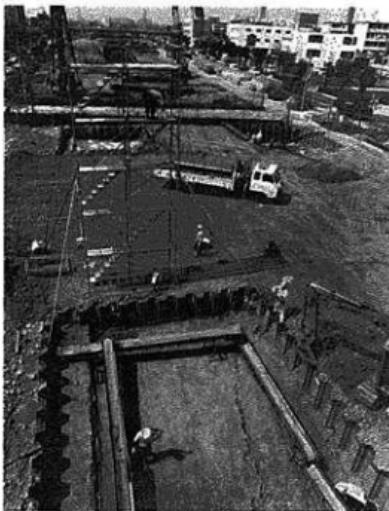
第1水田は、水田面そのものが残っているわけではない。南部を別にすると、畦畔の痕跡を断片的につかんだに過ぎない。したがってその痕跡もすべてが同時に存在したとは断定できない。異なる時期の畦畔の累積ということも考えられる。今は第2水田以前のものとして一括せざるを得ない。第1水田の土壤はおおむね暗青褐色粘土で、南部では紫灰色から黒褐色へと漸移的に変化する部分がある。南方ほど第2水田土壤との相違が明確である。

畦畔は主として南西—北東方向もしくはそれに直交する方向をもっている。大畦・小畦の区別はあり、大畦は第2水田の大畦3の直下にある(第11図O)。ただし大畦内での地山の段の位置などを見ると、当初は大畦とは言え、第2水田期のような圧倒的なものではなかったかもしれない。大畦の南への延長部は長原15調査区にあるが、ここでは一般的な規模になっている。この点は第2水田期にそのまま持ち越されている。

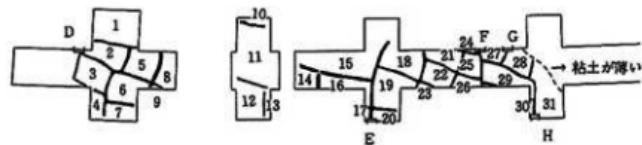
田積がわかる例はないが、おおむね40~70m²程度のものが多かったと思われる。水田面が残っていないためにレベル関係は不明である。



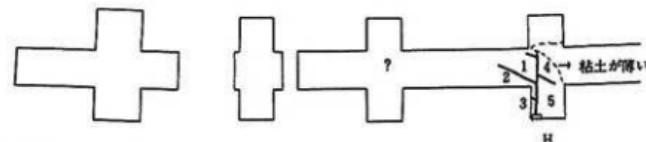
第2水田(J 区)撮影準備



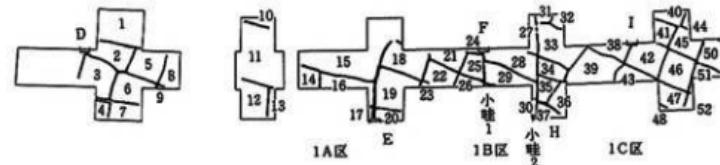
扯張部(J 区)調査準備



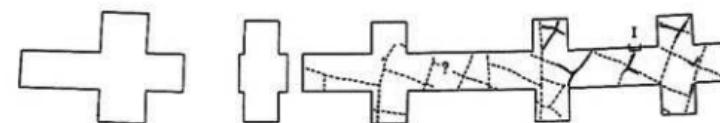
3. 第4水田 (1/1500)



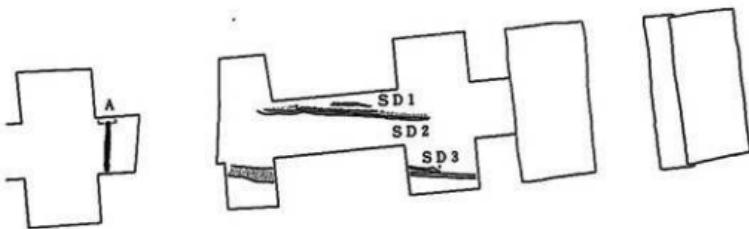
4. 第3水田 (1/1500)



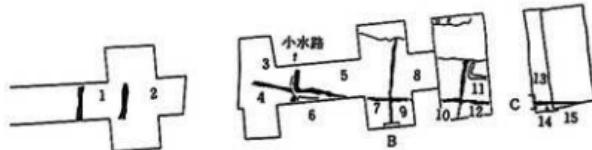
5. 第2水田 (1/1500)



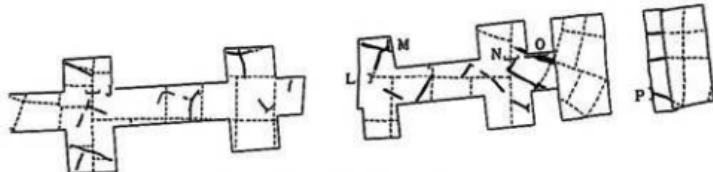
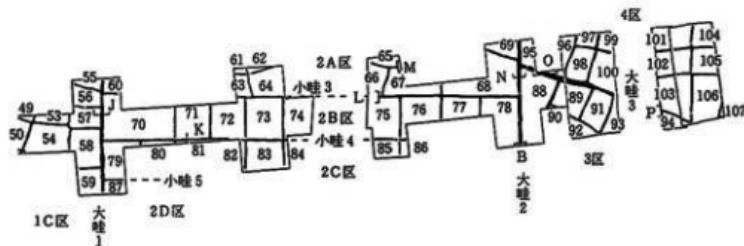
6. 第1水田 (1/1500) 点線は第2水田の畦畔位置



1. 第7水田 (1/1000) 網部は畦畔想定位置



2. 第5水田 (1/1500)



第8図 各期の水田 (1/1000, 1/1500)

各期水田のレベルと面積

第2表. 第7水田(T.P.+m, m²)

水田番号	レベル	面積
1	8.66	?
2	8.67	45以上
3	8.68	78 +
4	8.68	45 +
5	8.67~8.87	372 + ?
6	8.88	230 + ?
7	8.83	34 +
8	8.97	?

第3表. 第5水田(T.P.+m, m²)

水田番号	レベル	面積	水田番号	レベル	面積
1	8.35	?	9	8.57	201.0以上
2	8.46	106以上?	10	8.50	39.0 +
3	8.51	152 + ?	11	8.58	19.0 +
4	8.41~8.50	111.5 +	12	8.64	68.0 +
5	8.50	137.5 +	13	8.62	28.0 +
6	8.53	233.0 +	14	8.66	?
7	8.50	7.0 +	15	8.66	7.0以上
8	8.45	47.0 +	16	8.69	10.0 +

第4表. 第4水田(T.P.+m, m²)

水田番号	レベル	面積	水田番号	レベル	面積	水田番号	レベル	面積
1	7.60~7.72	105.55以上?	9	7.79	2.15以上	17	7.77	4.0以上
2	7.70	55.3以上	10	7.56	12.1 +	18	7.72	72.5 +
3	7.72	60.5 +	11	7.60~7.77	161.8 + ?	19	7.75	79.0 +
4	7.73	23.5 +	12	7.73	64.5以上	20	7.78	23.0 +
5	7.80	54.3 +	13	7.76	12.7 +	21	7.80	36.8 +
6	7.77	59.5 +	14	7.70	29.1 +	22	7.81	41.8 +
7	7.77	36.5 +	15	7.58~7.70	191.8 + ?	23	7.82	3.5 +
8	7.80	41.0 +	16	7.71	46.0以上	24	7.83	2.0 +

第5表. 第3水田(T.P.+m, m²)

水田番号	レベル	面積
1	7.79	43以上
2	7.80	40 +
3	7.80	4 +
4	7.84	?
5	7.85	71 + ?

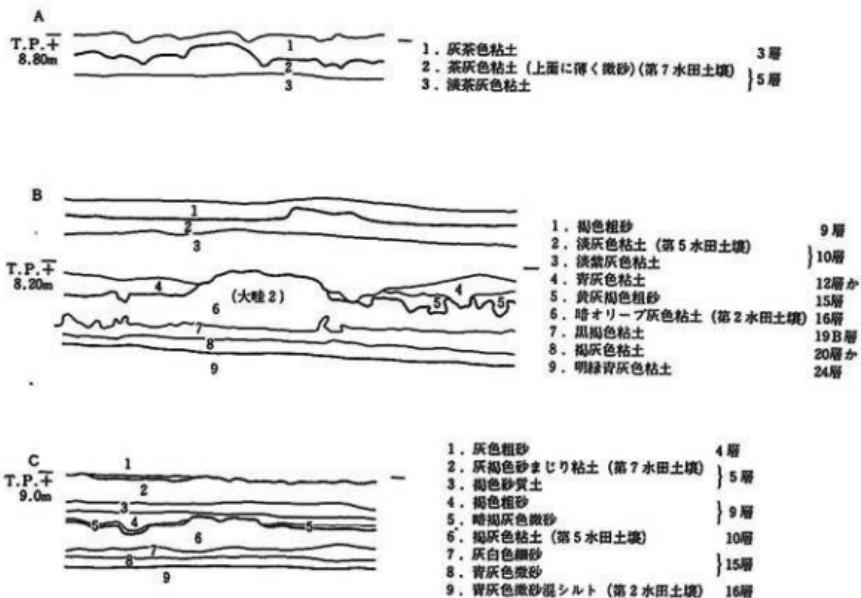
第6表. 第2水田(T.P.+m, m²)

地区	水田番号	レベル	面積	地区	水田番号	レベル	面積
1 A 区	1	7.46~7.62	108.2以上?	1 A 区	10	7.48	12.0以上
	2	7.62	54.1以上		11	7.40~7.65	163.0 + ?
	3	7.63	69.1 +		12	7.65	65.3以上
	4	7.65	14.0 +		13	7.65	12.7 +
	5	7.70	53.8 +		14	7.56	29.8 +
	6	7.70	58.4 +		15	7.48~7.58	194.5 + ?
	7	7.68	38.5 +		16	7.58	43.1以上
	8	7.68	41.0 +		17	7.63	3.5 +
	9	7.70	1.6 +		18	7.61	72.7 +

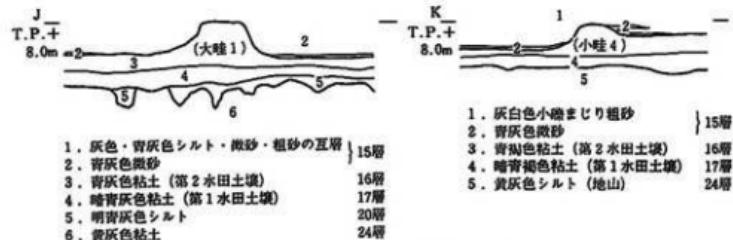
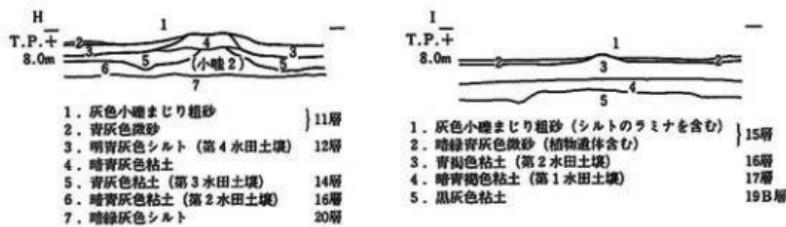
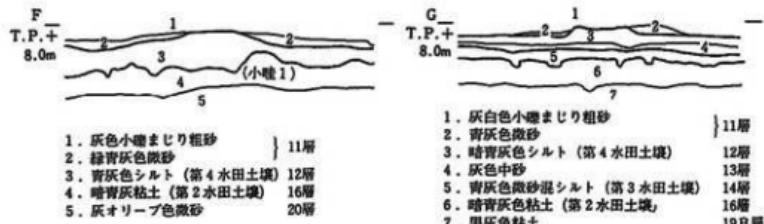
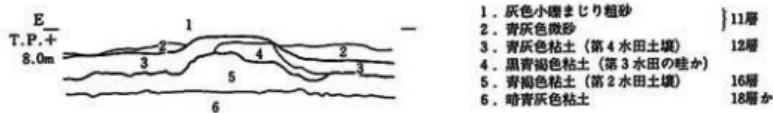
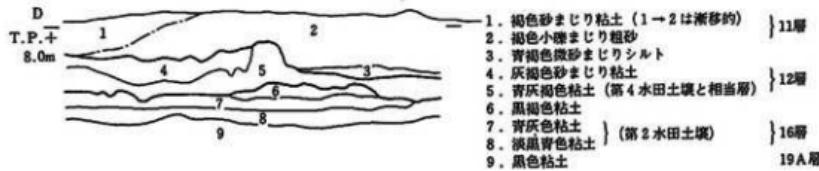
地区	水田番号	レベル	面積	地区	水田番号	レベル	面積
1 B 区	19	7.60	77.1以上	1 C 区	36	7.72	24.1以上
	20	7.60	20.7 +		37	7.73	12.4 +
	21	7.71	35.1 +		38	7.74	28.7 +
	22	7.69	38.4 +		39	7.69	86.2 +
	23	7.68	4.0 +		40	7.75	23.8 +
	24	7.65	3.0		41	7.77	26.9 +
	25	7.70	26.6		42	7.77	71.1 +
	26	7.70	15.5以上		43	7.76	27.6 +
	27	7.63	17.2 +		44	7.77	6.2 +
1 A 区	28	7.67	68.0 +		45	7.80	51.6 +
	29	7.69	50.5 +		46	7.80	63.2
	30	7.70	3.9 +		47	7.81	33.7以上
	31	7.61	7.7 +		48	7.75	2.0 +
	32	7.67	8.5 +		49	7.77	3.9 +
	33	7.65	94.6 +		50	7.78	56.1 +
	34	7.67	27.9		51	7.79	18.4 +
	35	7.69	30.4		52	7.83	8.4 +

第6表のつづき

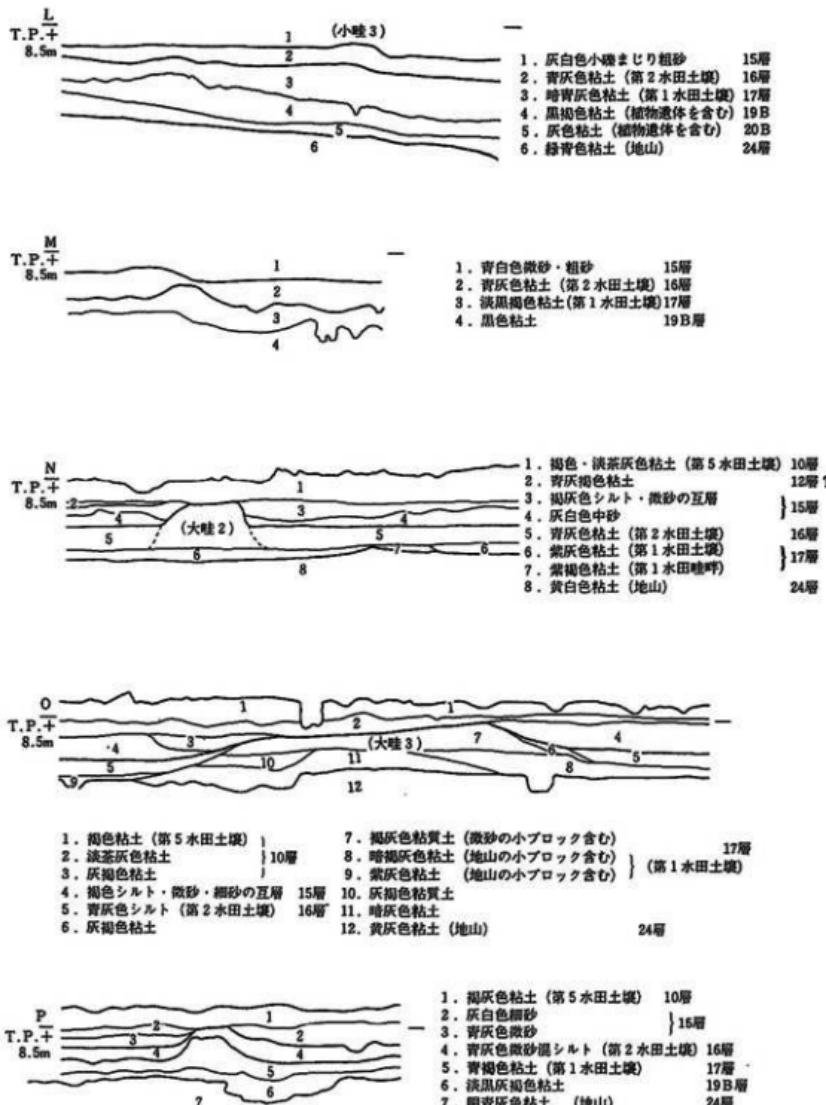
地区	水田番号	レベル	面積	地区	水田番号	レベル	面積	地区	水田番号	レベル	面積	地区	水田番号	レベル	面積
	53	7.76	22.6以上	2	67	7.79	55.2以上		81	7.88	8.1以上		95	8.25	24.0以上
	54	7.79	70.4 +	A	68	7.80-8.2.m	126.6 + ?		82	7.88	12.6 +		96	8.29	21.3 +
I	55	7.70	14.1 +	区	69	8.14	22.8 +	C	83	7.94	65.1 +	区	97	8.31	19.1 +
C	56	7.75	29.6 +		70	7.77	174.6 +		84	8.00	5.5 +		98	8.33	41.5
区	57	7.78	38.5 +		71	7.79	77.5 +		85	8.04	22.5 +		99	8.33	24.3以上
	58	7.80	69.8 +	2	72	7.77	84.0 +		86	8.01	7.5 +	4	100	8.34	61.8 +
	59	7.82	33.4 +		73	7.79	105.9	2 D 区	87	7.83	19.5 +		101	8.37	57.6 +
	60	7.66	16.6 +	B	74	7.88	66.5以上		88	7.85-8.25	106.2 + ?		102	8.38	56.5 +
	61	7.73	4.3 +		75	7.80-7.96	65.2 +		89	8.26	57.4 +		103	8.39	88.0 +
2	62	7.76	6.6 +	区	76	7.84	64.6 +	3	90	8.25	0.6 +	区	104	8.41	29.2 +
A	63	7.69	20.2 +		77	7.88	48.5 +		91	8.23	57.2		105	8.41	38.1 +
区	64	7.75	55.9 +		78	7.95	114.5 + ?	区	92	8.14	18.3以上		106	8.43	77.3 +
	65	7.82	16.0 +	2	79	7.81	49.8 +		93	8.21	26.8 +		107	8.45	1.7 +
	66	7.77	22.2 +	C 区	80	7.85	11.9 +		94	8.39	20.6 +				



第9図 各期水田の畦畔断面図 (A~C、1/40)



第10図 各期水田の畦畔断面図(D~K, 1/40)



第11図 各期水田の畦畔断面図 (L～P, 1/40)

第4節 古墳時代後期

当調査区が水田化される直前の古墳時代中期から後期の遺構は、18層（青灰色粘土、T.P.7.5m）と20層（緑灰色粘土、T.P.7.3~7.5m）で検出された。

18層は、層序の項でも触れたように、16層（青灰色粘土）の掘削中に、19~24層の搅拌された薄層が東西に幅6~7mに渡って帯状に観察されたこと、また、この薄層の下面から開鑿された遺構（SD01）が検出されたことから、この搅拌土の下面に生活面の存在を認め、16層と分離した。しかし、18層は、搅拌土が分布する範囲より外側では16層と質的にも全く同じであり、連続堆積としか捉えることはできない。I区でも16層内から掘削された遺構が検出されたが、それが確実に18層と対応するか否か、今回の調査では判断できなかった。

305地区以北の20層上面で検出されたこの時代の遺構は、断面観察から16層内や19層（黒色粘土層）上面から掘削されている。しかし、19層は厚層が薄く不安定であったことから20層上面を検出面とした。この面で検出された古墳時代中後期の遺構としては溝、ピットがある。また、古墳時代初頭までに形成された遺構が、19層の堆積をもってしても完全に埋没せず小さな窪みとなって残っていたと考えられる。その窪みは炭化物の小粒を含む暗青灰色粘土層の堆積により完全に充填されるが、この粘土内から、数点ではあるが5世紀代の須恵器が出土している。

調査区の南部、I区南端、J区ではこの時期の遺構は検出されなかった。しかし、縄文時代後期以前に24層に深く刻まれた開析谷（流路1・2）が遺存していた。19B層はその区部に堆積した粘土層で5~7世紀前半までの遺物が出土している。（付図1-3参照）

18層上面の遺構

SD01（第31図78） G区中央部で検出された西北から東南に流下する溝である。16層の掘削中に、乳灰色砂質粘土、緑灰色粘土、黒色粘土の搅拌土が約7mの幅で斑文状に東西に延びていたことから確認できた。開鑿面のレベルは、T.P.7.25m付近である。

溝は南肩に小さい副水路をもつ二重構造をなし、幅3.5~4.2mを測る。このうち主水路は、幅2.7~2.9m、深さ1.1m、副水路は幅0.95m、深さ0.5mを測る。掘削断面はそれぞれV字型を呈



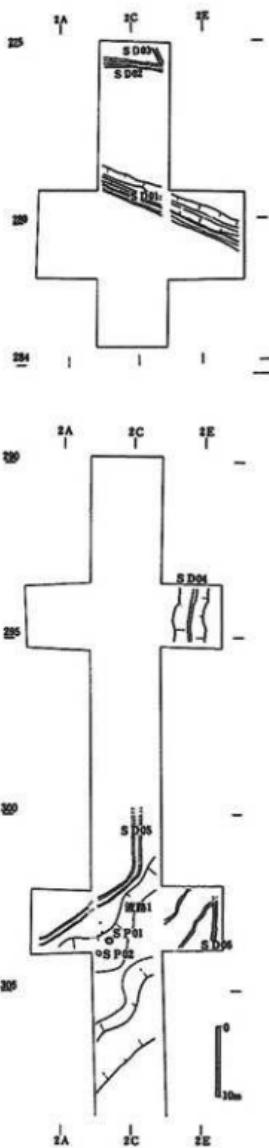
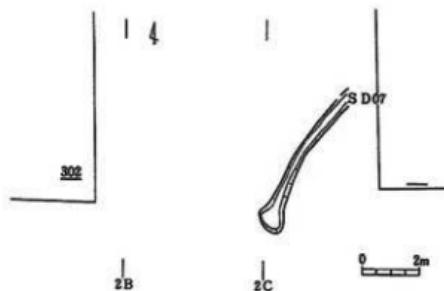
第12図 SD01断面実測図 (S-1/40)

する。主水路と副水路の間にある内堤は、幅0.1~0.4mを測り、上面は開墾面より10~30cm低く押さえられている。

埋土は、副水路が底部に暗緑灰色粘土、暗青灰色粘土が15cmの厚さで堆積し、その上は、乳灰色粘土、黒色粘土、青灰色粘土のブロック土で肩口まで一気に埋め戻されている。主水路は溝底部に部分的に黒灰色粘土層や植物遺体の堆積が観察されるが、溝底から肩口まで副水路と同じブロック土で埋め戻されていた。この埋土の情況から、副路には水流があったと考えられるが、主水路は副水路からの溢水を受ける程度の空堀であったか、泥土の浸漬後、短時間のうちに埋め戻されたものと考えられる。

S D01が開墾時から副路を造る二重構造であったのか、前後関係があるかは、今回の約20mの範囲内では判断できなかった。河内地方の弥生~古墳時代の遺跡で、同時期に平行して開墾された溝は数多く報告されているが、S D01のような二重構造を持つ例は無いようである。類例を待って、その機能等について検討を加えたい。主水路の擾拌土から第31図に示す須恵器が1点出土している。また、弥生時代の土坑群を壊して開墾されていることから、その混入とみられる土器(第33図 126)が検出されている。

S D07 16層の掘削中に302地区で検出された小溝である。検出面は、T.P.7.45m 前後で S D01より約0.2m高い。溝は、東北から西南への流路を持ち、幅0.4m、深さ0.15mを測る。調査区の中央で僅かに丸く脹れて終結する。こ



第13図 S D07平面実測図(左)・古墳時代の遺構概要図(右)(G-I区)

の溝は、連続堆積する16層内にあり、断面観察でも生活面（不整合面）の存在は確認できず、遺物も出土しなかったが、層位的な関係からSD01と同時期頃と考えられる。

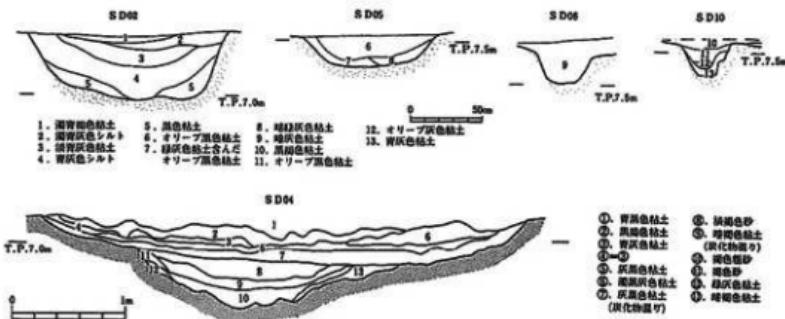
20層上面の遺構

20層（青灰色～緑灰色微砂）、は310地区以北に堆積しているが、その上面で検出された遺構は、溝6条とピットである。また302～307地区、322～336地区では調査区を西南から東北に横断する開析谷がある。

SD02（第31図79～81） G区の北端で検出された西から東に走行する溝である。20層上面で確認したが、掘削面は、断面観察からG区の北部にのみ16層内のT.P.7.3m 前後に認められる黒褐色粘土層の下面である。溝は幅1.0～1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は、下層に壁面から流入した黒色粘土が認められ、その上に青灰色シルト～粘土が堆積する。遺物は下層の青灰色シルト層から6世紀前半の須恵器が出土している。

SD03 G区の東南端2D 276地区で検出された西北から東南に流下する溝である。南側はSD02に切られている。19層上面から開墾されており、幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は灰黑色粘土、暗灰色粘土である。検出長が短かく遺物は出土していない。

SD04（第31図82～87） I区北部2E 295地区で検出された、南から北に流下する溝である。19層上面から掘削され、両側にテラスを持つ2段掘り構造である。規模は上部で幅4.3m、深さ0.8mを測る。テラスは東側が0.25m、西側は0.4m開墾面より低く、溝の幅は2.3mを測る。埋土はテラスを境にして上下2層に別れ、下層は褐色の砂・粘土が堆積しているが、上層は青灰色粘土、黒褐色粘土、青黑色粘土によって埋没している。以上の埋土の状況から、この溝は土砂の堆積が進んだ段階でテラス部まで浚渫されたこと。また、東西のテラスの高さが異なり、凹凸が激しいことから、浚渫時に掘削を浅くし、テラスを溝底部として東西両側に拡幅された可能性が高い。この溝の下層の褐色砂層内からは、弥生時代中期と庄内式土器が出土し、上層の青灰色



第14図 SD02・04・05・06・10断面実測図

粘土、黒褐色粘土からは5~6世紀頃の須恵器、土師器が出土している。

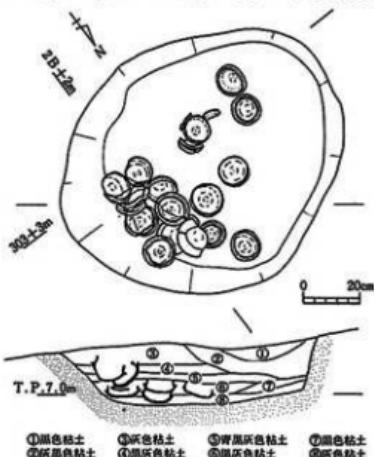
S D 05 300~304地区にかけて検出された、幅0.9~1.3m、深さ0.25mを測る溝である。2D 300地区に始まり南流するが、302地区で流路1に平行するように西南に曲がり調査区域外に延びる。調査区は台地の北東の縁辺に立地しているが、溝底のレベルは南に緩やかに下がり、2Bライン以西ではほぼ平坦であることから南流するものと考えられる。埋土は、掘削面からの暗緑灰色粘土とオリーブ黒色粘土であり、遺物は出土していない。

S D 06 2F 303区で検出された南から北に走る小溝である。幅0.4m、深さ0.2mを測る。北側は流路1と埋土が酷似しており、断面観察でも両者を鑑別することはできなかった。遺物は出土しなかった。

流路1・2（第32図88~98） 当調査区では縄文時代晩期以前に24層に刻まれた開拓谷が2ヶ所検出されたが、その谷を埋没させる土砂の堆積速度が遅く、古墳時代後期頃まで残っていた。流路1は304地区から308地区にかけて検出された西南から東北に延びる広い窪地である。弥生時代前期頃に堆積する20層（緑灰色シルト）によりなだらかな傾斜を持つ窪みが形成されていた。この中央部のレベルはT.P.6.9m前後を測る。そこに堆積する19B層は、弥生時代後期頃から6世紀後半頃まで徐々に堆積したと考えられる。この19B層内からは6世紀代の須恵器が出土した。

流路2は318地区から336地区にかけて検出された。基本的には流路1同様に西南から東北に延びると考えられ、336地区から332地区にかけて調査区を西南西から東北東に横断するが、2E~2G 326地区から318地区にかけては、西、北に大きく蛇行し、24層を深く浸食していた。この窪地を埋没させる古墳時代の堆積層は19B層で、6世紀頃までの遺物を包含していた。33~34は2G 325区の東側矢板際で一括して検出された。出土情況から遺構の存在した可能性が高いが、矢板打設の際に擾乱をうけており、遺構を確認することはできなかった。

S P 01 (第32図99~117) 2C 304地区で検出された。流路1北側肩部の東南への緩やかな斜面に掘られている。検出面（緑灰色シルト）での形状は、東西に僅かに長い楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.95m、深さ0.2mを測る。ピット内から22点の須恵器が検出された。土器はピットの東端近くに多く、口縁を上に向け2~3段に積み重ねられた状態であった。器種の内訳は、杯蓋5点、杯16点、脚部を欠く高杯1点である。埋土は黒色から灰色の粘土で19B層内から掘削されたと考えられる。



第15図 S P 01平・断面実測図

S P 0 2 ～ 0 4 S P 01 の周囲で同時期と考えられるピットが 3 基検出されている。すべて円形を呈し、S P 02 は径 0.7m 、深さ 0.5m 、S P 03 は径 0.35m 、深さ 0.15m 、S P 04 は径 0.2m 、深さ 0.1m を測る。埋土は S P 01 と同様の暗灰色粘土層である。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

第 5 節 弥生時代～古墳時代初頭

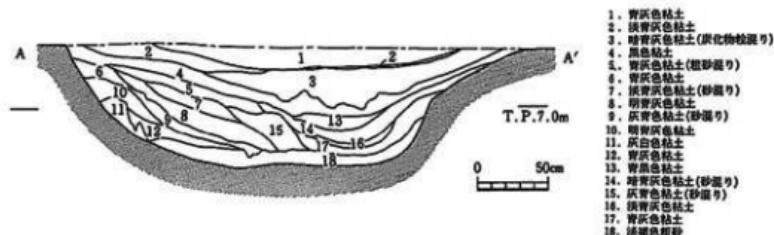
弥生時代中期から古墳時代初頭の庄内式土器を出土する遺構は、310 地区より北側に堆積する 20 層（緑灰色シルト層）上面で検出された。20 層は、E・F 地区での調査から弥生時代前期頃に堆積したと考えられるが、当調査区では弥生前期の遺物は出土しなかった。

20 層上面で検出された遺構は流路 1 より北側の 275 地区から 302 地区の間に分布している。20 層は 1 内でレベルが約 30cm 低くなり、またその南側では 20 層のレベルが漸移的に高くなるとともに層厚が薄くなり、310 地区付近で消滅する。流路 1 の浅く広い低地が城山遺跡の集落の南限として地形的・地質的に区画する役割を果していたのかもしれない。

遺構としては、数条の溝と 172 基の土坑が検出された。遺構検出の情況を記すと、遺構の埋土は主に黒色粘土であるが、大型の遺構ではこの粘土では完全に埋没せず、なお中央部に窪みが残っていた。この窪みを充填するのは炭化物の小粒を含む暗青灰色粘土層で、この層内から 5 世紀後半頃の土器が数点出土している。また、検出面となった 20 層は、G 区と I 区の 295 地区以北では様子が異なっていた。すなわち、G 区や I 区南部（296～302 地区）では 20 層は比較的プライマリーな状態をとどめていたことから土坑の壁面や坑底の確認を平易に行なえた。しかし、H・I 区 295 地区までは、20 層及び 24 層（淡青灰色粘土か黄灰色粘土）が著しく搅拌され、20 層上面と 24 層（坑底）で検出された遺構で確實に対応すると認められたのは 1 基のみであった。このため、H・I 地区では埋土の黒色粘土層か暗緑灰色粘土層下面を坑底とする上層遺構、及び 24 層を検出面とする下層遺構の 2 面に分け概説する。

溝

S D 0 7 H 区の 288 から 289 地区にかけて検出された西北から東南に走る溝である。検出長は



第 16 図 S D 07 断面実測図

15mほどであったが、上肩部の幅は3.3～2.3mまで1mの開きがあった。深さは0.85mを測り、開鑿断面は丸みをもった逆台形を呈する。埋土は溝底に沿って褐色粗砂が堆積する。その上は溝の中位、T.P.7m前後まで24層や20層からの出土物や砂混りの暗青灰色、黒色粘土が堆積する。上層の1～3は古墳時代中期頃に堆積する青灰色粘土である。最下層の褐色粗砂内から弥生時代後期の土器片が出土したが他の層内から遺物は出土しなかった。

S D 0 8 294地区のSK75付近から始まり2D地区を北流する小溝である。溝は幅0.4～0.5m、深さ0.2mを測り、断面はU字形を呈する。埋土は淡青灰色シルトを粒状に含む黒色粘土である。溝はI区北端で幅を広げ東に向かうが、H区でも同規模の北流する溝が検出されており、同一の溝と考えられる。溝の時期は、土坑群より新しくなると思われるが遺物が出土していないため不明である。

S D 0 9 276地区で検出された東流する溝である。幅3.1m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色粘土であり、埋土内から遺物は出土していない。

土坑

20層で172基、24層上面では夥しい数の土坑群が検出された。代表的なものについて若干説明を加えたのち、全体を概説したい。

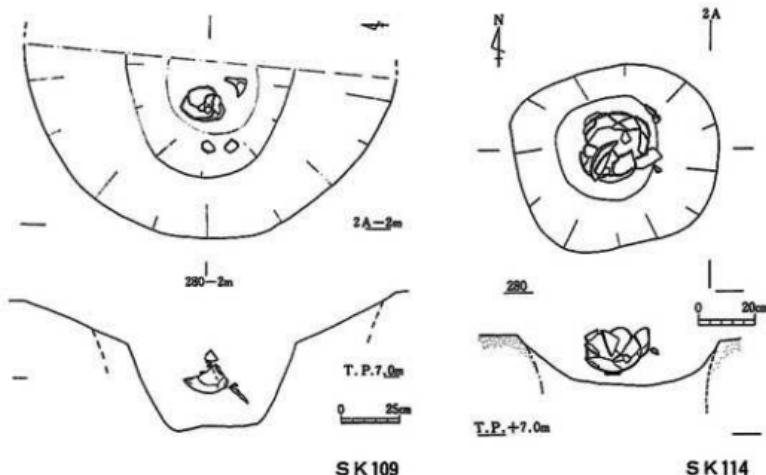
S K 0 4 2 C 277地区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径(南北)1.85m、短径1.65mを測る。掘り形は、緩やかに傾斜する肩口から、中央はほぼ垂直に掘り込み、1.1mの深さに達する。24層に穿たれた底部は横に拡張されて袋状になり、底面は凸凹している。埋土は下層に24層と黒色粘土の小ブロック土を多量に含む緑灰色粘土、中層にはブロック土の少ない暗緑灰色粘土、上層には黒色粘土、炭化粒を含む暗青灰色粘土が堆積する。遺物は出土していない。

S K 2 4 2 D 282地区で検出された。西側はSK22と接する。規模は南北1.6m、東西は0.9mを測る。暗緑灰色粘土下面まで0.3mを測る。この層内からスタンプ文を持つ弥生後期の壺(127)が出土している。24層上面では、この土坑はSK18・19、22と一緒に南北4.7m、東西4.5m以上のアーバン状プランを呈し、ほぼ垂直の壁面をもつ土坑となっていた。また、土坑内にも黒色粘土や暗灰色粘土を埋土とする小ピットが観察された。

S K 2 8 2 D 282地区で検出された。南北1.8m、東西1.6mを測り、蓋つな楕円形を呈する。壁面は垂直に近く、深さ0.85mを測る。底面は凸凹しているが、横方向への拡張は行なわれていない。埋土はSK04と同じである。遺物は出土しなかった。

S K 109 2 A 280地区で検出された1.6m×1.6mを測る丸味をもつ三角形状の土坑である。深さ0.75mを測り、底部は袋状に拡大し、底面は平らに近い。埋土は下層に24層、青灰色粘土のブロックを含む暗緑灰色粘土、中層は緑灰色粘土、上層は黒色粘土、青灰色粘土である。土坑の中層で口頭部を欠く弥生後期の壺(122)が検出された。

S K 114 SK109の南に位置する小土坑である。規模は0.65m×0.7mを測る。掘り形は播鉢形に掘られた後、東に抉って掘り下げている。埋土は下層に24層のブロックを含む暗緑灰色粘土、



第17図 SK109・114土器出土状態実測図

黒色粘土である。黒色粘土の最上層から弥生時代中期末葉頃の土器(118)が検出されている。土器は19層を除去した際にすでに一部が露出していたが、底部を下にして据えられたような情況であり、胴部上半は内部に落ち込んでいた。

S K 0 2 G区のDライン付近で幅0.3m程度の黒色粘土層を掘削したところ、黒色粘土は下に潜っていた。これは微地形の関係で20層が東に約20cm下がっていたためであるが、調査当初はこのことを把握できず、20層上面の調査後、全体を約0.2m掘り下げ、造構を検出した。この面では、SK02下層で8基、SD09下層で1基、2E281地区で2基の土坑が検出された。

S K 208 2C 277地区のSD09下層で検出された径1.05m×0.95mの橢円形を呈する土坑である。ほぼ垂直に掘り込まれ、深さ0.6mを測る。

S K 203 2D 278地区で検出された径2.15m×2.05mを測る大型の土坑である。なだらかな肩口から24層ではほぼ垂直の壁面を持ち、深さは0.95mを測る。埋土は下層に24層のブロック土、中層にブロック土を含む暗緑灰色粘土、上層に黒色粘土が堆積する。坑内から後期の甕(144)の他中期から後期の土器が数点出土している。

S K 206 2D 279地区で検出された不定形の大型土坑である。南はSD01に切られるが、東西3.85m、南北3.3m以上を測る。土坑は輪郭や坑底の形状から度々の掘削が推測されるが、下層の埋土は24層の小ブロック土を多量に含む暗緑灰色粘土であり、土坑の重複回数を観察することはできなかった。また、この土坑は24層の粘土を横に抉り取り、SK08とトンネル状に繋がっていた。埋土中層の黒色粘土を中心に下層の暗緑灰色粘土などから弥生中期から後期の土器が出土している。完形の土器は1点だけで小破片が多い。

S K121~123 2 B 281地区で連接して検出された小土坑である。

20層上面では幅1mの黒色粘土が帯状に延びていたが、これを除去すると三基の埋土を同じくする土坑が現われた。いずれも不整形な梢円形を呈し、SK121は0.6m×0.8m×0.6m、SK122は0.8m×0.45m×0.4m、SK123は0.75m×0.5m×0.5m(南北×東西×深さ)を測る。土坑はほぼ垂直に掘り込まれ、埋土は上層に暗灰色粘土、中下層には24層のブロック土を暗緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。また、SK120はSK119より新しい小土坑で、黒色粘土を除去した際に検出された。土坑は径0.5mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。

埋土はSK121と同じである。

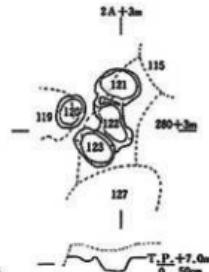
S K137 2E 281地区で検出された黒色粘土下面までは梢円形を呈する土坑である。規模は2.45m × 2.1m × 0.4m を測る。黒色粘土の下層は24層のブロックを含む暗緑灰色粘土が堆積するが、この粘土はS K136、138と繋がり、東西7.6m、南北4.6m 以上のアーバ状の大型土坑となる。壁面はほぼ垂直で、底面は複雑に凹凸し、最深部では1.0m 以上ある。遺物は坑底付近から中期後半から後期頃の土器（124・125・129・136・140）が出土している。

S K 4 8 H区 288地区で検出された。直つなぎ円形を呈し、長径3.45m、短径1.7m、深さ0.3mを測る。埋土は上から炭化物を含んだ暗青灰色粘土、黒色粘土、青灰色粘土が堆積する。この下層は黄灰色粘土、黒色粘土、緑灰色シルトの小ブロックを含んだ暗緑灰色粘土が広がっていた。坑内から遺物は出土していない。

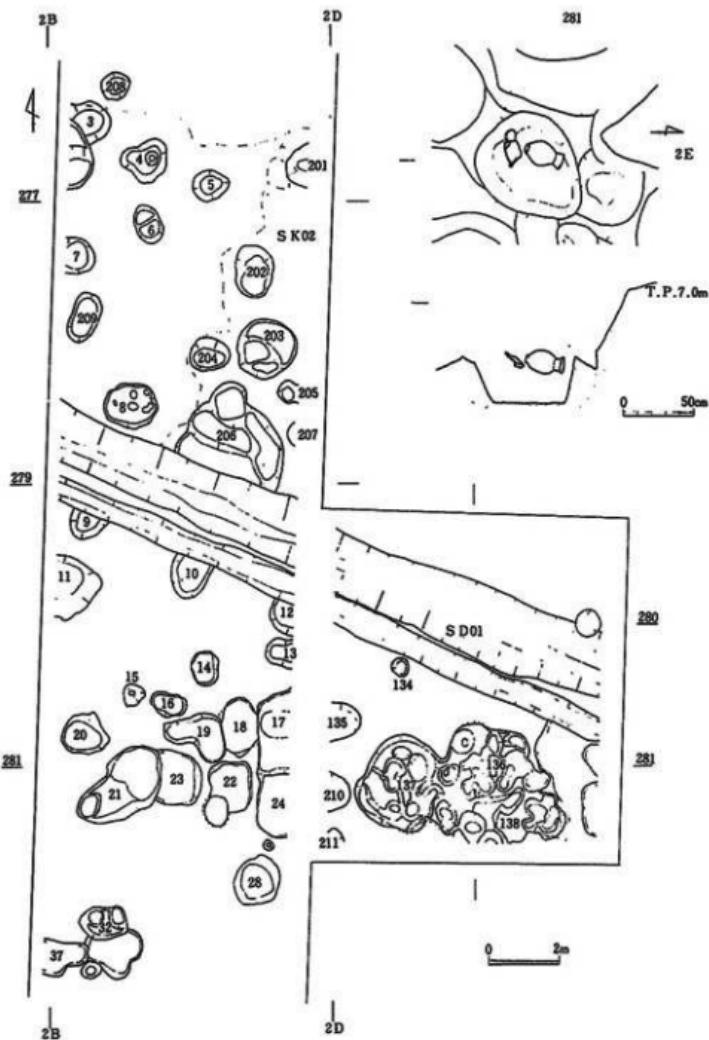
S K 5 6 I区2D 291地区で検出された歪つな三角形状を呈する土坑である。長径2.25m、短径1.65m、深さ0.3mを測る。土坑の中央をSD08に切られるが、埋土が共に黒色粘土であるため、その掘り形は判然としない。埋土は上層に黒色粘土、下層に暗緑灰色粘土が堆積する。その下はSK48同様に攪拌された緑灰色粘土が広がっている。埋土の黒色粘土から弥生時代中期の蓋(173)が出土したが器表面は摩耗が著しい。

S K 6 8 2 C 293地区で検出された。295区までは唯一の24層まで達することが確認できた土坑である。土坑は梢円形を呈し、長径1.6m、短径1.45m、深さ0.8mを測る。掘り形は擂鉢型を呈し、底面は平坦で長径0.6mの円形を呈する。埋土は他の土坑同様に下層に搅拌土、上層に黒色粘土が堆積していた。遺物は出土していない。

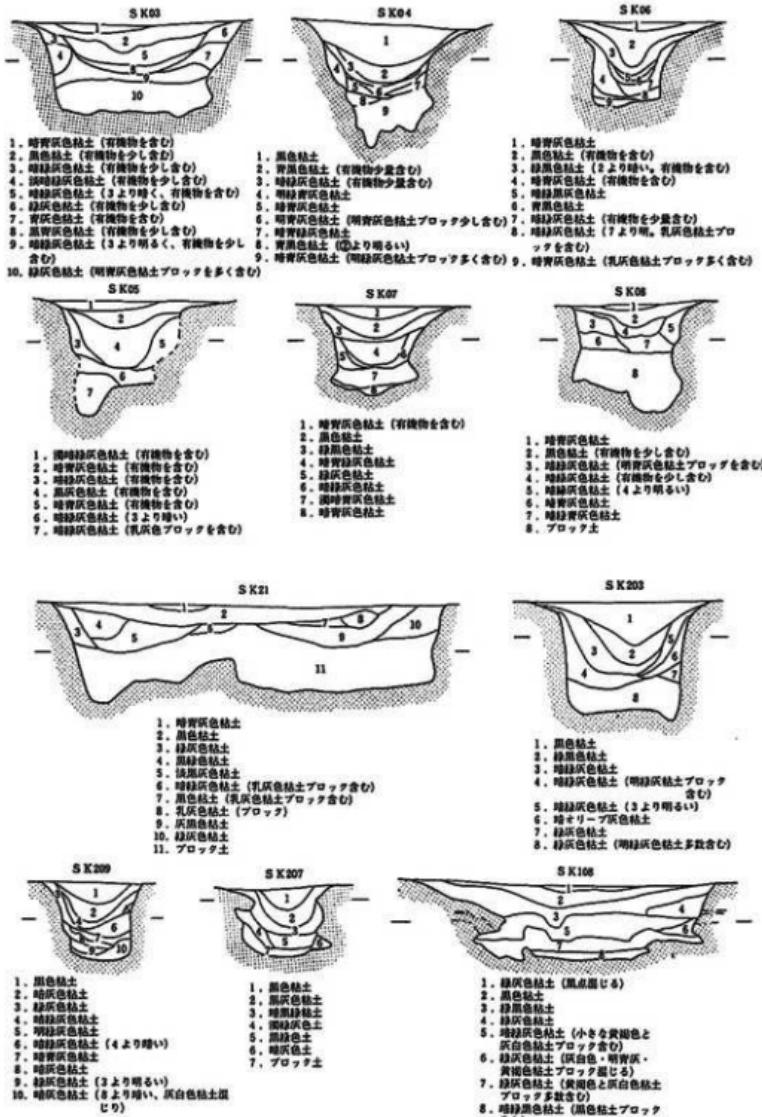
S K 9 6 土坑群南部の2C 298地区で検出された。楕円形に近い重つな形状を呈し、長径は、2.8m、短径1.8m、深さ0.95mを測る。掘り形は、肩口からの20層の流入が激しく判然としない。底部は激しく凹凸している。下層の24層上面ではS K94とつながり調査区の西端に達し南北6.5m、東西7.5以上を測る大型土坑となる。24層では壁面はほぼ垂直で上面から0.2m下がった粘土層では横に抉られ、底面はクレーター状に凹凸する。埋土はこれまでの土坑と同様に搅拌土、黒色粘土であるが、黒色粘土は北部の土坑とは異なり、底部近くまで厚く堆積する。遺物は搅拌土や黒



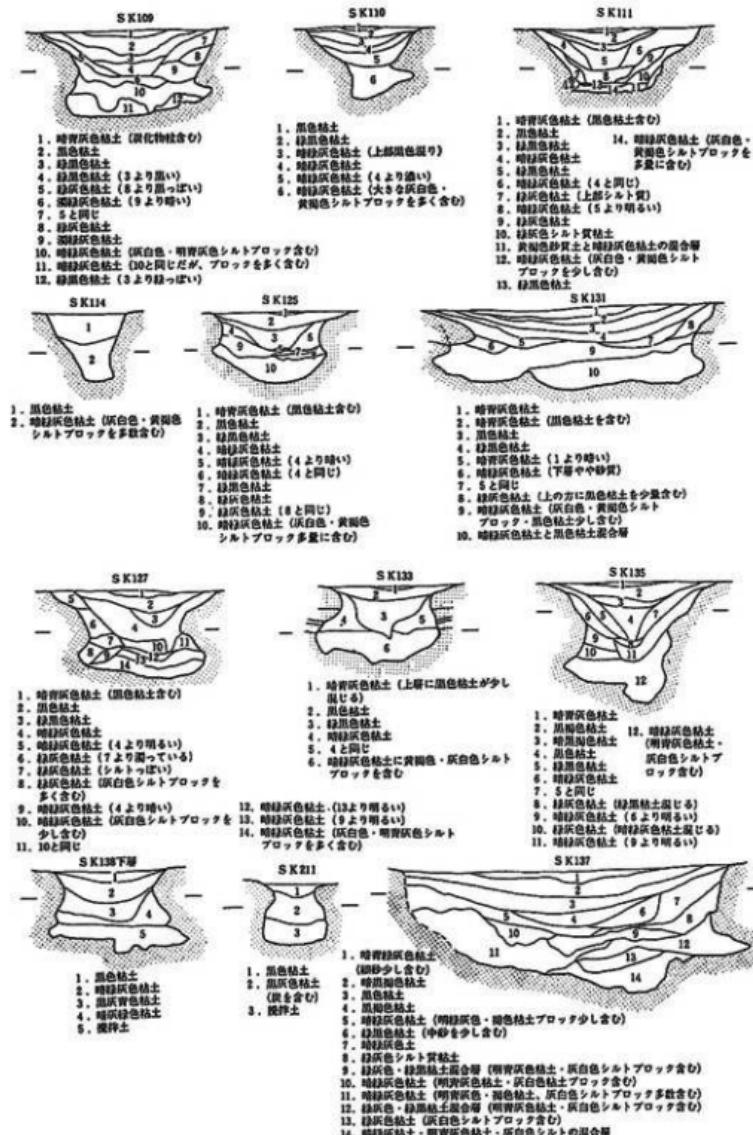
第18図 SK120～3実測図



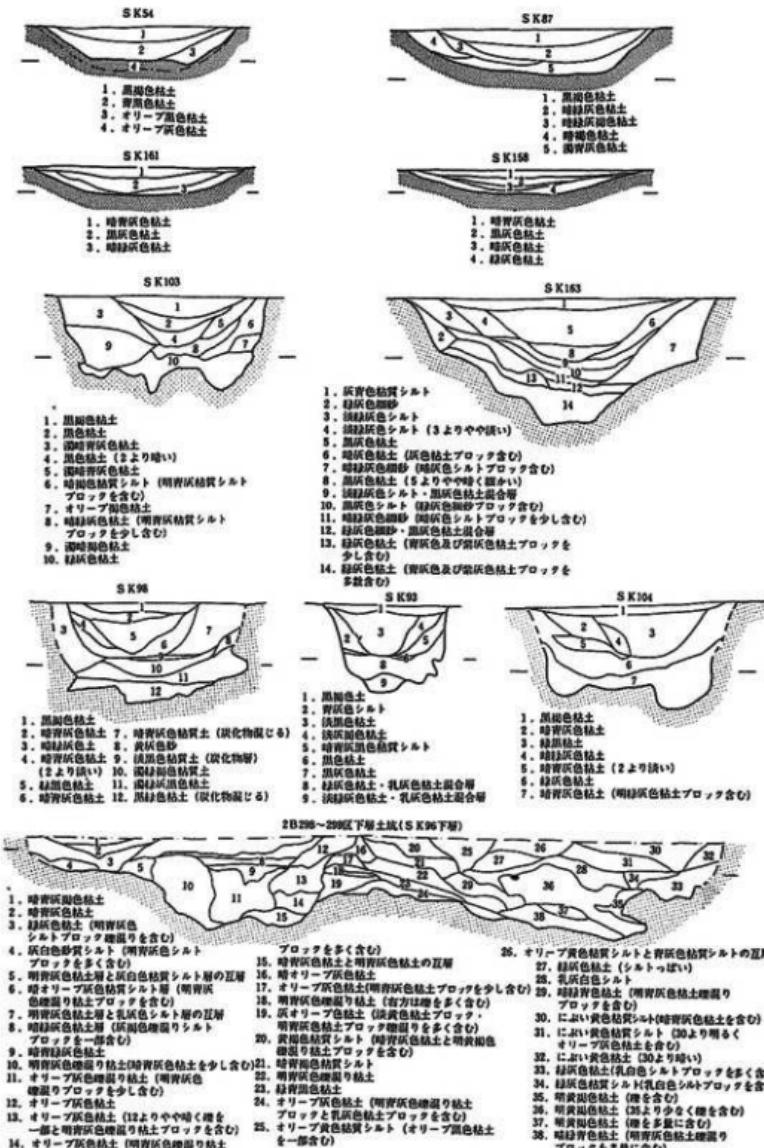
第19図 G区土坑群下層造構実測図 (1/200) SK136・137下層実測図 (1/40)



第20図 G区坑群断面実測図 (1/50)



第21図 G区土坑群断面実測図 (1/50)



第22図 1区土坑群断面実測図 (1/50)

色粘土内から弥生中期(174・188)や庄内期(201~212)の土器が出土している。土器は殆どが下層拡大部の搅拌土内から出土した。

S K105 2 D 300地区で検出された。長径1.75m の円形に近いプランを示し、深さ 0.9m を測る。肩口からほぼ垂直に掘り込み、底部は横に抉って袋状になる。底面の凹凸は小さい。埋土は中央部に黒色粘土が底面近くまで達し、その周囲には肩口から緑灰色シルトが流入する。底部の拡大部や底面には24層の小ブロックを含む緑灰色粘質シルトが堆積していた。坑内から庄内式土器が数片出土している。

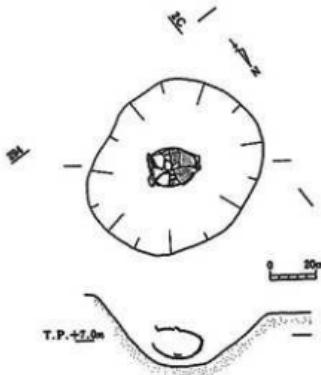
S K106 2 C 300地区で検出された。南北に長軸を持つ楕円形を呈し、長径1.9m 、短径1.8m を測る。掘り形はなだらかな肩部から中心部はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は拡張して袋状になる。埋土は、黒色粘土が中央部に擂鉢型に底部近くまで堆積し、その周囲に暗緑灰色シルトや24層・黒色粘土のブロックを含んだ緑灰色粘質シルトが堆積する。坑内から庄内式土器の小片と土坑群出土土器では最も新しい布留式傾向の土器(218)が出土した。

S K163 2 B 302区で検出された最も南に位置する土坑である。西は調査区外に広がっているが、検出面でのプランは半円形を呈し、南北3.5m 、東西1.25m 以上を測る。埋土は S K106と同様に黒色粘土が中央に擂鉢型に堆積し、壁面には肩口から緑灰色シルト層が流入する。下層は24層のブロックを含んだ暗緑灰色粘土である。坑内から完形の庄内式土器(230)と小片が多数出土している。

20層内検出の土坑

今回検出された土坑は弥生時代中期以降に掘削されたもので、本来は20層上面から掘削されたものと考えられる。しかし、H区・I北部では20層は完璧なままで掻拌されており、20層を5~10cm程度掘り下げて表面を削平し、黒色粘土や搅拌土の混入度から土坑の輪郭を描いても、5cmも下げるとなれば壁がわからなくなるといった状態であった。このため、20層の掘削途上で確認できた土坑は一基(S K2-01)だけであった。他の土坑は24層上面を検出面とした。

S K2-01 2 D 294区で、掻拌土を10cm下げた際に完形の土器が出土したため確認できた土坑である。土坑は長径0.8m 、短径0.65m の楕円形を呈す。断面は擂鉢型で深さ0.3m を測る。埋土は主に黒色粘土で緑灰色シルトがブロック状に混入しており、周囲の土と逆になっていた。出土した土器はほぼ完形で坑底近くに口縁を横にして据えられた状態であった。また長期間露出していたためか器表面は風化していた。



第23図 S K2-01土器(181)実測図

24層上面の土坑

24層では、前にも述べたようにG区とI区庄内期土坑群のような底面までの対応関係を確実に捉えうる所を除くと原地形が著しく変形し、無数の浅い小ビットが検出された。このため、24層上面の土坑を何らかの方法一例えば24層の比較的プライマリーな所やビットの稀薄な所を捉所にするなどでグルーピングを試みたが恣意的なものにならざるを得なかった。したがってここではその概要を記すにとどめたい。

S K 2 - 2 2 C 294地区で検出された小土坑である。20層から掘削されているが開闢面は不明である。24層が搅拌されず、原形を保っている地区的東北の縁部にある。土坑は五角形状を呈し、長径0.55m、短径0.47m、深さ0.15mを測る。埋土は20・24層の搅拌土である。坑内底部に接して出土した土器(175)は丈高の無頸壺で、据え置かれたような状態であった。

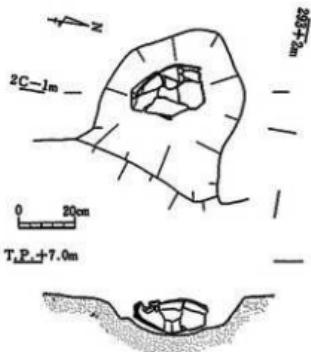
土坑の概要 24層で原地形をとどめる地域を参考に土坑群の範囲を記す。

H区では、S D07に平行して土坑群が存在し、2Bライン以西では20層から掘られた1基のみである。また、S D07の南側でも土坑は検出されていない。土坑群の東端は不明であるが、他の調査で2D 285地区付近でも土坑群が確認されている。

I区では北西端に小規模な空白部があるが区画性は認められない。この南側では294ライン付近に大小多数の土坑が穿たれているが地形はプライマリーな状態をとどめている。296地区のS K86以南では24層は原地形を保ち、20層上面で検出された土塙を追認できる。しかし、輪郭は全く異なり、拡大するものや、数基の小土坑に分かれるものが多い。土坑群の西端は今回の調査では確認できなかった。東端は2E区を北流するSD04の底部に多数の土坑の痕跡が観察されるが、東肩部では南端で一基検出したのみで、20層も搅拌されていない。したがってSD04付近を東端にすることができる。

次にH・I区の土坑群から出土する遺物の傾向を記すと、H区では第III様式古段階から第V様式までの土器が出土しているが、20層の搅拌土内で検出されたものが多く、造構内や坑底に接していたものは殆どない。中期の土器は外面の叩目や内面ヘラ削りなど中期後半に位置づけられるものが多い。一方I区294地区までの土坑群では小ビット内から多くの土器が出土している。時期的には第III様式～第IV様式後葉頃までである。特に甕は肩部が張り出し、内面をヘラ削りするなど第IV様式でも新しい要素を持つものが多い。しかし第V様式の土器は出土していない。

土器以外では、木製品は検出されなかった。石製品も数は少なくSD04の溝底の土坑の底面に接して磨製石剣(S12)、G区からサヌカイトの剣片(S13)の2点が出土したのみである。



第24図 SK 2-02, 土器(175)
出土状況実測図(1/20)

今回の調査で検出された土坑は20層上面で172基を数え、24層では堅く締った粘土を0.8m近く掘削し、無数の土坑を作り出していた。これらの遺構の性格を検討するため、規模、形状、断面形、埋土、遺物などから分類を行なった。

分布 24層に達する深い土坑はG区から20m離れたF区では検出されていない。また、G区でも北部では土坑密度が減少していることから、SD09下層で検出したSK208が北端になると考えられる。南は302地区のSK163であり、南北は約130mの範囲内にある。東は2E地区で検出されたSD04より東では1基のみであり、20層も搅拌されていないことから、2Eライン付近を東限とすることができるよう。西端については今回の調査では確認できなかった。

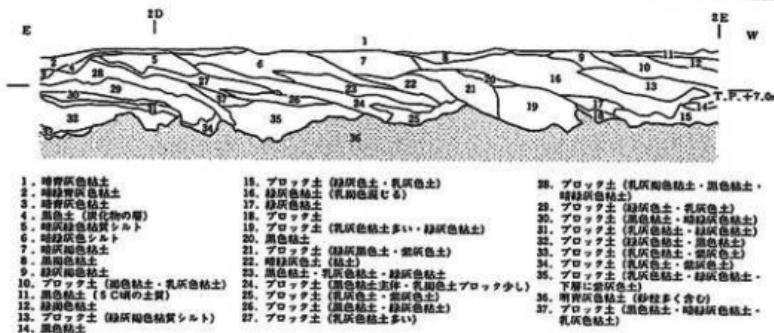
規模 20層の172基の土坑で全体が検出されたのは約60%の102基である。形状が歪つなため長軸の長さを参考に0.5m単位で分類した。その結果、0.5m以下=8基(7.8%)、0.5~1m=22基(21.6%)、1~1.5m=25基(24.5%)、1.5~2m=24基(23.5%)、2~2.5m=15基(14.7%)、2.5~3m=3基(3%)、3m以上=5基(4.9%)となり、0.5~2mまでに70%近くが集中していることになる。しかし、幅10mのトレンチ調査であり、大型の土坑は調査範囲外に延びる可能性が高く、ひとつの目安とはなりえても全体の傾向を示しているとは言い難い。地区別にみると、G区には比較的小規模な土坑が多く、I区南部の庄内式土器を出土する土坑では1.4m以下は2基であり、他は全て1.8m以上の規模をもつ。

形状 いずれも歪つな形状を呈しているが、敢えて分類すると、円形、楕円形、隅丸方形等になる。G区では切り合う土坑が少ないとから形状のわかるものが多く、過半数が軸径比の小さい楕円形を呈する。H・I区は歪つな楕円形や不定形な土坑が多い。殊に24層上面では小さなピットとアーバ状としか形容できない輪郭を持つものが多数存在する。

断面・埋土 土坑の断面形や埋土には、切り合いの少ないG区I区南部に共通性がみられる。断面形では、なだらかな肩口からほぼ垂直に掘削され、24層上面から0.2m程度下がり粘質が強くなると横に掘り広げ袋状になる。底面は堅く締まり砂礫を含む淡青灰色(空気に晒すと黄灰色化)粘土で、レベルはG区がT.P.6.1~6.4m、I区は6.6~6.9m前後を測る。

埋土は、G区では5世紀頃の暗青灰色粘土、黒色粘土、綠灰色(青灰色)粘土、搅拌土を含む綠灰色粘土である。またI区南部の土坑では黑色粘土が底部近くまで達し、その下には搅拌土が堆積する。壁面に沿って掘削面の綠灰色シルトの流出が見られるのは共通している。以上のことから、土坑は掘削後埋め戻されることは少なく、肩口の排土や綠灰色シルトの流入により徐々に埋没したと考えられる。

次に、第25図にH区288+2.5mライン、付図13にI区北部291~294地区2Cラインの断面図を載せた。2Cラインでは24層に平坦な面は無く、起伏を繰り返し、そこに灰白色粘土、黄褐色粘土、綠灰色シルトの細かいブロックが搅拌されて堆積している。恐らく頻繁に掘削を繰り返した結果と思われる。一方、H区の断面をみると、搅拌土が東から西下がりの帯状に観察されることから、排土を東に積み重ねながら西に移動していったと解釈できる。このような掘削手順が明瞭



第25図 H区(288+2.5mライン)東西断面実測図(1/50)

に観察できたのはこの断面だけで、東側に設定した断面では搅拌土が複雑に混合された状況を呈し、南北方向での掘削方法は読み取れない。

遺物 土坑群からは弥生時代中期第Ⅲ様式から古墳時代前期布留式までの土器が出土している。G区では、第Ⅲ様式新段階から第V様式までの土器が多い。H・I区では20層上面の浅い土坑からの出土土器は少なく、20層の搅拌土から第Ⅲ～第Ⅳ様式の土器が出土し、第V様式の土器はない。

庄内式土器は292地区のSK162と295地区から302地区の土坑に集中している。器種は第V様式系の壺1点を除くと甕のみであり、高杯など供膳性の土器は出土していない。

今回の調査で検出されたG区や庄内期の深さ0.5～1m程度の深い土坑と、H・I区の黒色粘土下面までの浅い土坑と同じ性格のものとして一括して取り扱って良いか否か疑問がないわけではない。しかし、24層に達するような深い土坑が本来的な形態ではないかと考えている。次にこの視点から土坑の性格を解明してみたい。

土坑群の共通する特徴を整理すると、

1. 形態は不定形であるが、強て分類すれば歪な橢円形が多い。
2. 掘削は、0.6mから1mに達し、底面は凹凸する。小ピットを数ヶ所穿つ例もある。24層は、この間に粘土から砂礫混粘土に漸移的に変化している。
3. 掘削断面は、上層の20層は槽鉢形、下層の24層ではほぼ垂直になり、底部は袋状に広がる。
4. 塗土は24層の小ブロックを多量に含む暗緑褐色粘土や黒色粘土、5世紀頃に堆積する青灰褐色粘土であり、土砂の流入によって徐々に埋没したと考えられる。
5. 遺物は量的には多くないが、弥生時代中期から古墳時代前期までのものが出土している。などの点があげられる。

群集して存在する土坑(窓)はこれまでにも多くの遺跡で検出され、その性格を解明するために

種々の方向から分析が試みられている。土坑の性格が明らかにされている遺跡の中で今回の土坑と類似しているものに軽里遺跡がある¹。軽里遺跡では1mから350mを越える大型のものまで検出されているが、その特徴として、1. 形態が不定形であること。2. 地山の粘土を掘削し、その下層の砂質土の面で止まること、3. 土坑壁面はほぼ垂直で底面の砂質土の面で平坦となること。4. 埋土中に少量の遺物(平安～中世)を含むこと。などを上げ、掘削の目的として造瓦用粘土の採取を推定している。また、土坑の大小の差を1回の採土量の差と考えている。当遺跡の土坑は、軽里遺跡と比較すると小規模なもの(最小0.25m²)が多いが、24層上面から約20cm下がった粘土を掘削し、堅く締まった砂礫混り土層で掘削を止めていることや掘削断面が垂直になることなど共通する要素が多い。底面の差は、当遺跡では24層の粘土にも小礫を多く含み、土層の変化が漸移的であること、掘削用具が脆弱であることから底面に凹凸ができたと考えたい。底部を横に拡張するのも特定の土を採取するためと考えるのが妥当であろう。

一方、H・I区北部でみられた、24層下面の原形を全くとどめないまでの変形も、探土作業を頻繁に繰り返した結果であると考えられる。

今回の調査では、24層の粘土を用いた焼成実験を行なえなかったことや、同時代の類例を探すことができなかつたため断言はできないが、上記の情況から、南北約130mの範囲に展開された土坑群は探土坑と考えて大過ないものと思われる。しかし、SK 109・114、庄内期の土坑は、完形の土器や多くの土器を埋置していることから、これらの土坑を何らかの祭祀に用いたことも想定される。今後類例と比較しながら検討を加えていきたい。

時期不明の遺構

S D10 (第14図) I区南部で検出された細い溝である。幅0.35m、深さ0.25mを測る。この溝は7 Iグリッドから東南流し、323地区からは流路2に沿って南流する。また、9 Iグリッドから幅0.8m、深さ0.2mの溝と325地区で合流する。溝内から遺物は出土していないが、20層に相当する青灰色粘土(24層の窪地に堆積する粘土)や流路2の黒色粘土(5～7世紀)が堆積する以前に掘削された溝である。長原遺跡でも埋土・覆土から同時期と考えられる溝が多く検出されている。

1. 尾上 実「扶山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」1978 大阪府教委
2. これと同様に地山がアトランダムに掘削された遺跡としては、応神陵茶山遺跡の例(鎌倉時代以前)を上げることができる。 酒井龍一、辻内義浩他「応神陵茶山遺跡発掘調査報告書」1978 (財)大阪文化財センター
他に土坑群が検出された遺跡を上げる。
 - ・高槻市孤塚古墳群 原口正三「考古学からみた原始古代の高槻」「高槻市史」1-1 1977
 - ・富田林市新家遺跡 尾上 実、今村道雄「新家遺跡発掘調査概要Ⅱ」1980 大阪府教委

- ・堺市大和川・今池遺跡 森村健一他「大和川・今池遺跡Ⅱ」1980 大和川・今池遺跡調査会
- ・奈良市池田遺跡 藤井利章「奈良市池田遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 1981年度」(第1分冊)1983 奈良県立橿原考古学研究所
- ・奈良県生駒郡東安堵遺跡 泉 武「東安堵遺跡 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊」1983 奈良県立橿原考古学研究所 (228ヶ所の土壙が検出され、第V様式後半から經向3式の時期に集中して掘削されている。遺物は甕が大半を占めるが、祭祀的性格の強い木製品も出土している。)
- ・堺市万崎池遺跡 芝野圭之助「万崎池遺跡」「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」1984 (財)大阪文化財センター

第7表 20層土坑群一覧表 規模・深さの()は検出長を示す

○数字は土器番号を示す

番号	地区	形状	規模	深さ	埋 土	遺 物(の時期)備 考
1	2 D 276	幅く長い	0.65×4.1 m	0.15 m	黒色粘土	
2	2 D 276~9	広い不整形な窓み	(10.75) × (5.2)		青灰色粘土、黒色粘土	測量のレーベルの10m下がる。下層は南北2つに分かれ。北側は中後。
3	2 C 277		(2.6) × (1.0)	0.8	暗青灰色粘土、ブロック土	
4	2 C 277	楕円形	1.85×1.65	1.1	青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	
5	2 D 277	楕円形	1.8×1.6	0.9	暗青灰色粘土、黒色粘土 黒灰色粘土、ブロック土	下層は南北2つに分かれ。北側は0.9×1.2、南側は0.8m。
6	2 C 278	楕円形	1.7×1.4	1.0	暗青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	
7	2 C 278		1.4×(1.0)	0.7	暗青灰色粘土、黒色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	
8	2 C 279	楕円形	1.25×1.9	0.9	暗青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	弥生・中後。⑩
9	2 C 280	楕円形	(0.95) × 1.3	0.7	黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	北側 S D01に切られる。
10	2 C 280	楕円形	(1.3) × 1.7	0.7	青灰色粘土、黒色粘土 暗青灰色粘土、ブロック土	北側 S D01に切られる。
11	2 C 280	楕円形	2.3×(1.55)	0.8	暗青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	
12	2 D 280	楕円形	(0.8) × (0.7)	(0.4)	黒色粘土、暗緑灰色粘土	⑪
13	2 D 280		1.0×(1.2)	(0.6)	黒色粘土、暗緑灰色粘土	
14	2 D 281	円形	1.05×1.0	0.7	黒色粘土、暗緑灰色粘土 暗青灰色粘土、ブロック土	
15	2 C 281	方形	1.4×1.0	0.2	黒色粘土	
16	2 C 281	楕円形	0.7×1.1	0.3	黒色粘土層、黒灰色粘土層	
17	2 D 281		(1.3) × (1.1)	0.15	暗青灰色粘土、黒色粘土	S K18に切られる。
18	2 D 281	楕円形	1.25×1.55	0.3	暗青灰色粘土、黒色粘土 青黑色粘土	弥生・中後。⑫
19	2 C 281	楕円形	1.3×2.05	0.55	青灰色粘土、暗青灰色粘土 青黑色粘土	
20	2 C 281	楕円形	1.35×1.65	0.8	黒色粘土、青黒色粘土 黒灰色粘土、ブロック土	
21	2 C 282	楕円形	1.8×3.4	0.9	暗青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	2つの土堆が重なったものか。
22	2 D 282		2.65×(1.35)	0.35	青黒色粘土、黒色粘土 暗青灰色粘土	弥生・中後。 大きな土堆群の上層。
23	2 D 282		1.85×(2.1)	0.2	黒褐色粘土、黒色粘土	S K03より古い。⑬
24	2 D 282		1.6×(0.9)	0.3	黒色粘土、暗緑灰色粘土	⑭
25	2 C 282		2.1×(0.95)	0.7	青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	
26	2 C 282	円形	0.45×0.45	0.1	黒色粘土、黒灰色粘土	
27	2 D 282	楕円形	0.4×0.35	0.2	黒色粘土、黒灰色粘土	
28	2 D 282	楕円形	1.8×1.6	0.85	青灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロック土	
29	2 C 282	楕円形	0.15×0.2	0.05	暗灰色粘土	
30	2 C 282	楕円形	0.75×0.5	0.1	黒色粘土	
31	2 B 282		(1.1) × (0.3)		黒色粘土	
32	2 C 283		(0.7) × (1.5)		黒色粘土	浅い調査柄より古い。 下層は楕円形(2.6×1.7m)。
33	2 D 283	楕円形	0.7×0.7	0.2	黒色粘土、オリーブ黒色粘土	
34	2 D 283	楕円形	0.7×0.4	0.15	黒色粘土	
35	2 D 283	楕円形	1.0×0.4	0.05	黒色粘土	

(形状は全て不整形である)

弥生・中は弥生時代中期
の略

番号	地区	形状	規模	深さ	埋 土	遺 物(の時期)備 考
36	2 D 283	楕円形	0.8×0.45	0.05	黒色粘土	
37	2 C 283		2.5×0.9			
38	2 D 283	方形	0.45×0.4	0.1	黒色粘土	
39	2 C 283	方形	1.0×1.3	0.15	黒色粘土	
40	2 D 283	楕円形	0.5×1.1	0.1	黒色粘土	
41	2 D 284		(1.6)×(0.6)		暗青灰色粘土、黒色粘土	
42	2 D 284	隅丸方形	0.25×0.3	0.05	黒灰色粘土	
43	2 D 284	隅丸長方形	0.5×0.25	0.05	黒灰色粘土	
44	2 C 284		(2.8)×(2.0)	0.7	黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	⑩
45	2 C 288		(2.4)×(4.8)	0.5	青灰色粘土、黒色粘土 暗青灰色粘土、青灰色シルト質粘土	透つな大型土堆。 弥生・中。
46	2 D 287	方形	(1.0)×(2.5)	0.15	暗灰色粘土、青灰色粘土	弥生・中。
47	2 D 288	楕円形	1.5×2.5	0.25	青灰色粘土、黒色粘土 暗青灰色粘土	弥生・中～後。
48	2 C 288	楕円形	3.45×1.7	0.3	青灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、暗青灰色粘土	弥生。⑩
49	2 D 288	隅丸方形	2.2×(1.4)	0.3	青灰色粘土、黒色粘土 青灰色砂混粘土	弥生・中。
50	2 D 288		2.2×(0.7)	0.3	青灰色粘土、黒色粘土 暗青灰色粘土	
51	2 C 288	隅丸三角形	1.8×1.4	0.15	黒色粘土、暗青灰色粘土 青灰色砂混粘土	弥生・中。
52	2 D 288	隅丸方形	1.4×1.4	0.2	黒色粘土、暗灰色粘土 青灰色砂混粘土	中央を S D 06が通る。
53	2 B 291		(1.2)×(1.1)	(0.2)	黒色粘土	
54	2 C 291	隅丸方形	2.05×1.85	0.4	黒褐色粘土、黒色粘土 オリーブ黒色粘土	
55	2 C 291		(1.1)×1.2	0.35	黒褐色粘土、青黒色粘土 暗青灰色粘土	弥生・中。
56	2 D 291	隅丸三角形	2.25×1.65	0.3	黒色粘土、青黒色粘土 暗緑灰色粘土、オリーブ灰色粘土	弥生・中。⑩
57	2 C 291	隅丸長方形	0.65×1.2	0.15	黒色粘土、オリーブ黒色粘土	
58	2 C 292	隅丸方形	1.4×1.45	0.2	黒褐色粘土、オリーブ黒色粘土 暗緑灰色粘土	
59	2 C 292	隅丸長方形	0.8×1.35	0.15	黒色粘土	弥生・中。
60	2 C 292	隅丸方形	0.55×0.5	0.15	黒色粘土	
61	2 D 292	楕円形	1.3×1.1	0.2	黒褐色粘土	弥生・中。
62	2 C 292	楕円形	1.7×2.7	0.35	黒褐色粘土、暗青灰色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	弥生・中。
63	2 B 292		(1.0)×(1.0)	0.1	黒色粘土	S K 63より古い。 弥生・中。
64	2 C 292	半円形	1.45×1.3	0.2	黒色粘土、暗青灰色粘土	弥生・中。
65	2 C 292	円形	0.8×0.8	0.15	黒色粘土	
66	2 C 293	楕円形	2.75×1.6	0.2	黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	弥生・中。
67	2 C 293		1.3×(0.7)	0.15	黒色粘土	S K 66に切られる。
68	2 C 293	楕円形	1.6×1.45	0.65	黒褐色粘土、青黒色粘土 緑黒色粘土	地山まで描跡形につづく 土堆。弥生・中。
69	2 D 293		1.05×(0.75)	0.15	黒色粘土	西面 S K 66に切られる。 弥生・中。
70	2 C 293	隅丸方形	0.8×0.85	0.2	黒色粘土	弥生・中。

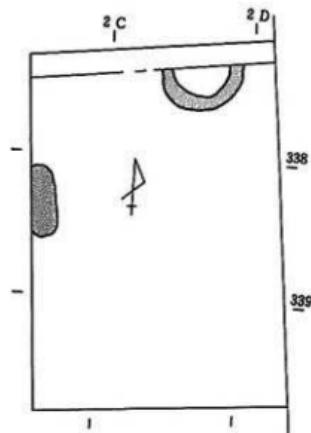
番号	地区	形状	規模	深さ	壌土	遺物(の時期)備考
71	2 C 293	楕円形	1.4×1.0	0.1 m	黒色粘土	
72	2 B 294		1.5×(0.8)	0.1	黒色粘土	
73	2 C 294	隅丸方形	0.65×0.75	0.15	黒色粘土	
74	2 C 294	楕円形	1.05×0.75	0.15	黒色粘土、オリーブ黒色粘土 暗青灰色粘土	
75	2 D 294	隅丸方形	(1.55)×0.6	0.1	黒色粘土	
76	2 D 294		(0.7)×0.7	0.15	黒色粘土、黒灰色粘土	北をSK75に切られる。
77	2 D 294	長円形	0.4×1.05	0.1	黒色粘土、暗青灰色粘土	
78	2 B 294		(1.3)×0.7	0.1	黒色粘土	
79	2 D 294	楕円形	1.2×(1.05)	0.45	黒色シルト、暗オリーブ色シルト 灰色シルト	
80	2 C 295	隅丸方形	0.5×0.7	0.1	黒色粘土	
81	2 D 295	隅丸方形	0.45×0.4	0.1	黒色粘土	
82	2 D 295	楕円形	1.0×1.2	0.2	黒色粘土、黒灰色粘土	
83	2 D 295		1.1×0.5	0.4	青灰色粘土、黒色粘土	弥生・中。
84	2 C 295	楕円形	3.2×2.1	0.4	青灰色粘土、黒色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	弥生・中。
85	2 C 296	円形	1.9×1.95	0.5	黒褐色粘土、暗青灰色粘土 暗褐色粘土、ブロック土	弥生・中。
86	2 C 296	円形	2.3×2.3	0.4	黒褐色粘土、暗青灰色粘土 ブロック土	庄内。
87	2 D 296	楕円形	2.3×1.85	0.4	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	庄内。
88	2 C 296	楕円形	1.95×1.8	0.5	黒褐色粘土、緑黒色粘土 緑灰色シルト、ブロック土	
89	2 C 297	五角形	1.3×1.4	0.55	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土 緑灰色シルト、ブロック土	
90	2 D 297		5.2×(2.6)	0.5	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土 オリーブ灰色粘土	庄内。
91	2 C 297		3.8×(4.5)	0.2	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土 潤綠灰色粘土、ブロック土	庄内。◎・◎・◎
92	2 C 297	楕円形	1.2×1.8	0.1	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土	SK91より新しい。
93	2 C 298	楕円形	1.6×1.3	0.7	黒褐色粘土、深黒色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	庄内。
94	2 D 298	楕円形	2.25×1.6	0.85	黒褐色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	庄内。◎
95	2 D 299		2.7×(1.0)	1.1	暗青灰色粘土、緑灰色粘土 オリーブ灰色シルト	庄内。
96	2 C 299	楕円形	1.8×2.8	0.95	黒褐色粘土、暗オリーブ灰色粘土 暗青灰色粘土、ブロック土	庄内。◎・◎・◎・◎・◎
97	2 C 299	楕円形	1.6×1.3	0.8	緑黒色粘土、暗青灰色粘土 青灰色粘土、ブロック土	庄内。
98	2 C 299	円形	1.1×1.15	0.5	黒褐色粘土、暗青灰色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	庄内。◎
99	2 C 299		1.3×(0.7)			S K98に切られる。庄内。
100	2 C 299	楕円形	1.15×1.9	0.7	暗緑灰色粘土、緑黒色粘土 暗青灰色粘土、ブロック土	庄内。◎・◎
101	2 B 299	楕円形	0.7×(0.8)	0.2	黒褐色粘土	
102	2 D 299		1.8×(1.9)	0.65	黒褐色粘土、暗緑灰色シルト 暗青灰色粘土、ブロック土	庄内。
103	2 D 299	楕円形	2.15×1.4	0.55	黒褐色粘土、黒色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	庄内。
104	2 C 300	楕円形	2.0×1.7	0.7	黒褐色粘土、暗青灰色粘土 緑灰色粘土、ブロック土	庄内。◎・◎・◎
105	2 D 300	楕円形	1.75×1.75	0.9	黒褐色粘土、暗緑灰色粘土 灰色粘土、ブロック土	庄内。◎

番号	地区	形状	規模	深さ	埋 土	遺 物(の時期)備 考
106	2 C 300	楕円形	1.9×1.6 m	0.6 m	黒色粘土、黒褐色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	柱内。②・③
107	2 B 280		(1.5)×2.0	0.75	暗灰色粘土、綠黑色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
108	2 A 280		1.7×(1.2)	0.7	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	弥生・中～後。
109	2 A 280	楕円形	1.6×1.6	0.75	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	弥生・中～後。②
110	2 B 280	楕円形	1.0×1.5	0.7	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	②
111	2 A 280	楕円形	1.5×1.7	0.55	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
112	2 B 280	円形	1.8×1.75	0.75	暗灰色粘土、黒色粘土 綠灰色粘土、ブロッカ土	
113	2 B 280	楕円形	1.6×1.1	0.7	黒色粘土、綠黑色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
114	2 A 280	円形	0.7×0.65	0.65	黒色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	弥生・中。②
115	2 B 281		1.25×(0.8)	0.55	黒色粘土、暗灰色粘土 綠灰色粘土、ブロッカ土	
116	2 A 281	楕円形	0.9×0.75	0.7	黒色粘土、暗灰色粘土 綠黑色粘土、ブロッカ土	
117	2 A 281	楕円形	0.8×0.6	0.25	黒色粘土、暗灰色粘土	
118	2 B 281	長方形	1.6×(0.9)	0.7	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	北側 S K113、 東側 S K119と重なる。
119	2 B 281		0.8×	0.6	黒色粘土	S K118・120と切り合ひ土壁、 斜面は6種類としない。
120	2 B 281	円形	0.5×0.5	0.5	暗灰色粘土、ブロッカ土	第1段階面の約20cm下位 の面の確認。
121	2 B 281	楕円形	0.6×0.8	0.6	暗灰色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	複数の浅い落ち込みの 下層で検出。
122	2 B 281	楕円形	0.8×0.45	0.4	暗灰色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	*
123	2 B 281	楕円形	0.75×0.5	0.5	暗灰色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	*
124	2 A 281	円	1.2×1.2	0.7	黒色粘土、綠灰色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
125	2 A 281	楕円形	1.25×1.3	0.6	暗灰色粘土、黒色粘土 綠黑色粘土、ブロッカ土	
126	2 A 281	楕円形	1.15×1.1	0.65	黒色粘土、暗灰色粘土 綠黑色粘土、ブロッカ土	②
127	2 B 281	楕円形	1.1×(1.6)	0.8	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	②・③・④と複雑に切り合 って土壌群をつくる。②
128	2 B 281		1.2×	0.65	黒色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	*
129	2 B 282	楕円形	(1.2)×2.0	0.7	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	*
130	2 A 282		(1.2)×(0.6)	0.55	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
131	2 B 282	不整形	5.1×2	0.75	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	底部は数ヶ所に分かれる。
132	2 B 282		(1.8)×(1.0)	0.7	暗灰色粘土、黒色粘土 ブロッカ土	
133	2 B 282		(1.1)×(1.4)	0.65	暗灰色粘土、黒色粘土 暗灰色粘土、ブロッカ土	
134	2 E 281	円形	0.6×0.55	0.25	黒色粘土	
135	2 E 281		1.1×(0.9)	(0.5)	暗灰色粘土、黒色粘土 綠灰色粘土	
136	2 E 281	楕円形	1.65×1.3	0.6	暗灰色粘土、黒色粘土 綠灰色粘土、ブロッカ土	下層は S K137・138と重なる大 きな土壁。②・③・④・⑤
137	2 E 282	楕円形	2.45×2.1	0.5	暗灰色粘土、黒色粘土 黒褐色粘土、暗灰色粘土	②・③
138	2 F 282	弧形	1.2×(2.0)	0.2	黒色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	
139	2 B 288	楕円形	(0.7)×1.65	0.6	黒色粘土、暗灰色粘土 ブロッカ土	S D05に切られる。
140	2 E 287		(1.25)×(0.9)	0.15	黒色粘土	

番号	地区	形状	規模	深さ	埋 土	遺物(の時間)備考
141	2 E 287		(1.1)×1.55	0.2	黒色粘土	
142	2 E 288	円形	0.5×0.55	0.1	黒色粘土	
143	2 E 288	楕円形	2.5×2.1	0.3	暗青灰色粘土、黒色粘土	
144	2 E 288	楕円形	0.9×2.55	0.2	黒色粘土、暗緑灰色粘土	
145	2 E 288	円形	1.35×1.35	0.2	暗青灰色粘土、黒色粘土	
146	2 F 287~8		(6.4)×(1.8)	0.3	暗緑灰色粘土	
147	2 E 289	楕円形	0.85×1.0	0.45	黒色粘土、暗緑灰色粘土	
148	2 E 289		(1.0)×(0.4)	0.1	黒色粘土	
149	2 E 289		(0.8)×1.45	0.15	黒色粘土、暗緑灰色粘土	
150	2 A 287		(0.3)×0.6	0.05	黒色粘土	
151	2 A 294		(0.7)×1.2	0.1	黒灰色粘土	弥生。
152	2 A 294	楕円形	0.8×0.6	0.1	黒灰色粘土	
153	2 A 294	円形	0.9×0.9	0.1	黒色粘土	
154	2 B 294		(1.2)×(0.9)	0.2	黒色粘土、暗青灰色粘土	弥生。
155	2 A 294	楕円形	1.2×2.25	0.1	黒褐色粘土、緑灰色粘土	
156	2 B 294		1.3×(1.2)	0.25	黒灰色粘土、暗緑灰色粘土	
157	2 B 295		(1.5)×2.25	0.2	黒色粘土、暗緑灰色粘土	
158	2 A 295		2.25×2.1	0.2	暗青灰色粘土、黒灰色粘土	弥生。
159	2 A 295	楕円形	1.1×1.55	0.1	黒灰色粘土	第1面より約10cm掘り下 げて検出。
160	2 B 295		1.95×(3.3)	0.2	黒灰色粘土、緑灰色粘土	
161	2 A 295		(1.5)×1.9	0.25	暗青灰色粘土、黒灰色粘土	弥生・中。
162	2 D 296		0.6×(1.5)		黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	東側をS D04に切られる。 庄内。④・⑤
163	2 B 301		3.5×(1.5)	1.05	黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	⑥
201	2 D 277		1.5×(0.65)	0.55	暗緑灰色粘土、ブロック土	検出面のレベル。 T.P.7.20~7.25m
202	2 D 278	楕円	1.85×1.25	0.65	黒色粘土、暗青灰色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	
203	2 D 278	楕円	2.15×2.04	0.95	暗灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	⑦
204	2 D 278	楕円	1.4×1.4	0.65	黒灰色粘土、淡緑灰色粘土 ブロック土	⑧
205	2 D 278		0.8×(0.6)	0.6	淡緑灰色土、ブロック土	
206	2 D 279		(3.3)×3.85	0.8	暗青灰色粘土、黒色粘土 暗緑灰色粘土、ブロック土	複数の土被が重なっている。 ⑨・⑩・⑪・⑫
207	2 D 279		0.65×(0.3)	0.6	黒灰色粘土、暗緑灰色粘土 淡緑灰色粘土、ブロック土	
208	2 C 277	楕円	0.95×1.0	0.6	黒色粘土、暗緑灰色粘土 ブロック土	
209	2 C 279	楕円	1.8×0.95	0.55	暗緑灰色粘土、ブロック土	
210	2 E 282		1.4×(0.8)	0.5	暗緑灰色粘土、黒色粘土 ブロック土	
211	2 E 282		(0.4)×(0.6)	—	暗緑灰色粘土、黒色粘土	
					※ブロック土は、20~24層・黒色粘土などが攪拌された土を云う。	

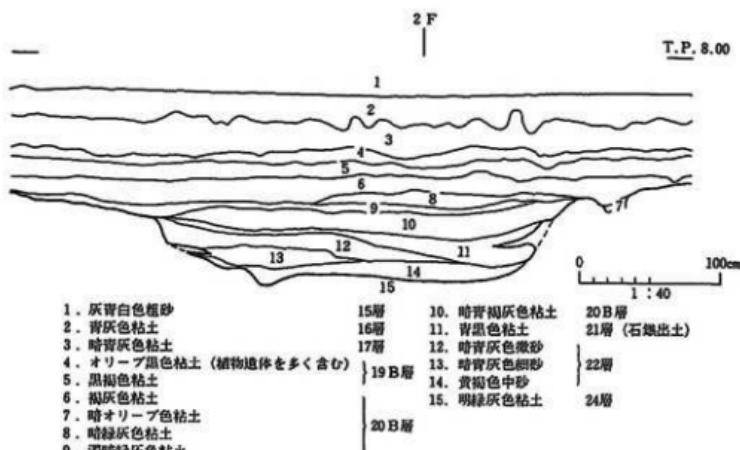
第6節 弥生以前

20層上面の遺構は弥生時代中期まできかのぼれたが、本項ではこれより下位について記す。20層そのものからは縄文後・晩期の遺物が少ないながら出土している。



第26図 地山下の黒灰色粘土(縄部) S=1/200

調査区中央部と南部に、地山(23・24層)を切る2本の流路もしくは開析谷がある。北から流路1・2とする。地山上面の地形を見ると、これらはある程度下刻している。ただし層序で触れたように、ここに非常に古い(地山そのものの形成過程における)流路の痕跡があったのかもしれないが明確にはならなかった。流路1と2は同様な堆積過程を経ている。すなわち最初に粗砂～微砂が堆積し(22層)、その上部に紫黒色粘土が堆積している(21層)。流路1の22層上半の微砂層内から縄文後期の土器・石器が出土し、流路2の21層内から縄文晩期と思われる石器が出土している。付図1-1に示した地形は21層を除去した時点でのもので、縄文晩期頃の地形であろう。これ以後も、主に青灰色の粘土・微砂や黒色粘土に



第27図 流路2 土層断面 (10 I グリッド南壁)

第4水田の土壤から出土した遺物である。土師器と須恵器がある。須恵器には6世紀後半以前のものしかないが、いずれも混入品である。土師器には図示できるものがほとんどないが、(47)は口縁部が外反するもので、内面に一段の放射暗文があり、外面はヘラケズリの後に横方向の密な磨きを施している。7世紀後葉のものと思われるが、これも本来下層のものだったかもしれない。J区の砂堆上面遺構をおおう青灰色微砂シルト層(12層に相当するか)からは、やや浅い土師器の杯の完形品が出土している。内面に一段放射暗文があり、外面は磨いていないが上半部をていねいになでている。7世紀の末葉になるかと思われる。また埴輪の基部も出土しており、近くの古墳(長原古墳群を構成する)から流出したものと思われる。

16層内(第29図下・第30図上)

第2水田の土壤及びその畦畔内から出土したものである。他の時期の水田土壤に比べると、比較的多くの遺物が出土している。土師器と須恵器があるが、須恵器はほとんどが6世紀後半以前のものである。土師器には杯と甕がある。杯は一点(58)を除く他はすべて小形品のようである。径11~12cm、高さ3.5~4cm前後のものが多い。技法から5つのタイプに分けられる。

I類(50~52) 内面に暗文がない。外面は上半部にヨコナデを施すが、それ以外には指頭圧痕が顕著に残る。胎土・器形に統一性がない。

II類(53~55) 内面に一段の放射暗文を施している。外面は上半部にヨコナデを施す他、下半部もあらくナデを施したと思われ、指頭圧痕がほとんど残らない。見込みの暗文の有無は不明である。淡灰褐色を呈する。

III類(56) 内面に一段の放射暗文を施している。内外面とも最初に角のある原体(板か)でなでたと思われる痕跡がある。淡灰褐色を呈する。

IV類(58) 内面に一段の放射暗文と底部のらせん状暗文がある。外面は口縁端部付近を横方向に磨き、下部は分割して斜めに磨いている。径16.3cm、高さ6cmの中型品しか出土していない。赤褐色を呈する。

V類(57) 細片のため詳細は不明だが、内面の暗文は口縁端部付近にまで及んで水平に近くかつII~IV類のものとは傾きが逆である。二段放射暗文の上段部であろう。外面は横方向に密に磨かれている。淡灰褐色を呈する。

以上であるが、I類は藤井寺市土師の里遺跡79-17区SD02の中に類例がある。⁽¹⁾ II類は同じく⁽²⁾土師の里遺跡79-17区の土器溜りの中の小形杯、難波宮下層SK10042・SK10043の中の小形杯の主体をなすものである。III類はII類の亞種かと思われる。IV・V類は不明だが、II・III類よりは新しいかと思われる。この他に皿の底部らしい扁平な破片があるが、外面に木ノ葉の圧痕が残っている(図版三六)。

甕(59)は体部内面ヘラケズリで外面タテハケである。口縁部内面にも横方向のハケ目が残っている。前記した難波宮下層SK10042の甕に近似している。

また大畦2の内部で、大畦3との交点の少し東側から「富官家」と墨書きのある土師器の杯(60)と須恵器の杯(61)・甕(62)が出土している。須恵杯は完形品である。墨書き土器は約2分の1に割れている。この墨書きのある土師杯は、技法的には前述のII類に近く胎土も共通しているが、口径13.4cm高さ3.0cmと大きく、器形は浅い。また内面の暗文は正放射ではなく、平行暗文の束を一部重ねながら6束前後で一周させる言わば分割放射暗文である。見込みにはあらいラセン暗文がある。II類よりは確実に新しく7世紀後葉のものとして大過ないだろう。大和の飛鳥IV期杯C IIに対応するかと思われる。墨書きについては後述する。完形の須恵杯は口径9.4cmと小さい。墨書き土器よりはやや古い時期の所産かと思われる。甕もこれと同様の時期と思われる。

総じて第2水田の土壤内では、V類の杯・木ノ葉底の皿が最も新しく、7世紀後葉～末葉頃を下限としている。これは第2水田廃絶時期の上限を示している。杯I～III類等7世紀前～中葉の遺物が多いのは、本来下層にあったものが第2水田の土壤内に取り込まれたと解せる。

大畦2内の3点の土器は、畦内への埋没時期は同時でも土器自体には時期幅がある。墨書き土器だけについて見ると第2水田経営期間中のものである可能性が高く、また人為的に半截された可能性もあるので、埋納品であるかもしれない。しかし伴出品も含めると、少なくとも一括埋納は考えにくい。

この他I区トレンチ部南端の第2水田土壤から、軽形埴輪の一部が出土している(63)。淡灰黄色を呈し、表面には赤色顔料が残っている。矢は深い線刻によって写実的に表現されている。比較的古い古墳があったものと思われる。

17層内（第30図中）

第1水田の土壤内から出土したものである。土師器の杯・高杯・甕と須恵器の杯がある。土師杯には内面に暗文がなく前述のI類と同じである。高杯(66)の杯部は碗状を呈している。小型の甕(67)にはハケメがない。これらは土師の里79-17区S D02出土の土器群中に類例がある。

北部16～18層内（第30図下・第31図上）

G区からI区北部にかけての第2水田土壤と、それ以下で20層（黒色粘土）上面までの遺物である。16～18層を層位的に充分分離できなかったので、一括せざるを得なかった。

土師器の杯・鉢・壺・甕・瓶と、須恵器の杯・蓋・高杯・壺・提瓶がある。5世紀中葉から6世紀末葉頃のものであろう。この内初期須恵器に属する(71・73)と形式的に古相を呈する土師器の瓶(77)は、黒色粘土の上面ないしその凹地内に破片となって散在していた。おそらく18層形成時期の上限を示すものであろう。この直前の時期の集落の一部が北接する城山（その2）で検出されている。

古墳時代各溝内（第31図下）

G区のS D01（2重溝）の主水路側から須恵器の杯が一点出土している（78）。6世紀後葉のものである。

同じくS D02内からは須恵杯（79）と蓋（80・81）が出土している。杯は口径14.1cmと比較的大きい。蓋の外面には天井部と口縁部を分ける筋が残り、（81）は径15.1cmと比較的大きい。6世紀前葉～中葉のものと思われる。

2I区のS D04からは、下層から庄内式土器が、再掘削後の上層から土師器・須恵器が出土している。上層の土器も下位の炭化物を含む灰黒色粘土内のもの（84～86）と上位の青黒色粘土内のもの（82・83・87）に分けられる。下位では土師壺（85・86）が時期不明だが、須恵杯（84）は6世紀中葉のものであろう。上位には6世紀後葉の須恵杯（83）があるが、この上位の層準は溝の外にまで延びていた可能性が高い。

19B層内（流路内）（第32図上）

流路1内の黒色粘土（19B層）から、須恵杯（89～91）と蓋（88）が出土している。蓋はやや古いが杯は6世紀後葉のものである。

流路2内の同じく黒色粘土中からは須恵器の杯（93～97）、蓋（92）、無蓋高杯（98）が出土している。蓋と高杯はJ区からのもので、6世紀中葉頃であろう。杯は図示したものすべてが10I区の狭い範囲内から出土したもので、形式的にも差がなくおそらく一括廃棄されたものであろう。口径は9.3～10.0cm前後と非常に小さい。5世紀末～6世紀初頭頃のものであろう。

S P01内（第32図下）

土坑内埋土から計22個体分（杯16・蓋5・高杯1）の須恵器が出土している。ほとんどが完形品であるうえ、形式的にもよくそろっている。ただ土坑底に密着するものは少なく、蓋の一つは立った状態で検出された。一括廃棄されたものと考えられる。土器の用途を知る上ではむしろ廃棄直前にここで何が行なわれたかが問題となろう。

蓋（99～102）は径11.0～11.5cmで、外面の天井部と口縁部との境には稜がある。口縁端部は凹んだ端面をもつ。杯の口径は蓋のものを別にすると、9.2～10.4cmで、9.5cm前後が多い。口縁端部の面は大半が明瞭だが、丸みをもつものもある。蓋受部の上面に蓋の口縁部片が融着した例が多い。（103）は灰白色を呈すが、他はすべて一般的暗灰青色である。高杯は有蓋式のもので、脚部は根元から折れている。脚部の破片は出土していない。或いは杯として再利用されたものかもしれない。総じて先の10I区の流路2から出土した土器群と差はなく、5世紀末～6世紀初頭頃のものであろう。

20層土坑群内

20層上面、20層搅拌土及び24層上面を底面とする土坑群からは、弥生時代中期から古墳時代前期までの土器が出土している。弥生時代の土器は第Ⅲ様式古段階のものからあらわれ、第Ⅴ様式頃のものまである。古墳時代前期の土器は、その殆どが初頭の庄内期のもので、布留式傾向のものが1点出土している。

第Ⅲ～Ⅳ様式

壺、鉢等では櫛描文を多用する時期から回線文を施す時期までのものである。壺では叩目や内面ヘラ削り手法を用いるものも一部この時期になると思われるが、次項でとりあげる。

土器はI区北部の20層搅拌土内から多く出土した。壺C・D、無類壺A・B、高杯B、鉢A、台付鉢A、壺a・b、蓋がある。

壺C（168・169）はっきりした頭部をつくらず、そのまま外反する口頭部をもつものである。168は上下に拡張した口縁部外面を強く横ナデし、胴部外面に刷毛目が残る。口径12.6cm。

壺口（170・171）短かく直立する頭部から水平ちかく外反する口縁部を持つものである。171は上下に拡張した口縁部外面に2条の回線文、胴部中位に刻み目をもつ。口径16.6cm。

無類壺A（175）丈高い器体が内傾し、そのまま終わる口縁をもつものである。外面は衣の襞状に波うち、無調整である。内面は刷毛目調整、口縁内面に指押えの痕が残り、その上を横ナデする。口径15.0cm、器高24.5cm。和泉市池上遺跡、堺市四つ池遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡などに類例がある。和泉地方に多い土器である。

無類壺B（174）胴部に張りをもつ器体に、段状口縁をもつものである。174は口縁端部を折り曲げ、ナデつけて段状の口縁をつくる。胴部に簾状文と波状文を施す。口径15.6cm。

高杯B（178）水平に広げた口縁部の内端に凸帯を持つものである。178は杯と脚部の一部。

鉢A（177）椀形の器体から内傾する口縁端部を擒んで横ナデする。底部外面はヘラ削り、他は内外面とも刷毛目。口径18.6cm、器高12.7cm。

台付鉢A（179）鉢Aに脚をつけたもの。179は脚部を欠く。垂直に立ち上がる口縁の外面に5条の回線を施す。口径23.6cm。

壺a（164）倒鐘形の器体に短かく外反する口縁端部が丸く終わるものである。口径14.8cm、器高17.7cm。

壺b（133・135～136・180～182・186～189・195）倒鐘形の器体に短かく外反する口縁の端部に面をもつものである。133は「く」の字形に折れ曲る頭部を横ナデし、胴部は肩から強く張り出す。肩部に刻み目を持つ。内面に指頭痕が残る。180はよく縮まった頭部に極く短かい口縁がつく。器表面は磨耗しているが肩部に刷毛目が残る。口径8.3cm、器高22.4cm、180・181、186・187・189はは拡張した口縁端面に回線文を施すもの。181は底部外面をヘラ削りする。187・189

は胴部上位から丸く張り出るもので第IV様式のもの。195は口径33cmを測る大型のもの上方に
摘まみ上げた口縁内端部に爪痕が残る。

壺 (173) 笠形で口縁端部に面をもつ。内外面とも磨耗が著しい。口径17.5cm。

第IV様式～第V様式前半

この時期の土器は主にG、H区から出土した。壺A・C短頸壺水差し、高杯A₁・A₂、甕がある。甕は第IV様式の前半のものと岐別することが難かしかったため、外部に叩目を施すものと内面ヘラ削りするものをこの項に含めた。

壺A (118-149) 球形の器体に漏斗状にひらく口頸部をもつものである。118は口縁端部を肥厚垂下させ、断面三角形状になる。器表面は磨耗が著しい。口径16.8cm、器高33.2cm。

壺C (121、150、151) 丈高的器体に僅かに立つ頸部から短かく外反する口縁をもつものである。121は内外面ともナデ成形で内頸部下端に甘い稜をもつ。口径11.4cm、器高19.0cm。150、151は、内傾する頸部が「く」の字形に外反し、口縁端部は横ナデして凹線状になる。151は胴部内面をヘラ削りする。口径11.3cm。

短頸壺 (119・120・125-127) やや丈高的器体に外開きぎみに短かく立ち上がる円筒形の口頸部をもつ壺である。120は口縁端部に小さな抉りを持ち、内端部をハケ目調整する。胴部に叩目が残る。口径12.1cm。125は口縁端部が尖りぎみに終わるもの。頸部は内外面とも刷毛目、胴部外面ヘラ磨き。やや粗雑なつくりである。口径12.4cm、器高26.3cm。126は頸部が外弯ぎみに立ち上がり、口縁端部に面をもつ。頸部にヘラ描きの記号文『(宍)』をもつ。口径10.2cm、器高26.2cm。127は体部が脹らみ、肩部にスタンプ文による連続渦文をもつ。胴部は刷毛目とヘラ磨きによる整形、内面に指頭痕が残る。口径10.6cm、器高25.0cm。同じスタンプを用いたと思われる土器が2G286地区付近で出土している(助大阪市文化財協会の教示による)。

水差し (152) 器体の肩部に把手をもち、筒形の口頸部に指支えの抉りをもつものである。指支えの抉りが退化し、短頸壺に近い形態になっている。口径10.8cm。

高杯A₁ (132) 楕形の杯部に脚との離ぎ目が厚味を持つものである。脚部上端に円孔(6コ)をあける。口径17.2cm。

高杯A₂ (129-131・153・154) 杯の腰部に稜をもち、口縁部が短かく立ち上がるものである。脚部は出土していない。129の杯部は内外面ともヘラ磨き。ほぼ直立する口縁端部を外に肥厚させ面を持つ。口径26.8cm。130は口縁部が外開きぎみに立ち上がる。器表面は磨耗し、調整不明。131は、浅い杯部に短かく直立する口縁端部を僅かに外弯させて丸く終わるもの。口径27.0cm。153は短かく立ち上がる口縁外面を上下2段に横ナデする。杯部は内外面とも細いヘラ磨きを施す。内面は暗文状になる。口径26.4cm。

甕 (134・137・140-145・156-160・162・163・183) 甕つなつくりで形態の定まらないものが多い。叩目や内面にヘラ削りを施すものをこの時期に含めたが、形態的には第III～IV様式の土

器との間に明確な差は無い。

137は肩の張る胴部、外反する口縁端部に面を持つ。口径15.4cm。183は胴部が丸くはりだし、内面を頸部までヘラ削りするものである。「く」の字形に折り曲げた口縁の端部は上方に拡張する。外面は刷毛目。口径14.6cm、器高約24cm。157は胴部がはり出し、口縁端部は内傾して上下に拡張する。端面は丸味をもつ。体部内面はヘラ削り、外面は水平方向の叩目、下半はヘラ磨き。胴部に刻み目を持つ。口径15.0cm、器高30.0cm、140は叩目の上に刷毛目調整する。口径16.4cm。141・142・162・163は粗雑なつくりのもの、142は短かく折れ曲がる頸部外面を強く横ナデし、口縁端部は丸味を持つ。口頸部は横ナデ、体部は刷毛目調整。口径12.9cm、器高15.2cm。142は口縁部に厚みを持ち、内頸部に指頭痕を残す、体部は叩目の上から下半をヘラ削りする。内面に粘土紐の痕が残る。口径14.6cm。162は盃つなつくりのもので、口縁と突出する底面の中心が大きくズレる。体部はナデ、底部内面は刷毛目調整。口径13.2cm、器高27.1cm。163は体部の内外面ともにヘラ削りするもの。特に内面は頸部まで縱方向のヘラ削りを施す。口径14.7cm。

144は第V様式前半のもので叩目の原体は荒い。「く」の字形に折り曲げた口縁内面に指頭痕を残す。

古墳時代初頭

この時期に属するものでは壺と甕が出土している。壺は第V様式系のものが1点だけ出土した。甕は第V様式系、庄内式のものがあり、他に布留式土器が1点含まれる。

壺C (199) 丈高的器體に内傾ぎみに立ち上がる頸部が外反して口縁をつくるものである。口縁端部を強く横ナデする。体部外面は磨耗しているが頸部と底部にヘラ磨きが残る。器高21.5cm。

第V様式系甕 (203~205・226) 203・226は肩口から張りだすもの。口縁部は、外寄ぎみにひらき、端部は面をもつ。203は口径14.8cm。205は庄内式の手法を真似、細めの叩目に頸部を強く横ナデし、その上に擬凹線をもつ。口縁端部をわずかに摘まみ上げ丸く終わる。口径17.8cm。

他地方の土器

酒津系甕 (200・201) 外反する口縁端部を上に拡張し、その外面に櫛描文を施すものである。200は9本、201は8本の櫛描文がある。口径はともに15.8cm。良く似た土器であるが内面のヘラ削りの位置が異なる。

播磨系甕 (202) 水平近くまで短かく折り曲げた口縁端部を摘まみあげて横ナデするものである。体部は肩から強く張りだし、外面は刷毛目、内面は全面に指頭圧痕が残る。播磨地方に多く見られる甕である。口径13.5cm。

218は小さく突出する底面と肩から張り出す球形の胴部に外開きぎみに立ち上がる頸部をもつものである。胴部の叩目は庄内甕に比べると荒く、内面は刷毛目調整する。頸部も内外面とも刷毛目が残る。美園遺跡で分類された壺D (口径の大きな短い口縁部をもつ壺) (『美園』大阪文化財セ

ンター、1985)に似るが、この土器は外面に煤が付着している。

庄内式壺(206~225・229・230)丸味をもった器体に細筋の叩目を施し、内面は頸部からヘラ削りし、頸部に鋭い稜をもつ。口頸部は「く」字形に外反する。胎土に角閃石や黒雲母を多量に含み、暗褐色を呈するものである。底部は丸底で、やや尖りぎみの底面を残しハケ目調整する。219は内面ヘラ削りの後、指ナデと刷毛目調整するもので内頸部の稜があまい。

今回出土した庄内式土器は完形品が1点だけであり、全体的な傾向をつかみにくいが、口縁部の形態には、1. 外反した口縁端部に面をもつもの(223)。2. 口縁端部が内湾ぎみに終わるもの(206・222)。3. 口縁端部をつまみ上げるもの、がある。また、口縁端部をつまみ上げるものには断面が三角形になるものと丸味を持つものがあるが、内傾するもの、外開きのものなどつまみ上げの際の成形に個体差がみられる。

つぎに、多くの土器が出土したSK96とSK104を比較すると、SK96の土器は206~208のように口縁端部のつまみ上げが小さく、体部は肩部から張りだすなどの特徴がみられる。SK104は良好な胴部破片が出土していないが、庄内壺では口縁端部を一様につまみ上げ、酒津系壺では内面ヘラ削りが頸部から肩部に下がるなどやや新しい要素が多くみられる。

以上の庄内式壺は、口縁部の特徴、体部外面の刷毛目が胴部下半に多く、上肩部での規則的な刷毛目成形がみられないこと、胴部は肩口から脹らむこと、内面のヘラ削りは水平方向が多く、頸部に鋭い稜をもつことなどがあげられ、庄内式壺を2つの時期に分けた場合、前半期から中葉頃の要素を多くもっている。

布留傾向壺(228)球形の体部に刷毛目を施し、内面は肩部からヘラ削り、頸部には指頭痕が残る。口頸部は外開きに短く立ち上がり、口縁端部は摘まんで強く横ナデする。口縁端部の特徴は類例をみないが、形態的には布留式壺の特徴を備えている。土坑群で検出された最も新しくなる土器である。

石 器

磨製石剣(S12)SD04の溝底部に接した褐色粗砂層内から出土。弥生時代の土坑内にあったものと思われる。長さ19.6cm、幅2.9cm、厚さ0.9cm、尖端部をわずかに欠失するがほぼ完形である。断面はやや丸味をもった菱形を呈し、鎌は直線的に延び、鎌線に平行又は右下方向への細かい研磨痕が部分的に残る。基部は、基壠から6.6cmまで刃つぶしを施し、横ないし斜方向に丁寧な研磨を行なって鎌を磨き落とし、幅も2.5cmまで削って握りをつくる。頁岩製。

不定形石器(S13)剣片の一辺に外弯する刃をもつスクレイパー状の石器である。長辺6cm、短辺4.1cm、厚さ0.6mm。

20層内（第45～46図S 3～7）

5点のサヌカイトの石器・剝片と土器の細片が出土している。I区の流路1と2の間で312～320ラインの範囲内に集中している。20層そのものは非常に薄くなっている。(S 3・4)は剝片であろう。(S 5)は刃器で、最大で $8.3 \times 5.1\text{cm}$ あり最長辺に刃部がある。両面から細かく調整されている。片面には両側からのあらい剝離痕があるが、他面は自然面である。(S 6・7)は凹基無茎式の石鎌で、最大 $2.7 \times 1.8\text{cm}$ (S 6)、 $2.3 \times 1.5\text{cm}$ (S 7)ある。(S 6)は先が少しおけている。(S 7)は五角形に近い。

土器の細片は數十点あるが、いずれも黒褐色を呈し細緻を多く含んでいる。弥生以前であることは疑いない。

総じて縄文後・晩期の遺物が含まれている。遺構に伴うものではないが、分布が集中することからすれば遠からぬ場所に遺構があるのかもしれない。

21層内（第46図S 8・11）

(S 8)は10 I区流路2内の下部黒灰色粘土内の出土である。サヌカイトの凹基無茎式の石鎌で最大 $2.2 \times 1.6\text{cm}$ ある。縄文晩期のものかと思われる。(S 11)は4 I区流路1内の紫黒色粘土内出土の石核である。自然面を多く残している。

22層内（第44図231、第46図S 9・10）

231の土器は、Iトレンチ流路1内最下部の灰白色微砂層内からの出土である。北白川上層式(縄文後期前葉)に属す。出土の破片すべてが同一個体に属するようで、底部だけが欠落している。表面の磨耗は少ないが風化が著しく接合はできなかった。口径の復元等は必ずしも正確とは言えない。(S 9)はJトレンチ流路2内最下部の灰白色微砂層内からの出土である。サヌカイトの石核で、少し自然面を残している。(S 10)は4 I区流路1内最下部の砂礫層からの出土である。サヌカイトの刃器で最大 $6.2 \times 3.0\text{cm}$ ある。最長辺に両面から調整された刃部がある。双方の面で剝離の方向が異なっている。著しく風化している。

24層内（第45図S 1・2）

いわゆる長原地山の上部を掘削中に2点だけ出土した。(S 1)はサヌカイトの有舌尖頭器である。Iトレンチ南部313ラインで出土した。最大 $5.8 \times 3.1\text{cm}$ ある。先端が少しだけ欠けている。基部の抉れが比較的大きく、新しい部類に属す。(S 2)はサヌカイトの刃器で、Iトレンチ南部316ラインで出土した。最大 $6.0 \times 3.0\text{cm}$ ある。最長辺に片面から調整された刃部がある。またこの反対側の辺にも両面からの調整痕らしきものがある。縦形の石匕に似ているかもしれない。

刃器は縄文後期頃のものであろうから、24層上面からの乾痕内に入り込んだものの可能性がきわめて高い。有舌尖頭器については微妙だが、その出土位置が刃器も含めて上位—20層内出土石

器群の分布範囲内にあるため、同じく乾痕内に入り込んだ可能性を残している。

墨書「富官家」について

これについては、既に当センターで発行している『大阪文化誌』第18号（1985）で紹介したことがあるが、ここであらためて報告する。

墨書きされていたのは土師器の杯（第30図60）でほぼ2分の1に割れている。割れ口が整っているので人為的に半截されたものかもしれない。土器は7世紀後葉頃に比定されるものだが、伴出した須恵器の杯（61）はこれよりやや古い特徴を有している。

墨書きは口縁部直下の外面に、口縁に平行して縦書きされている。「富官家」より上部に続いて字があったかどうか不明である。ただし反対側の割れ口部分にも字の頭部とおぼしき墨痕があるため、残る未発見の部分にも墨書きがあったことは確実である。

長原一城山遺跡では、これまでにも墨書き土器は出土している。

③	「令」 土師杯	8世紀後葉	⑤	「大田」 土師杯	平安時代前期
④	「宮」 *	8世紀 ?	⑤	「大吉」 *	*
④	「大」 黒色土器A類椀	10世紀			

などである。「宮」は注目されるが、時期が異なり字体もかなりくずれている。

周辺遺跡で「家」に関する墨書き土器を抽出すると、

⑥	「玉井家」 柏原市船橋遺跡	土師鍋	8世紀
⑦	「大家」 同上	須恵器杯蓋	同上
⑧	「北家」 同上	須恵器杯	同上
⑨	「米家」 大阪市難波京	土師皿	8世紀中葉
⑩	「中津家」 堺市長曾根遺跡	土師皿	8世紀
⑪	「大家」 堺市鶴田池東遺跡	須恵器杯	同上

などがある。「家」の書体は「富官家」のものとはいずれも異なっているが、その中では「玉井家」の「家」に多少共通する点があるのに見える。それはともかく8世紀代の墨書き土器の中には「家」は比較的多く、今後も資料は増加すると思われる。しかし7世紀代に関しては、これまで墨書き土器そのものに例がなかった。この点、当墨書き土器は「家」の表記に関する非常に古い例を提示することとなった。

さて「富」は一字であれば吉祥句だが、上に字を補って地名等の一部と見ることもできる。調査地の西300mには「吉富」の字名がある。¹⁰ただこの字名は明治初期に著された栗田寛『神祇志料』では確認されるものの、それ以前のいつまでさかのぼれるかはわからない。¹¹また富を貯富の一部とみて、此地を貯富のミヤケとする解釈もある。

「官家」は菅原の限りでは日本書紀・僧尼令・8世紀の勅・8~9世紀の太政官符の中に用例

がある。(第8表、70頁)

書紀の官家はすべてミヤケと訓が付されている。宣化紀と大化紀を除けばすべて朝鮮半島にあったとされる日本府、或いはその統治領域をさした語である。宣化紀の纂紫における「那津官家」も、これと密接な関係にあるがごくである。一方大化紀では官家を領ることと郡縣を治めることがセットで描かれている。これに依拠して官家を屯倉の発展形態の一つとして理解されるのが一般的である。その屯倉の推定地と「犬飼」の地名は重複する場合が多いとされる。本調査区のH・Iトレントを含む2坪分は字名が「戌飼」である。

僧尼令の例は、寺家が囁請(不正行為としての)して官家を乱すことを禁止したものである。集解古記によると官家とは百官のこととされている。百官とは一般にすべての官人の意味である。書紀の用例とは異質である。古記は大宝令の注釈だとされるから、官家は大宝令に既にあったことになる。先の書紀は養老4年(720)の完成だから、ほぼ同時期に実に様々な使われ方が存在したことになる。一方同じ集解の朱説では不明としながらも官家を官司に言い替えている。

天平宝寺4年(760)の勅では、寺家(東大寺)に対する対概念として官家があるごくである。ここでは諸仏事を修行する主体であった。具体的には太政官をさしていたと思われる。

宝龜から大同に至る諸官符は先の勅と一連のものである。

弘仁5年(814)の官符では天皇への奏状が引用されており、その中に官家の語がある。すなわち「官物の収納場所が帳簿通りになっておらず、公家や百姓に損害を与える場合がある。今後は帳簿通りに収納し、官家をして、損害を減じ黎民を救済せしめたい。」というものである。公家に対してより限定された語として官家がある。奏状の中に出てくるとは言え官符そのものは諸国に下知するためのものであるから、ここでは国司もしくは国衙機構をさすものではないだろうか。

嘉祥元年(848)の官符には「官人が死亡もしくは解任された時にはすみやかに報告せねばならない。しかるに在外の官司の場合、報告が官家に到るのが遅滞しがちである。5日以内に報告せよ。」とある。この場合官家は太政官をさしていたと思われる。

寛平6年(894)の官符では宮家とあるが、写本によっては官家とあるらしい。「諸国の百姓が王臣家の人と称して国郡に従わず乱暴狼藉を働いている。もし僧人・張内・資人でもないのに宮家(官家)人と称して乱暴を働いた場合は決して許してはならない。」というものである。ここでは官家(官家)と王臣家は同義語である。

寛平7年(895)の官符でも先の例と同じく写本によっては官家とあったり宮家とあったりしているようだ。同じ一つの写本の中にも両者が併用されたりしている。官符の中には美濃國の解状が引用されており、この中に官家の語がある。すなわち「此國の郡司等は(私物を)官家(宮家)に仮に寄進し、家業を譲りてそれを當國に送付し、官物負担を免れている。国司は虚辞と知っていてもその権勢を恐れて口を閉ざしていた。」とある。ここでも文脈上先の例と同じく王臣家をさしていたようだ。

以上であるが、これらの用例からすると官家は、公家のような語とは異なり文脈上特定の対象

があったことは明白で、その対象を婉曲に表現したものだったと言える。対象は多様であって決して固定されていないが、日本書紀と寛平年間の官符を別にすると、8～9世紀を通じて文字通り官の機構もしくはその職掌の中で動いている。僧尼令の注釈に見える百官と官司はそれら的一般的表現であろう。ただ朱説の官司に比べると、古記の百官の方がより広く模然としている。或いは8世紀前葉以後、用法上の一定の収束があったのかもしれない。

一方古記と日本書紀とを対比させて見ると、8世紀前葉以前の用法は多様であるというより混乱している。表記法だけについて見ると、書紀と令で同じという例は官家に限らず他にもある。こうした場合は、例えば「郡」・「屯田」等に見られるように用法上も一定の統一が図られており、それなりに一貫性があるかのごとくである。^同書紀編纂と令編纂は当然ながら互いに没交渉ではあり得ない。この点官家に関する用法上の混乱はいささか奇異の感さえ受ける。

官家が一般名詞であったことは既に明らかだと思われるが、更に8世紀前葉までの段階では表記法として定着していたかどうかさえ危ういのではあるまいか。

第8表 「官家」の用例一覧

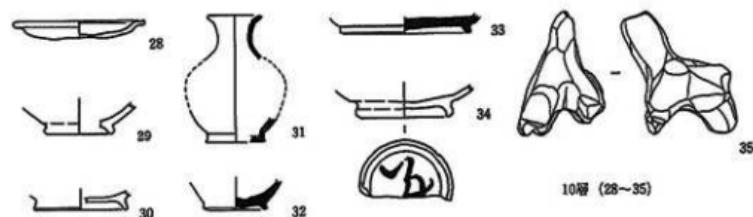
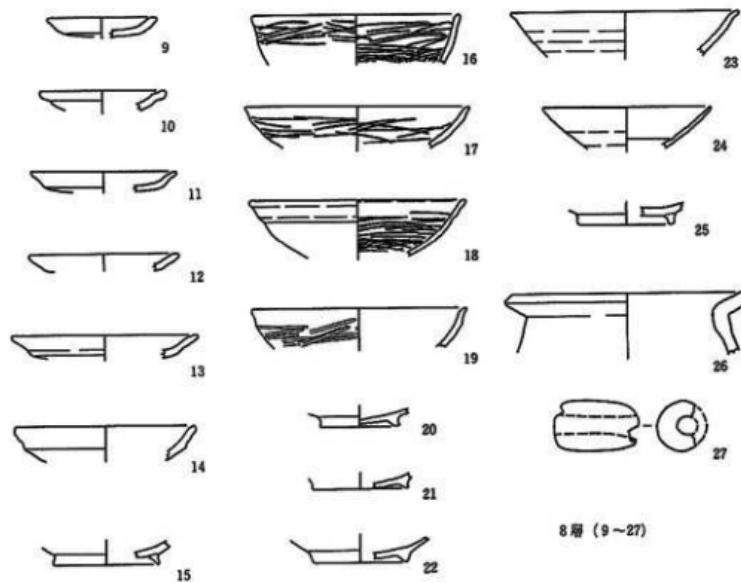
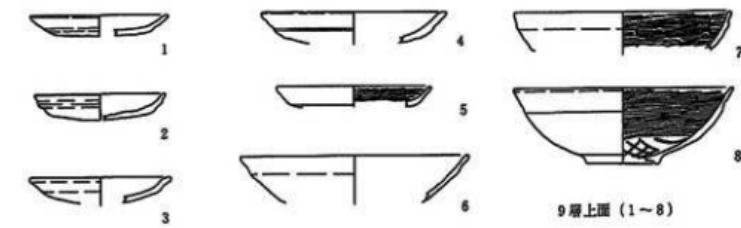
出典・年代	記	場所・内容	参考
日 本 書 紀	神功天皇前紀 (仲哀9年10月)	内官家屯倉を定む	新羅 岩波一古典文学大系 上巻 P339
	*	(一に云わく) 内官家として…朝貢らむ	新羅 同 P341
	雄略20年冬	百濟國は日本國の官家として由来遠久し	百濟 同 P496
	繼体6年12月	國毎に初めて官家を置きて	朝鮮諸国 下巻 P26~27
	宣化元年5月	官家を那津の口に修り立てよ	集紫 同 P58
	欽明5年2月	海西の諸國の官家をして	百濟・任那 同 P80
	6年9月	(天皇の所用めず、彌移居の國)	百濟・任那 同 P92
	14年8月	(海表の彌移居) 2ヶ所	百濟・任那 同 P104~106
	推古31年7月	任那は、是元より我が内官家なり	任那 同 P206
	常の隨に内官家と定め		*
令	孝德大化元年7月	百濟國を以て内官家としたまふこと	百濟 同 P272
	8月	此の官家を領り、是の郡縣を治む	一般に屯倉 同 P274
太 政 官 符	大宝僧尼令 有事須論条	本文 参照	古記云一百官 朱云一官司 國史大系「令集解」 第一 P223~224
	天平宝字4年7月23日(760)	*	太政官 同「續日本紀」後 P273
	宝亀11年12月10日(780)	*	太政官 大同官符所収
	延暦14年閏7月21日(795)	*	同「類聚三代傳」前 P346
	大同3年3月26日(808)	*	同前 P346
	弘仁5年9月22日(814)	*	国司・國衙 同後 P398
	嘉祥元年12月13日(848)	*	太政官 同前 P298
	寛平6年11月30日(894)	*	(官家?) 王臣家 同後 P617
	7年9月27日(895)	*	(+) * 同後 P604~605

とは言え7世紀後葉に官家という表記が実際にあったことは本調査によって事実となった。一般名詞とは言え、8～9世紀の例よりしてそこに何らかの実体的対象があったことも予想される。ただその対象は、書紀の解釈から引き出された屯倉もしくはその発展形態と同一であるという保証は必ずしもないのではないか。集解古記等に引きつけた解釈もまたあり得るのではないかと思われる。

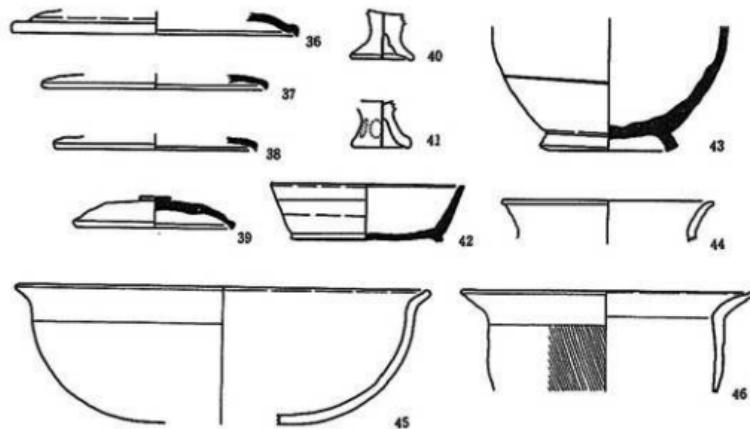
このように見ると、現状では墨書きの官家に具体像を与えるのは非常にむずかしい。当面は出土状況とその造構論から始めるのが妥当かと思われる。

註：

- (1) 大阪府教育委員会「土師の里遺跡発掘調査概要V」1983年
- (2) (財)大阪市文化財協会「難波宮址の研究」第七 1981年
- (3) (財)大阪文化財センター「長原」昭和53年
- (4) 大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会「発掘された大阪」昭和59年
- (5) 大阪府立泉北考古資料館編の図録『記された世界』に写真が掲載されている。
- (6) 平安学園考古学クラブ 原口正三『船橋I』(真陽社)
- (7) 藤沢一夫他『柏原市史』第4卷資料編(I) 柏原市役所 昭和50年
- (8) 大阪府教育委員会「船橋遺跡発掘調査概要」1980年
- (9) 註(4)文献
- (10) 註(5)文献に写真が掲載されている。
- (11) 大阪府教育委員会「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」1980年
- (12) (財)大阪市文化財協会「地籍図から見た長原遺跡の復元」(『長原遺跡発掘調査報告』1982年)
- (13) 志紀郡志紀長吉神社二座の項に「按古老伝説、此地旧名長吉なりしを後分て、吉富・長原二村としつる也、……。」とある。
- (14) 藤沢一夫氏による。
- (15) 猪 弘道「犬飼氏および犬飼部の研究」(『律令国家成立史の研究』吉川弘文館 1982 所収)
- (16) 続日本記における用法に従った(養老元、6.17(717)、天平6.11.21(734))。これらでは出家・得度等における手続上の不正行為をさす語であろう。
- (17) 「郡」都評論争の結着によって既に明らかである。
- 「屯田」 養老令の官田は、集解古記の記述よりして大宝令では屯田であったとされている。仁德紀の屯田は「天皇の地位に付随した世襲財産としての土地」(竹内理三「原始社会の土地制」『土地制度史I』山川出版 昭和48年)と解釈され、令制の屯田と用法上統一されている。



第28図 8~10層出土遺物 (1/4)

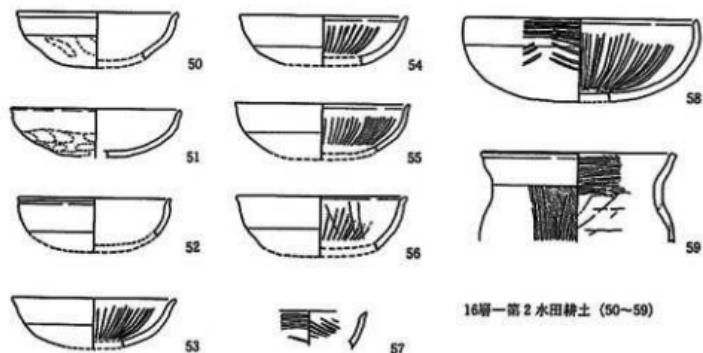


11層—第4水田上の砂 (36~45)



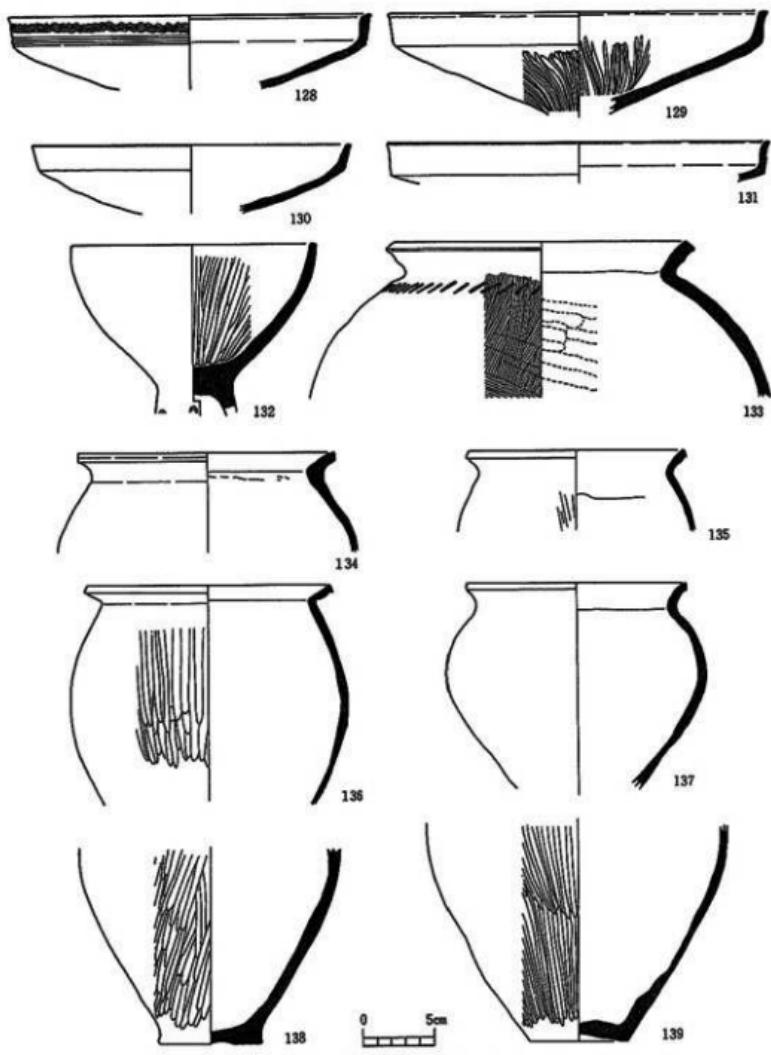
12層—第4水田耕土 (47)

12~14層相当層 (48~49)



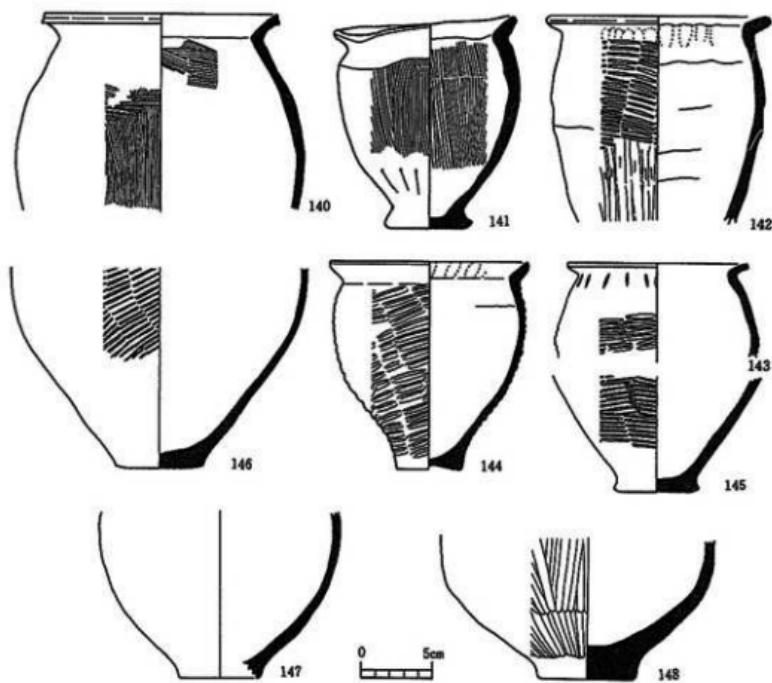
16層—第2水田耕土 (50~59)

第29図 11~16層 (含第4・第2水田) 出土遺物 (1/4)



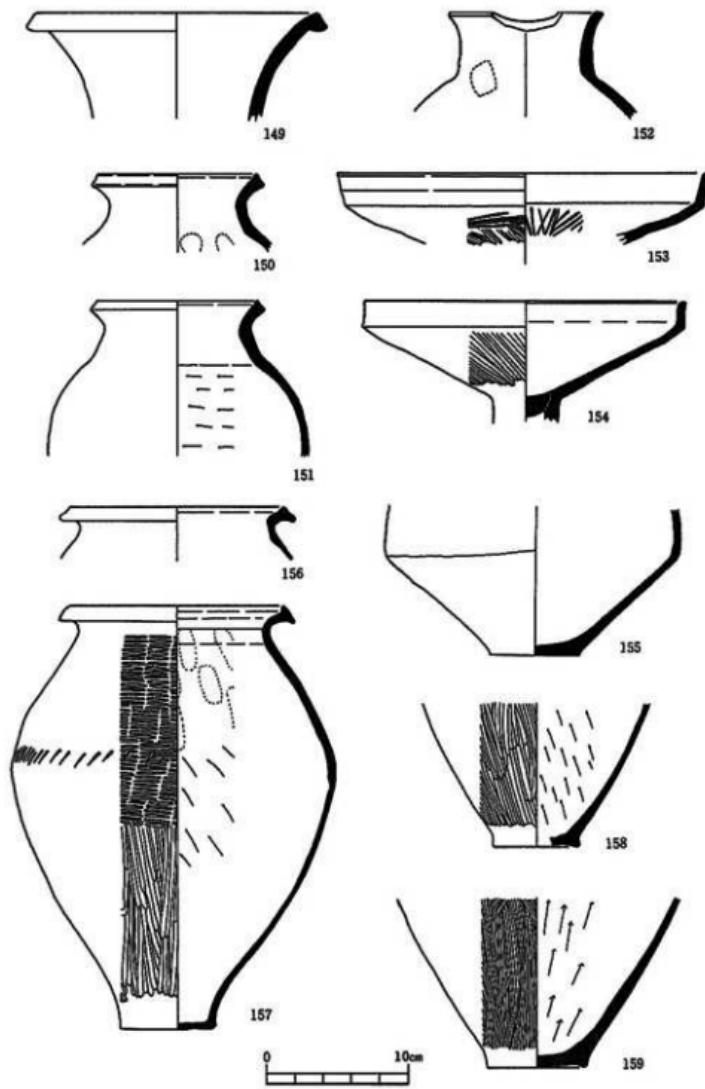
SK203(128)、SK136·7下層(129·132·136)、SK206(130·133)
 SK12(131)、SK129(134)、SK18(135)、SK127(137)
 SK110(138)、SK126(139)

第34圖 20層土坑群出土土器 (G區—2) (1/4)



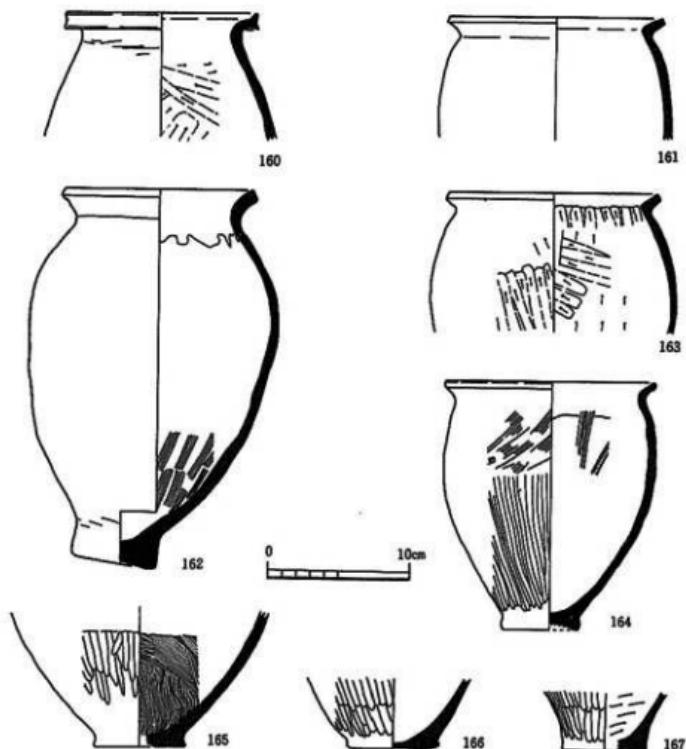
〈SK136・7下層(140・143)、SK204(141)、SK23(142)
SK44(146)、SK203(144)、SK08(145)〉

第35図 20層土坑群出土土器 (G区-3) (1/4)



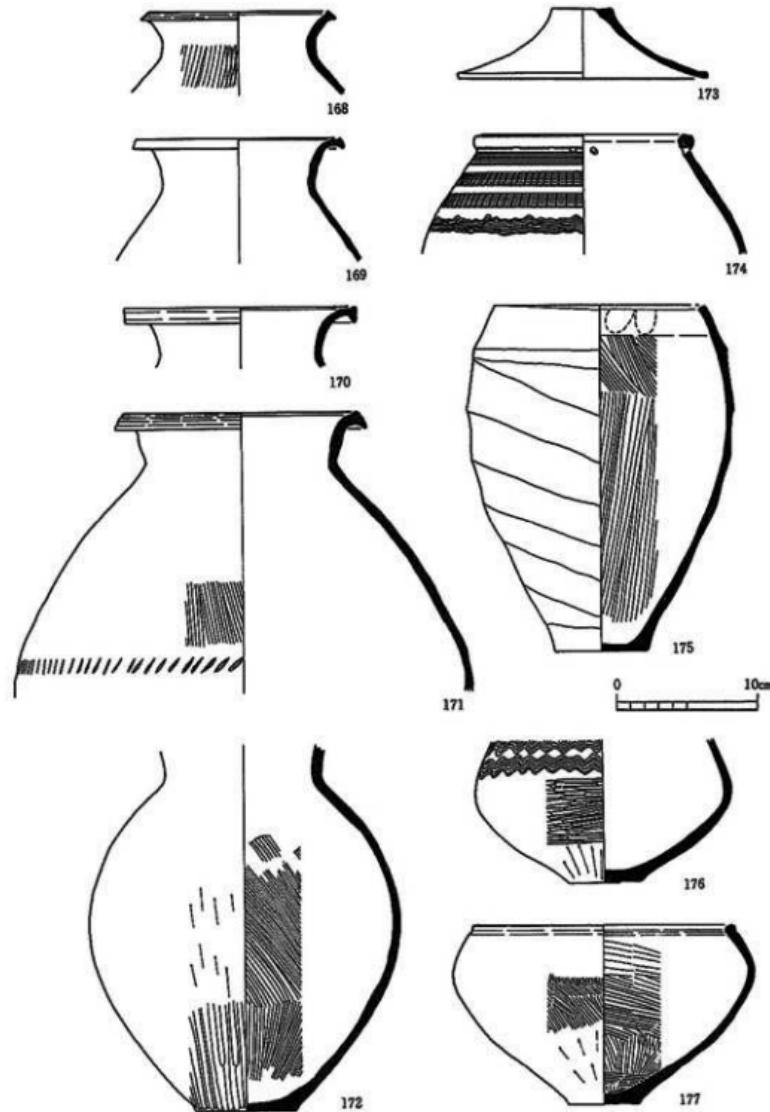
〈搅拌土出土〉

第36図 20層土坑群出土土器 (H区-1) (1/4)



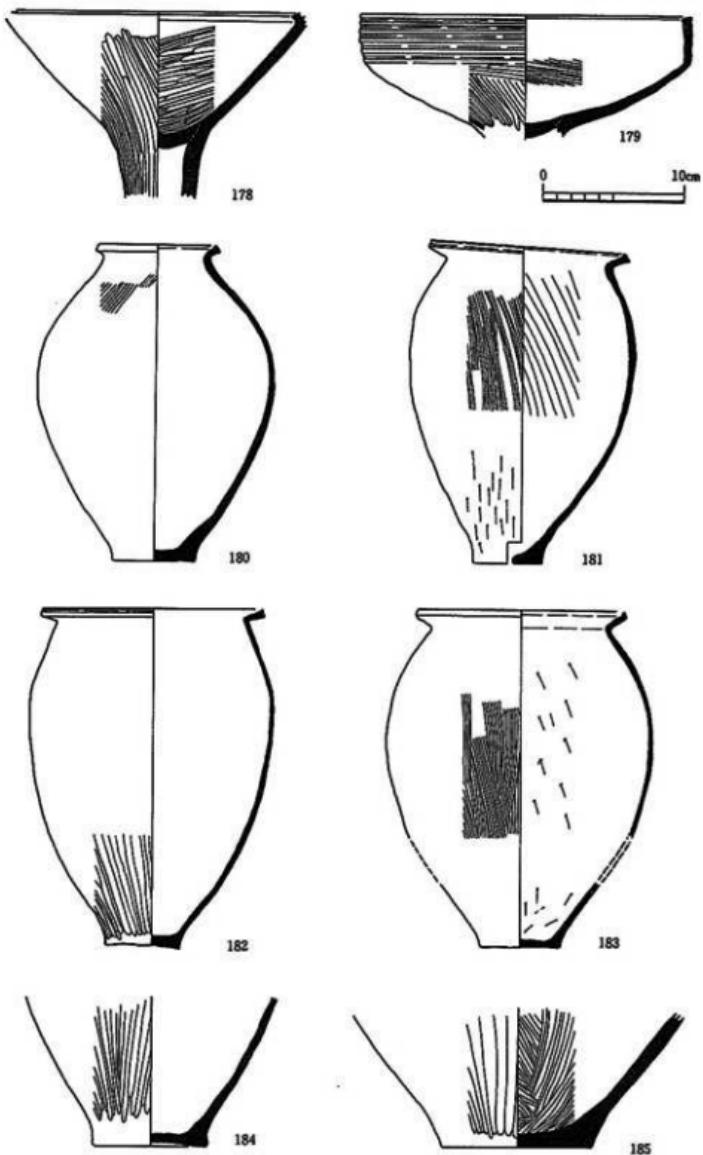
〈搅拌土出土〉

第37図 20層土坑群出土土器 (H区-2) (1/4)



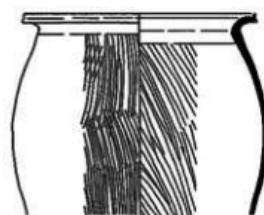
(SK 2-1 (175)、他は撿拾土出土)

第38図 20層土坑群出土土器 (I区-1)(1/4)

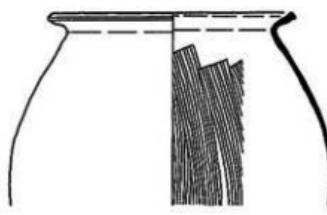


(SK 2-2 (181)、SK 104 (182)、SK 90 (185)、他は搅拌土出土)

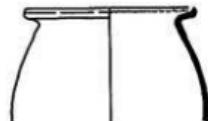
第39図 20層土坑群出土土器 (1区-2)(1/4)



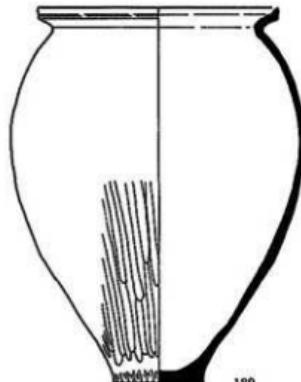
186



187

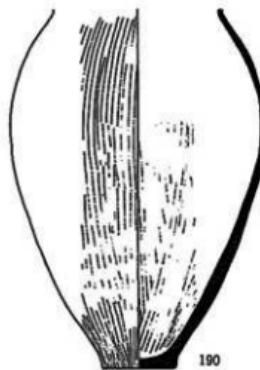


188



189

0 10cm



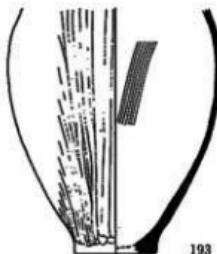
190



191

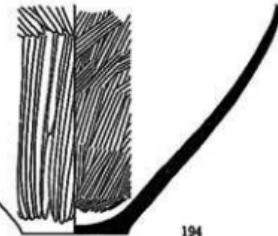


192



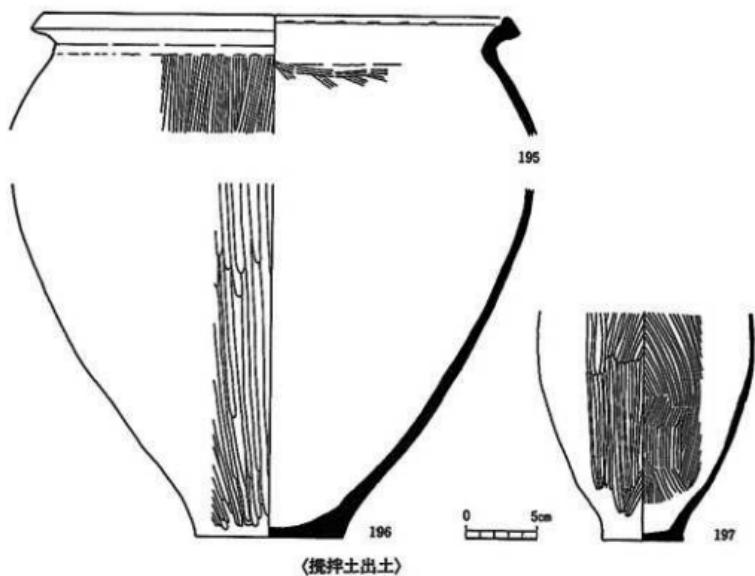
193

〈SK96(188)、他は搅拌土出土〉

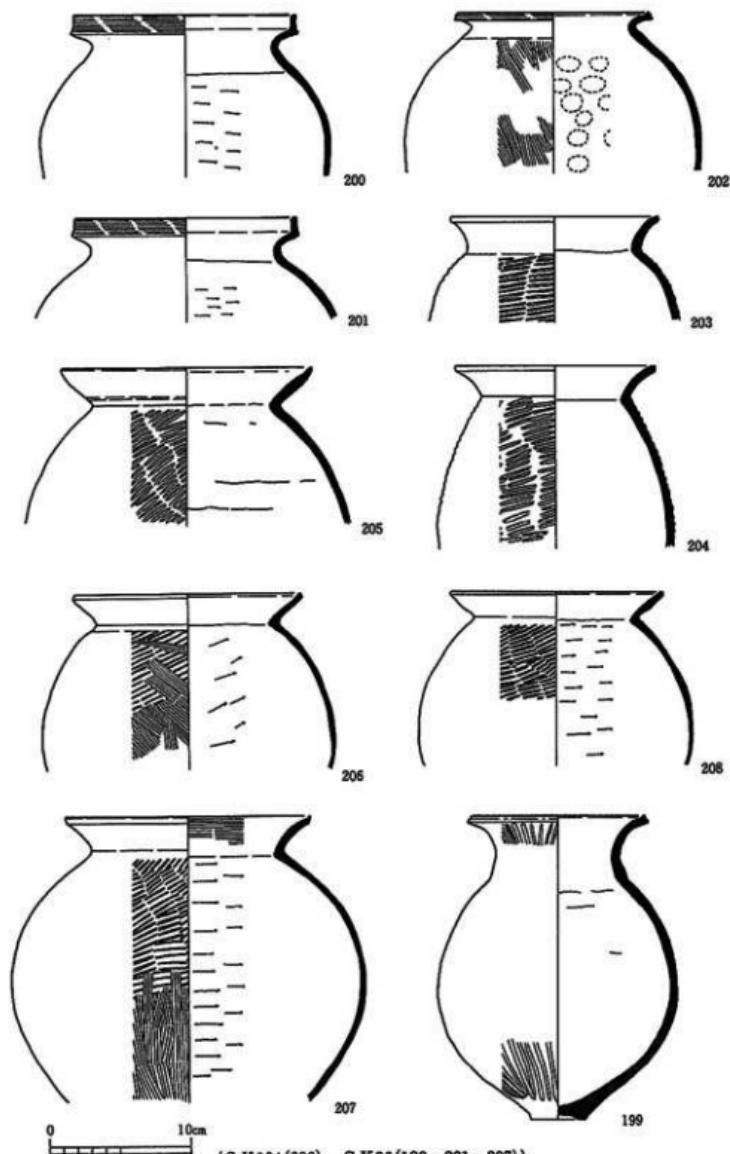


194

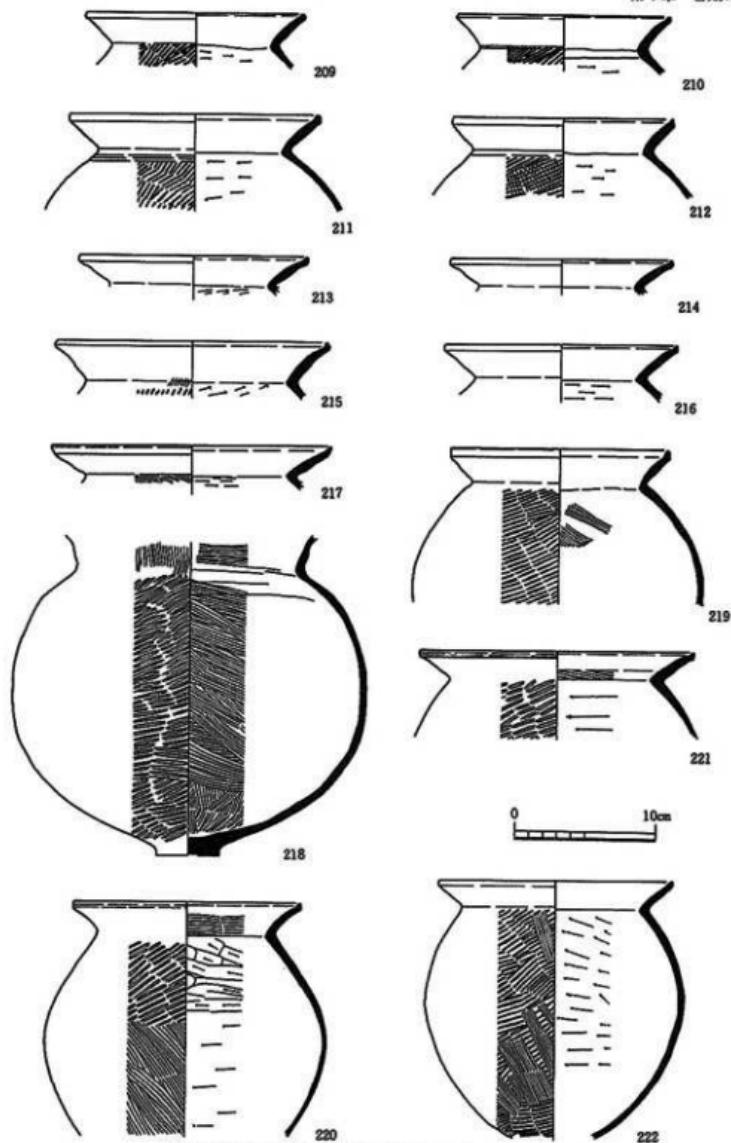
第40図 20層土坑群出土土器 (I区-3)(1/4)



第41図 20層土坑群出土土器 (1区-4)(1/4)

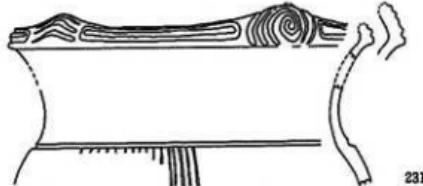
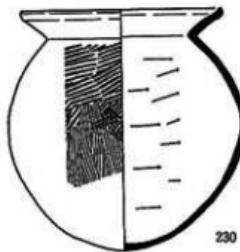
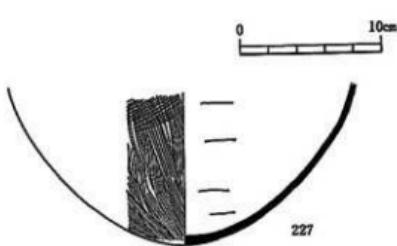
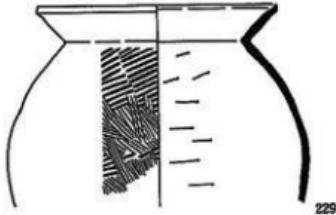
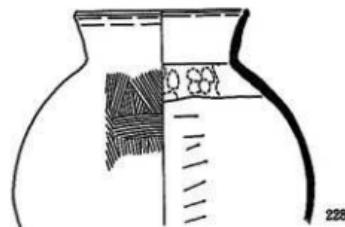
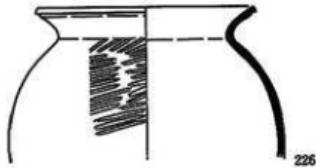
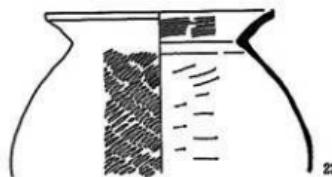
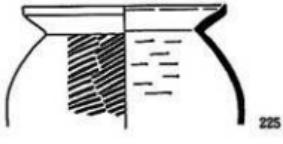
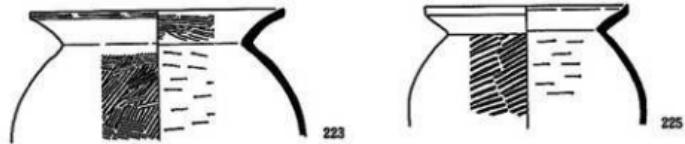


第42図 20層土坑群出土土器 (I 区-5) (1/4)



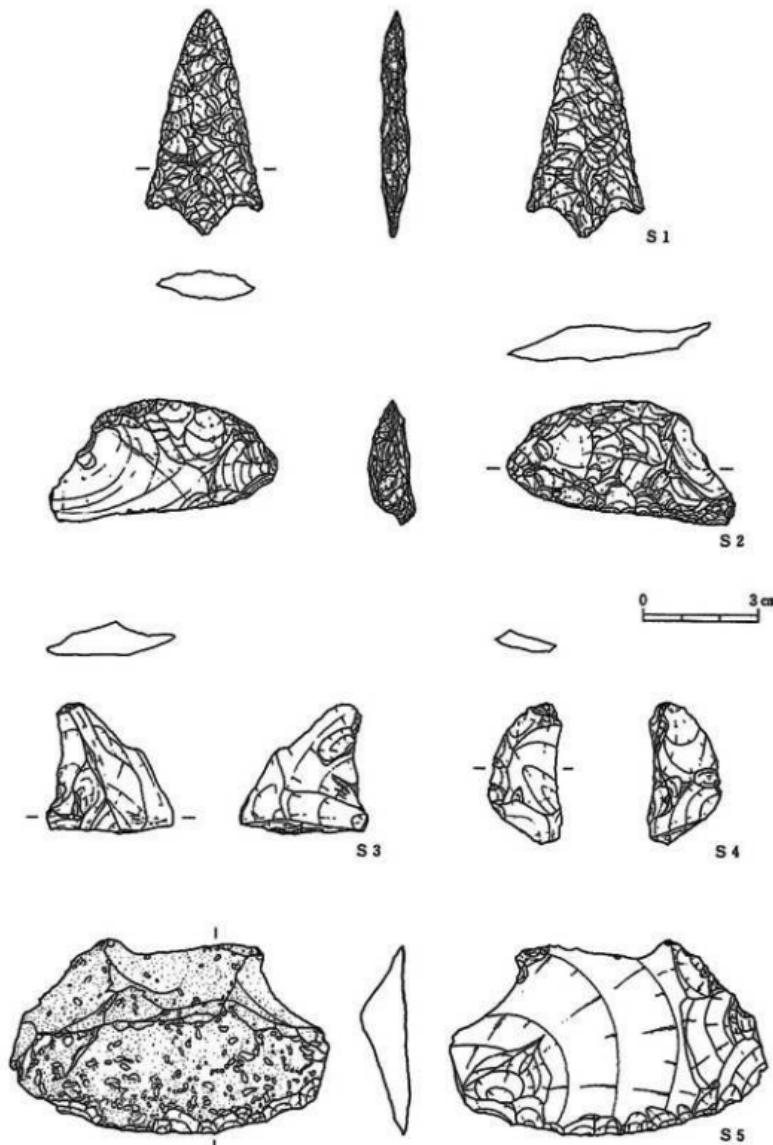
〈SK96(209~212)、SK104(213~218)、SK94(219)
SK100(220)、SK162(221)〉

第43図 20層土坑群出土土器 (I区-6)(1/4)



〈 S K98(223)、S K100(224)、S K91(225~227)
S K106(228·229)、S K163(230)、流路1(230) 〉

第44図 20層土坑群(1区-7)・流路1最下部出土土器



第45図 20層以下出土石器 1

第VI章 水田について

当調査区では7期の水田跡を確認した。それらはすべてが同一地点で重複しているわけではない。水田をおおう砂層等を鍵として層位的な前後関係からわけられたものである。そこでもう一度各水田の層位について整理したうえで、各期水田の特徴を述べ、周辺におけるこれまでの調査成果との関係について見ておきたい。

第1節 水田の層位と年代

第1水田の土壤は南方では地山の上に直接のっている部分が多い。そこでは地山の小さなブロックを含む紫灰色の粘土となっている。畦畔の部分だけ地山が帯状に少し高く残った部分もある。耕耘・攪拌を行なっていたことは明らかであろう。その際地山の一部とその上に堆積していたはずの黒色粘土(19層)をも取り込んでいたと思われる。一方旧流路上やI区においては水田土壤の下に黒色粘土が残る場合が多い。ここでは土壤は暗青褐色を呈している。黒色粘土だけでなく、おそらくその上に青灰色を呈する粘土(18層に相当する)があって、この両者を取り込んでいたと思われる。ただ南方の高い部分にはこの青灰色粘土がなかった可能性が高い。

大阪市の調査によれば、長原15区の南西150m地点にも第1水田土壤と層位的に同じらしい黒灰色粘土がある。⁽¹⁾ここではその下層から7世紀前葉頃の井戸とピット群が検出されている。水田化に先立って集落の移動があったことがわかる。第1水田は7世紀前葉をさかのばらない。水田土壤からは古墳時代の遺物に加えて7世紀前葉～中葉の遺物が出土している。この中には廃絶した集落の遺物が混入していることが当然考えられる。しかし上層との関係からすれば第1水田はさほど新しくはなり得ず、出土遺物に従って7世紀中葉を中心とした時期としてよいであろう。

第2水田は、第1水田上に堆積した青灰色の粘土・シルトを土壤としており、ほとんどの部分で第1水田の上部をも取り込んでいる。この青灰色の粘土・シルトは、旧流路上と最南部の長原15区において最も厚く、かつ微沙質となっている。第1・第2水田の間には砂層の挟在はない。水田土壤内及び畦畔内から古墳時代の遺物に加えて7世紀前葉～末葉の遺物が出土している。畦畔内からの墨書き器の時期とも合わせて、第2水田は7世紀後葉～末葉に經營の1点があったと考えられる。調査区の南方ではここ数年来の調査によって、水田が広範囲に保存されていることが判明している。それらの層位的関係を検証するのは非常にむずかしいが、少なくとも当調査区に近い所では、この第2水田と同一面であるとは言える(旧『長原』古墳時代Ⅱ北部を含む)。

第2水田は厚い砂礫で埋没し、廃絶している。ただし調査区内の北部までは砂礫が及ばず、かわって青灰色のシルトでおおわれる。砂礫の上面にもシルトは薄く延びている。このシルトの一定の厚さ以上のところを土壤として利用したのが第3水田である。残念ながら確認できたのは分布範囲のごく一部に過ぎないと思われる。その第3水田も一部が砂でおおわれるが、先の砂礫は

ど大規模なものではない。或いは砂礫の縁辺部でその一部が二次的に移動したものかもしれない。この少範囲の砂の上面とその北部には青灰色微砂含みシルトが堆積している。これを利用したのが第4水田である。やはり一定の厚さ以上の部分を利用していている。第3・第4水田は規模・形態共に同様のものと思われ、年代的にも接近していたと思われる。

第4水田をおおう砂は厚いところで80cmに及ぶ(11層)。分布はそれまで砂の及んでいなかった周縁部を主としていたと思われる。砂層内の上部からは8世紀末葉を下限とする遺物が比較的多く出土している。第4水田の土壤内からは7世紀末葉より新しい遺物は出土しなかったが、その廃絶は8世紀に下る可能性が高い。

第5水田は7～8世紀の砂礫の上に堆積した灰褐色粘土を土壤としている。実際に面として水田を確認できたのは、J区と長原15区に限られる。(当センターの『長原』昭和53で報告した15・16トレンチの上層水田は第5水田と層位的に同じである)。南方200～300mには7～8世紀の砂堆が自然堤防状に高くなっている。その直上には10世紀代の堀立柱建物があった。自然堤防状の砂堆の高まりは当調査区内にもあり、その直上には平安後期以前の遺構群がある(H～I北部)。当時こうした高まりは他にも残っていたと思われるが、この間にあって相対的に低い部分では粘土が堆積している。第5水田はこうした粘土を利用したものである。水田土壤とその相当層からは10～11世紀頃の遺物が出土している。また水田をおおう砂層の上面付近には13世紀前葉頃を下限とする遺物が出土している。廃絶の下限は13世紀前葉頃であるが、水田の存在そのものは10世紀代にさかのぼる可能性を残している。

第6水田は、調査区内北部の低地に厚く堆積した淡灰褐色粘土を土壤としている。層位的には8層とした砂堆の中世包含層(12世紀後葉を下限とする)より新しい。ただしこれを確認できたのは、8層が北に向かってかなりレベルを下げ、薄くなった部分に限られた。北接する城山その2調査区では、同一の水田面が広範囲で検出されている。

第7水田は、調査区全体をおおいつくした灰褐色粘土・シルトを土壤としている。実際に水田面が確認できたのはI区南部から長原15区に限られる。遺物がほとんど出土していないので中世後期という以上には限定できない。

第2節 水田の特徴

〔第1水田〕

大畦・小畦の区別がある。その方向は南西一北東に延びるものと、これに直交するものが多い。地形の起伏に対して合理的に設置されている。田積はこの時期の水田に一般的な40～70m程度のものが多かったと思われる。水路は検出されていない。水口は確認できなかった。

〔第2水田〕

第1水田と異なる点は、

1. 地形条件にも関わらず、東西・南北に直線的に延びる畦畔があること。

2. それらの設置にあたっては、一部で一町といった普遍的な距離と形態をとっていること、である。

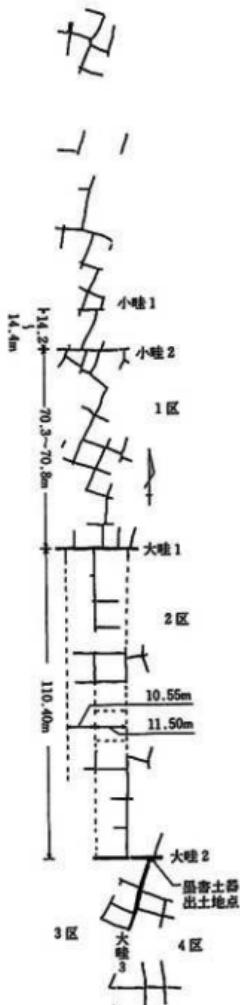
第2水田の土壤は、第1水田の上に直接のっており、また両者の畦畔が同じ位置にある部分も多かった。このことからすれば、両者の間に空白期があるかどうかはわからないが、第1水田を再興させたものが第2水田だったと言える。先の相違点はその再興の際に一部が改変されて現出したものとも言える。ただ第1にあげた直線的畦畔については多少不分明な点がある。大畦1・2は明らかに第2水田特有のものだが、小畦1・2もそうであるかは確認できなかつた。大畦1・2と一連のものとして新たに設置された可能性はあるものの、第1水田期になかったとは断定できない。この点を保留すれば、第2水田の特徴は第2にあげた普遍的な距離と形態という点に集約される。これは2区の中に集中的に現われている。

2B区の南北距離は110.40mである。これを360歩とすれば、1歩は30.666……cmとなる。

2区の東部は旧流路上にあたっているためか畦畔は乱れている。しかし西部は明らかに長地形に配置されている。南北に長い長地の2筆にまたがって調査したと言える。1筆毎の幅は先の計算によれば34.40歩と37.50歩となる。2筆分を合わせると71.90歩(約72歩)、すなわち5分の1町である。2筆合わせて2段となる。

一般に長地形の土地割は条里地割の一要素である。しかし第2水田のそれは、第1水田の部分的改変に伴うものであり、条里地割に先行するものである。現条里とは方向こそほぼ合うものの南に43~44mほどずれている。条里の一般的成立以前に、部分的に長地形の地割が存在していたと言える。ただこれが東西にどう延びるかについては、第2水田ではわからない。

一方南方では大阪市の調査によって南北にまっすぐ延びる水路が検出されている(第49図)。これはSD 302とされたもので、当初の幅4~5m深さ0.8~0.9mあり、延長約125m分が検出されている。⁽²⁾現条里の坪界線直下に位置している。この水路の延長部は、当センターによるNo 8・46トレンチ内にありSD 023として報告され⁽³⁾ている。ここでは西南西方向に延びている。大阪市の報告ではこの



第48図 第2水田畦畔配置図(約1/2000)



第49図 第2水田とその周辺図（約1/4000）（網部は古墳の墳丘部）

水路の時期を慎重を期して「奈良時代末—平安時代」とし、さらに「その造営年代はもう少し遡る可能性もあり得る」と言及している。この水路の上層には10世紀のSD303～305があるので、これより古いのは確実である。また水路は砂礫によって埋没しているが、周辺での砂礫の存在時期は10世紀以後を別にすると8世紀末葉を下限としている。こうした点からすると当時の水路の造営年代は8世紀末葉をさかのばる可能性が大きいと言える。水路の西側では水田址も検出されており、これは明らかに第2水田の時期のものである。この水田址は「東部ではSD302に畦が切断されている」ので、水路より古いとされている。すなわち、第2水田の後に現条里に合致した水路が掘られたということになる。ただこのSD302が畦を切るのは、氾濫時にできた拡幅部においてだと見ることもでき、幅数mの当初の水路と畦との関係は必ずしも明らかとは言えないのかもしれない。この点は将来の検証をまたねばならない。

また調査区の南南東約600mの地点では、同じく大阪市の調査によって8世紀末葉を下限とする砂で直接埋没した水田址(6A層上面)⁽⁴⁾が検出されている。ここでは東西・南北方向共に現条里の坪界線直下に大畦畔があった。坪が既にあったことは確実で、当地での現条里の初源をここに求めることができる。ただこの坪内部の畦畔は、下層(坪のない段階)の畦畔を踏襲したものであり、第2水田のような整った長地形を呈してはいない。坪内部が必ずしも整っていないという点では、時期は下るが9世紀末葉頃の八尾市佐堂～久宝寺北遺跡の水田や、13世紀頃の長原遺跡の水田⁽⁵⁾でも同様である。これらは半折形的・長地形的ではあっても、そのものではない。八尾市木ノ本遺跡の10世紀前葉頃の水田でも、検出範囲は狭いものの整った形になっていたとは考えにくい。坪内部の地割はその土地の地形的条件一水利的条件に制約されるから、整っていないとは言えそれを奇とするに足りない。今後典型的な形のものが検出される可能性は当然ある。にもかかわらず、第2水田は長地形地割が改変によって単独で出現している点において、やはり注意される。条里地割(坪の面的広がりとして)と長地形地割を要素として分離できるとすれば、第2水田では長地形地割だけが典型的な形で出現したと見ることができる。

この他第2水田を特徴づけるものに墨書き器(「富官家」)の出土がある。これは長地形地割の南を限る大畦2内から出土したもので、水田と同時代のものである。「官家」が何を表わすかは不明だが、その意味するところのものと周辺に広がる水田址とは無縁ではないだろう。その中に長地形地割が先行的に存在することは注目される。もしその出土位置が偶然でないとすれば、「官家」と長地形地割を直接結びつけることもできる。

またこの時期牛が存在することは確かだが、その使用形態は明らかにできなかった。

なお当地は河内国の志貴郡と淡川郡との境付近に位置している。近くに式内志紀長吉神社があるので、或いは志貴郡だったかもしれない。

[第3水田]

検出面積が狭いので詳細は不明だが、第2水田小畦2とその周辺の小畦畔を同じ場所で踏襲し

ている。なお第2水田の長地形地割の部分は既に砂で埋もれ、第3水田の範囲内ではこれを新たに設定していなかったようだ。

[第4水田]

第2水田の小畦1と小畦2の一部を含む小畦畔を同じ場所で踏襲している。長地形地割の再設定はない。

[第5水田]

7～8世紀の水田と異なる点は、

1. 畦畔に大小の差が特に見られないこと、
2. 一筆の田が大きいこと、
3. 畦畔にそった小水路があること。

である。またこの時期I区とJ区の土の堆積状況が少し異なり、J区の方が厚い。両区の間に大きな水路なり土手状の高まりがあったことが想定できる。現在ここには道路と水路があり、現条里の坪界線が通っている。第5水田は南北に長い長地形的なものだが明確ではない。

3の小水路は坪の内部を通った非常に浅いものである。第1～第4水田期に比べ水路の存在頻度が高くなつたと言える。浅いので排水用ではないだろう。また以前に比べて水がかりが悪くなつたとも言えないので、用水分配方法が変わつたのかもしれない。とすれば、以前の畦越しの分配とは異なり、小水路を媒介として各筆が分離される方向に進んだと言える。一筆の田が大きくなるのも、このことに即応していたかもしれない。

先にも記した八尾市佐堂～久宝寺北遺跡の9世紀末葉頃の水田では、これに伴う水路が調査区内にはない。⁽⁸⁾ また八尾市八尾南遺跡では13世紀前葉頃に砂で埋もれた小河川と、同じく坪界・坪内を通る水路數本が検出されている。⁽⁹⁾ また八尾市木の本遺跡では、前述の水田との関係は必ずしも明らかではないが、平安時代中期が下限とされる流路・溝が多く検出されている。⁽¹⁰⁾

平安時代中葉頃を境に水路が増えてきたと予想できる。一般に現条里の坪界線直下には平安後期以後の水路が多いというのもこの事に対応している。

[第6水田]

畦畔等は検出されなかつたので詳細は不明だが、一筆の面積がかなり広かつたものとは言うことができる。

[第7水田]

第5水田と同様、畦畔にそつたらしい小水路がある。他の点については保存状態も悪く不明である。

第3節 水田の位置

長原一城山遺跡周辺では、旧石器から近世に至るまでの遺構遺物が検出されており、各期の土の堆積状況についても概略判明している。これらは大阪市による精密な調査の実施に負うところが大きい。周辺の環境の復元等については(財)大阪市文化財協会によって果たされるであろうが、ここでは各期の水田の置かれた地理的位置について、特に川のあり方に焦点をあてながら素描しておきたい。本稿作成にあたっては既刊書・現説資料の他、大文協による未発表の資料も使わせていただいた。懇切な援助を惜しまれなかつた大文協の諸氏に厚く感謝いたします。^{註10}

〔旧石器～弥生後期〕

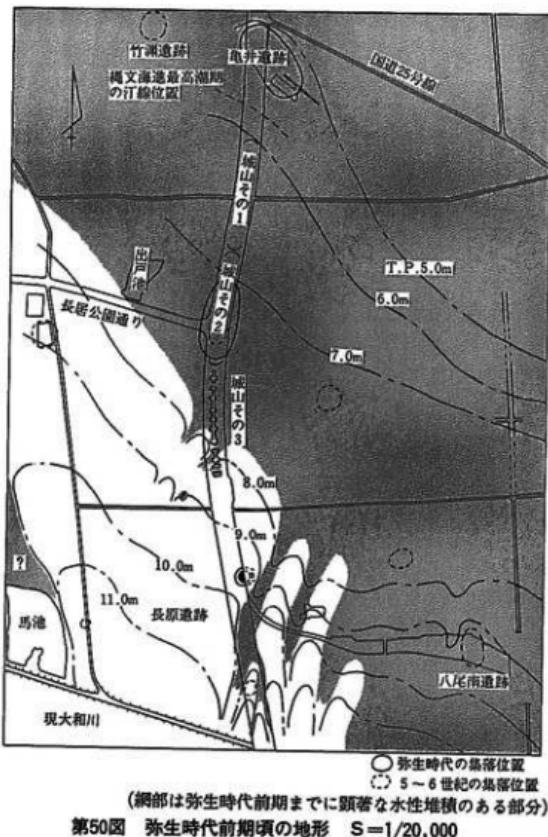
調査区周辺は、南から延びる東除川の段丘と、大和川・東除川・大乗川等による沖積地との接点にあたっている。付近では現在段丘面と冲積面との間に明確な崖はなく一線が引きにくい。これは崖も含めた段丘面の低い部分が冲積層下に埋没し、面としては途切れのないスムーズなものになってしまったためである。縄文海進の最高潮期に海は龜井付近まで侵入するが、以後の海退によっても河床は大局的には上昇する一方であった。沖積地の地盤は上がり続け、これによって段丘面は狭くかつ相対的に低くなっているのである。こうした変化は縄文後・晩期頃と、6世紀以後、特に中世において著しい。当地のような場合たがって、遺跡立地の上の段丘面とは、当時はまだ冲積層の侵入がない土地という逆説的意味にしかならない。

第50図で弥生前期までに冲積層が頭著に堆積した範囲を示したが、この状況は6世紀頃までは変わっていない。等高線は当調査区の19層にあたる黒色粘土の下面を取ったもので、段丘面においては地山の上面をたどっている。段丘面上では弥生前期であっても黒色粘土の内部にその地表面があった可能性が大きいが、後世水田土壤になった部分が多く、現状では認識がほとんど不能である。

段丘を構成する土壤の最上部(地山一大文協第13層)には旧石器が包含されている。ただ生活面はまだ確認されていない。この段丘を洪積段丘とするか冲積段丘とするかは大文協第13層の位置づけにもよるので、ここでは触れない。

段丘面には開析谷もしくは非常に古い流路痕跡等の凹地が多くある。凹地の内部は縄文後期頃から砂礫層や黒色粘土で徐々に埋積されている。当調査区の2本の流路もこれに属する。黒色粘土は段丘面上にも延びているが、その成因については明らかでない。大阪市の調査によれば、凹地に接して縄文晩期末(長原式)の遺構群がある。また凹地内の粘土を利用した弥生時代中期の水田がある。^{註11}

一方北部・東部の冲積面では、かつての段丘面をおおう冲積作用も弥生前期中葉頃には一応のおさまりを見せる。散在する微高地、もしくは局部的な傾斜変換点付近には弥生時代の集落がのっている。近辺の水の得やすい所は水田化されていたであろう。



第50図 弥生時代前期頃の地形 S=1/20,000

〔古墳時代〕

段丘面と沖積面とを問わず全般に黒色粘土でおおわれた後のことであるが、地形的な特徴について見ると第50図のあり方と大略変わらない。

段丘上でのこの時期は、凹地においても砂礫の分布は確認できず、黒色粘土の最終的な形成期として認識できる程度である。長原の西部には馬池の位置する谷があり、また南南東に離れた藤井寺高校の南にも北東へ向かう顕著な流路痕跡がある。¹⁴ 東除川の主流部はこのどちらかに向かっていたと思われる。段丘上ではこの時、100基を優に越える古墳(長原古墳群)が築かれていた。

一方沖積地では、黒色粘土上面の低い部分から徐々に、炭化物などを含ませながら水性粘土(当調査区18層に相当)が堆積を始めている。こうした粘土を利用して水田があったかもしれないが検出はむづかしい。かえって城山(その2)では粘土堆積以前の黒色粘土上面で、水田もしくは畠

⁰⁵
の構造が検出されている。

[7～8世紀]

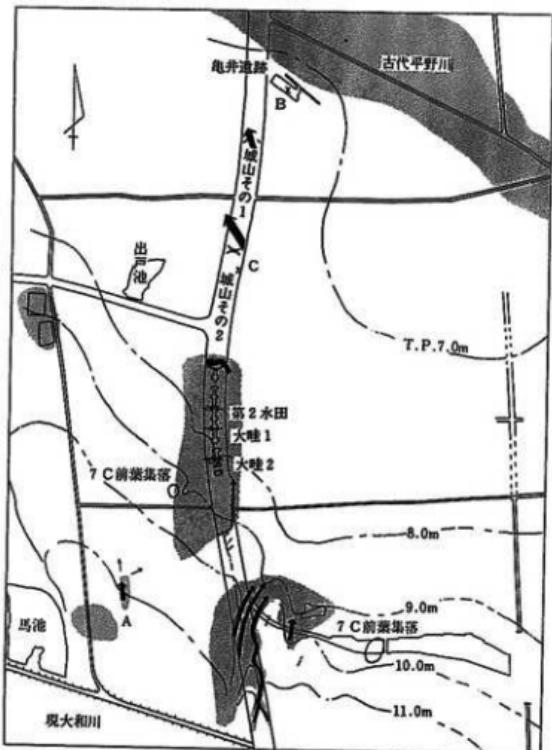
段丘面ではこの時期から粘土・砂礫が広く顕著に見られる。前代までの凹地での堆積という次元をはるかに越えている。東除川の主流部がこの地に流れ込んだと考えられる。砂礫を運んだ流路はこれまでに5本検出されている(第51図)。南から北及び北東に向かうもので、前代以来の凹地にあるものと、そうでないものとがある。⁰⁶ 規模は互いにさ程の差はなく、幅8～10m、深さ1～2m程度のものである。全体として東除系と言える。これらのすべてが同時に存在したものではないが、一本づつ単独に存在したということもまた考えられない。現状ではその変遷を追うのはむずかしい。

砂礫の下からは、ほぼ例外なく水田址が検出されている。当調査区の第1～第4水田がこれにあたる。長原～城山全体では、累積的に南北1.2km東西1kmに及んでいる。少なくとも第2水田の段階では段丘上のかなりの部分が水田化されていたと考えられる。それらは多くの古墳のすそ部及び7世紀前葉頃の集落の一部をも犠牲にしたものである。

こうした広範な水田の存在は、東除川を段丘上に人工的に上げることで初めて可能になったとする解釈が既にある。⁰⁷ 蓋然性は高いと考える。ただし「人工的」の内容についてはなお検討の余地がある。5本の流路の内、東の4本は前代以来の凹地内にある。これらは今まで漠然と東除川から流れてきたと考えられていた。ところがその東除川での最近の調査によると、中世東除川の直下で検出された古代東除川は、他の4本の流路と大差ない規模であった(西端の流路—第51図A)。すなわち本流と呼べるものではなかった。先に5本の流路全体で東除系としたのはこのためである。凹地内の4本の流路は東除川からの支流ではなく東除そのものであろう。これが人為的に水を引いたものかどうかまでは分からぬが、Aの流路は他よりかなり高い位置にあり明らかに人工的に設置されたものである。開削の時期は定かではないが、当調査区の少なくとも第2水田の用水及びこれを廃絶させた砂礫はAの流路に源があったと思われる。また前節第2水田の項で触れたSD302～SD023も、Aの流路から派生していたと思われる。

Aの流路は第51図で明らかなように他の流路に比してその流域面積はかなり広かった。それ自体で東除川とは呼べないにせよ、非常に重要な位置を占めていたことが分かる。長原の水田に拡大の時期があったとすれば、それはこの流路の開削に負うところが大きい。或いはこれと墨書き器に見る「官家」とは無縁ではないかもしれない。

他の各流路からもそれぞれ水路が派生し、更にそこから支水路が派生している。水路・支水路には場所により疎密の差があったようだ。当センターによる中央環状線内の調査では凹地内の流路群の1つから北方に延びる水路があった(SD112—SD105—SD005)。これは砂礫の空白地(水田は検出されてない)を貫いて更に北へ延びるものだが、その空白地において支水路が何条も派生している。一方当調査区では一本の水路も検出されていない。水路の疎密は微地形的な



(縦部は7~8世紀の砂礫の分布地)

第51図 7~8世紀の流路と地形 S=1/20,000

条件(水がかりの良悪)に左右されるところが大きいと思われる。水路の占める面積を考えると、それは少ないと越したことはなかったであろう。この意味では当調査区の水田の立地は良好だったと言える。詳細については今後の問題だが、長原一城山の水田は場所に応じ、おそらく時に拡大を図りながら経営されていたと思われる。

しかしこの水田も結果的には広い範囲で砂礫の下に埋没してしまった。これを放棄による荒廃としては考えにくい。なぜなら当調査区でもそうであったように、ひどい氾濫を受けてもそこに必要な土壤さえあれば水田を復興させていたのである。^{註44} 荒廃はあくまでも技術上の問題でなければならない。

砂礫の莫大な量からすればよほどの水量が想定されるが、各流路には顕著な堤防を築いた痕跡がない。せいぜい大畦畔程度のものである。氾濫を防ぐための何の支えにもなっていない。そし

て各流路は例外なく数度にわたってひどい氾濫を起こしている。長大な人工流路の存在を思えば労働力不足もしくは労働力の未組織ということは考えにくい。にもかかわらず、治水に関してはパラレルに存在した複数の分流に分散し、個々の分流にはさほどの労働力が投下されていなかつた可能性が高い。導水技術の完成度は高くとも、治水技術が不充分だったと言わざるを得ない。

8世紀末頃の段階で当地は段丘からむしろ扇状地と化した。

一方沖積地においては、南東から北西に向かう川が3本検出されている。城山(その1)に2本(その2)に1本ある。幅10~30m程度のものである。いずれも沖積層だけでなく、その下部にある地山(24層以下に相当)をも下刻して流れていた。古墳時代に既にあった可能性もある。東除川系と大乗川系を含んでいるだろう。それらは8世紀末頃には埋まりつくしており、低地一帯は湿地と化していた。現地割に川の痕跡を残していない。

また亀井遺跡付近を東西に走る大きな自然堤防の痕跡がある。大和川の主たる分流の一つだった古代平野川であるが、最近の調査によると7世紀前葉以後で9世紀初頭までにはかなりの砂堆^四が形成されていたと考えられる。高さ1~1.5m 幅約300mに及ぶものである。この砂堆の形成が南部低地の川をつまらせ、湿地化を促進する起因であっただろう。第51図B地点では弥生後期以来あった川の最上部が沼沢地になっていたとされるが、この埋土には7世紀後葉の遺物が含まれ^四ている。またC地点では8世紀頃とされる淡水性貝類の堆積層がある。^四7~8世紀代の低地には冠水状態の部分が多くかったと思われる。

(平安時代)

かつての段丘部では、7~8世紀の流路は自然堤防状の高みとして痕跡を残している。その高みの上は10世紀前葉頃から集落の場として利用されていた。一帯にはおそらく7~8世紀の砂礫の露出部が多く残っていたと思われる。しかし一部の凹地から粘土が徐々に堆積を始めており、そこには水田があった。当調査区の第5水田がこれにあたる。砂礫の上面であっても畑作は行なっていたかもしれない。また長原東南部から八尾南にかけては、7~8世紀代の氾濫の影響は少なく、継続して水田であった可能性がある。

かつての人工流路Aは平安時代後期頃にはかなり拡幅されていたとのことである。他の7~8世紀代の流路は遅くとも10世紀代にはすべて廃川となっていた可能性が高いから、流路Aの拡幅はおそらく東除川の一本化に伴うもので、10世紀までさかのぼると思われる。これ以後近世初期の大和川付け替えまで、東除川は位置を動かさず天井川となっていた。余剰水の大部分をここに閉じ込めていたと言える。第5水田はここから用水を得ていた。

一方低地部にも新たな川ができる。船橋遺跡南部から西走し、八尾市沼・太田集落を通り、八尾空港西端を北上して、大阪市六反で西折し、出戸で東除川と一本化されて更に西走するものである。古い航空写真などに地割の乱れとしてよくその痕跡を残している。この内船橋遺跡南部では平安時代後期の包含層下に黒色土器の入る厚い砂層がある。^四八尾空港内では水田が検出されて

いるが、それは10世紀前葉頃の砂をかぶって廃絶している。また大阪市六反でも黒色土器の入る厚い砂礫層が確認されている。これらの調査結果からして、この川は大和川本流筋から10世紀頃に流れ出したものと考えられる。距離的には長く連続し、下流部では東除川と合流することからすれば、シートバーではなく川であって、少なくとも下流域ではしばらくは天井川ではなかつたかと思われる。

この頃古代平野川の砂堆も成長を続けていたと思われるが、八尾市の調査によるとこの砂堆上の跡部遺跡で、12世紀前半～中葉とされる土器溜り・ピットが検出されている。この頃までに廃川となっていた可能性がある。八尾市佐堂遺跡の調査では長瀬川(大和川本流)^御の堤防が、10世紀後半以後で13世紀前葉頃には構築されていたとされている。古代平野川の廃川は長瀬川の設定に連動していたと考えられる。

このように10世紀以後の川は、以前に比べると分散の度合が低く、きわめて連続性のよい自然堤防を形成している。長瀬川においては堤防による川の固定が明らかで、しかも周辺の河川が統合された可能性がある。また東除川でも流路が一本化された可能性が高く、その位置は近世まで変わっていない。こうした川の一本化と固定化は、7～8世紀代の川のあり方とは大きく異なる点である。相違点の核は堤防の構築であろう。古代平野川はこれの比較的早い例ではないかと思われるが、一般的には10世紀以後に多いのかもしれない。治水の技術は平安時代中期以後に飛躍的に発展・普及したと言えよう。氾濫を予防し、低地を本格的に開発するために、これは当然必要な技術であった。

しかしこれも一面では、水が一旦あふれると諸堤防にさえぎられて停滞しやすくなるという結果を生む。当地では南に段丘地帯がせまり、北には古代平野川の砂堆が堰堤のごとに延びているため、この点が特に著しかったと思われる。実際低地では中世を通じて粘土・砂による堆積のスピードが非常に早く、周辺の地盤は全体として急速に上昇している(当調査区5～10層に相当する)。悪水の排除が充分でなかったことがわかる。

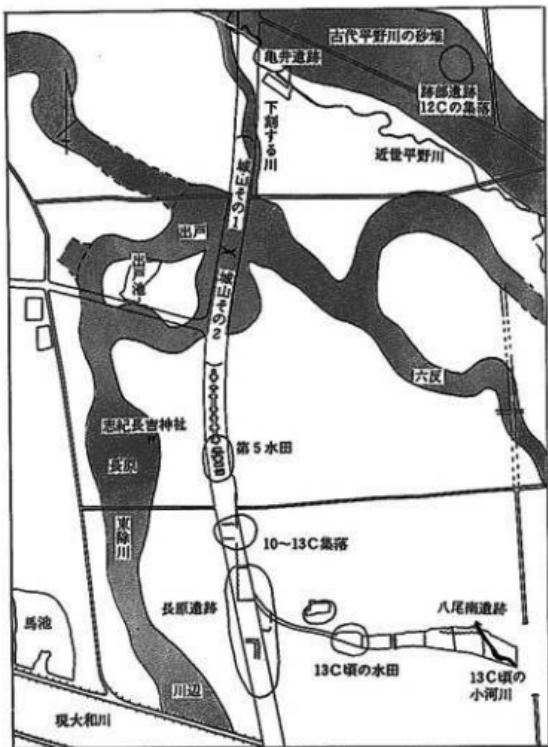
第5水田は集落の近くで比較的高い位置にある。低地では水路以外は検出されにくいが、水田は存在していたと思われる。ただし絶えず水没の危険にさらされていたと言える。

〔鎌倉時代以後〕

この時期の資料は少ないので不明点が多い。

城山(その2)では広範にあった水田が13世紀頃の厚い砂堆の下に埋まっていた。当調査区の第6水田はこの縁辺にあたる。砂堆の範囲は古い航空写真などによってもある程度復元できる(第52図)。東除川は河床のレベルを上げ続け、これに沿った堤防もしくは周辺の自然堤防が成長を続けていたことがわかる。

一方北接する龜井遺跡でも東除川の下流部とされる川が検出されている。ところがここでは川は著しく下刻しており、オーバーフローの範囲は狭い。現地剖をみても自然堤防の痕跡としては



(網部は地割に見える川・砂堆の痕跡)
第52図 平安時代以後の川と集落 S=1/20,000

非常にやせたものである。これは東除川ではあっても13世紀頃までの様相とは明らかに異なっている。東除川の新しい様相と考えられる。川が下刻するとは、言うまでもなく河床を下げることである。これには古代平野川の砂堆が障害となっていたはずだ。河床の低下にはこの障害の解消が伴わねばならない。すなわち、下刻する東除川とは砂堆を切って北方の低地へ水を流す言わばバイパスではなかったかと思われる。13世紀以後に新たに設置されたものであろう。時期の詳細は不明だが、このバイパスの設置によって砂堆の南方に滞留しがちの水も排除されたであろう。局所的に発生する悪水への、言わば対症療法の一つとも言える。なお近世の排水路としての平野川は、魚井から砂堆の内を西走し、平野環濠集落の手前（東）で北へ落ちている。

その後の1704年の大和川付け替えは、大和川の水の大部分をなす余剰水を堺へ流し、河内平野全体の悪水発生を予防しようとしたものである。この完成に伴って東除川は、大和川以北で埋め

たてられるに至った。周辺一帯ではここに初めて過不足ない水の供給を受ける基盤ができたと言える。

註：

- (1) 京嶋 覚氏の御教示による。
- (2) (財) 大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』1982年(改訂版)
- (3) (財) 大阪文化財センター『長原』昭和53年(1978)
- (4) (財) 大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』1983年
- (5) (財) 大阪文化財センター『佐堂(その2)-I』昭和59年(1984)

久宝寺北遺跡については寺川史郎氏の御好意で図面を参照させていただいた。近く『久宝寺北(その1)』として刊行される。
- (6) (財) 大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』1982年
- (7) (財) 八尾市文化財調査研究会『木の本遺跡—八尾空港整備事業に伴う発掘調査一』1984年
- (8) 註(5)と同じ
- (9) 八尾南遺跡調査会『八尾南遺跡』1981年
- (10) 註(7)文献
- (11) 木原克司・田中清美・京嶋 覚・趙 哲済各氏には特に御世話になった。
なお地形図の等高線は、水田の位置を知るためのあくまで概略的なものであることをお断りしておきたい。
- (12) 註6 文献
- (13) 田中清美氏の御教示による。
- (14) このすぐ北方の津堂遺跡には布留期の大きな川がある。(府教委82年度の調査)
- (15) (財) 大阪文化財センター『城山(その2)』昭和61年(1986)
- (16) 第51図の等高線は、当調査区の第2水田面及びこれに相当すると判断した面のレベルに基づいている。大文協の第6B層上面もしくは第7A層上面にある。
- (17) 木原克司『長原遺跡の水田址をめぐる諸問題』(註6文献1982年)
広瀬和雄「古代の開発」(『考古学研究』第30巻第二号 1983年)
- (18) 木原克司氏の御教示による。8世紀代には既にあり、更にさかのばる可能性もあるとのことである。
- (19) 註3 文献
- (20) 註4、註6 文献にも同様な報告例がある。
- (21) 註3、註6 文献参照。なお城山(その2)調査区の南端で低地の川が検出されているが、ここでも肩部には大畦畔程度のものしかない。
- (22) (財) 大阪文化財センター『龜井』昭和58年(1983)

- (23) (財) 大阪文化財センター「龜井・城山」昭和55年(1980)
- (24) (財) 大阪文化財センター「特殊マンホールNo.3建設工事に伴う城山遺跡の発掘調査」
(註23)文献所収)。
- (25) 木原克司氏の御教示による。
- (26) 府教委78-7区(府教委「国府遺跡発掘調査概要Ⅸ」1979年)
この砂層は周辺でかなり広範に分布している(府教委「国府遺跡発掘調査概要Ⅹ」1980年
第4章まとめ)
- (27) 註7文献
- (28) 田中清美氏の御教示による。
- (29) 「跡部遺跡の調査」(八尾市教委「八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書」1985年)
- (30) 註5)文献
- (31) 註19)文献
- (32) 註20)文献

第Ⅶ章 城山遺跡の泥土の花粉分析

安田 喜憲

I 花粉分析の方法

花粉分析の方法は、KOH処理(10%水酸化カリウム溶液にて10分間湯せん)一水洗一比重分離(70%塩化亜鉛溶液、比重2.1-2.3使用)一水洗一酢酸処理一アセトトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液にて2分30秒湯せん)一酢酸処理一水洗一マウント一検鏡の一順に行った。

II 花粉分析の結果

II-1. Jトレント331地区北壁分析結果

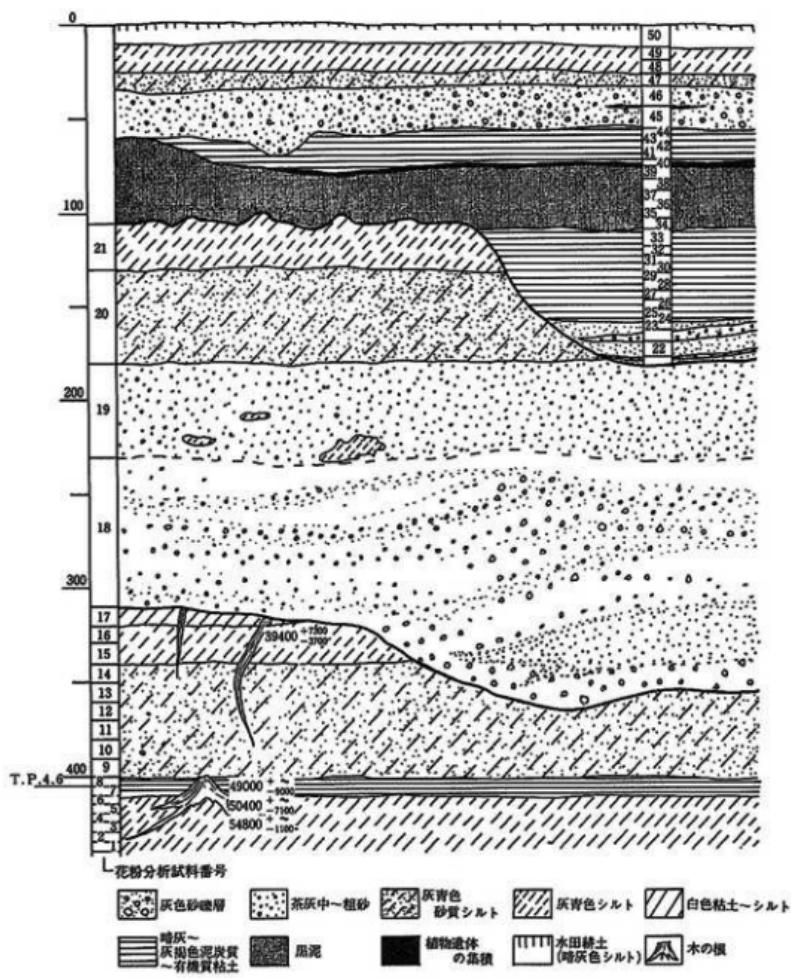
331地区北壁の層序は第53図に示す如くである。壁面から採取した試料30点について分析を実施した。分析の結果は第56図と第9表に示す如くである。第56図の花粉ダイアグラムは、樹木花粉を基準とするパーセントで表示してある。

トレント下部、試料No.4~14は、ハンノキ属とコウヤマキ属の高い出現率で特色づけられる。これにトウヒ属、モミ属、ツガ属、五葉マツ属などの針葉樹と、コナラ亜属、オニグルミ属、ハシバミ属などの落葉広葉樹の花粉が高い出現率を示し、現在より冷涼かつ湿潤な気候の下に形成された堆積物である。

これまでの大坂湾沿岸の堆積物の花粉分析の結果(前田1984、古谷1984)から、ハンノキ属は氷期の堆積物において高い出現率を示すことが報告されている。¹⁴C年代測定結果から、331区北壁の下部は最終氷期後半の亜間氷期の堆積物に比定されよう。さらに、前田(1984)の六甲アイランドの花粉分析結果では、3万年以降の氷期の堆積物からは、ハンノキ属やコウヤマキ属の出現率が低率であることを報告している。また、広島県尾道市尾道造船所の花粉分析結果(安田1984)でも、およそ3万年より以前の堆積物ではハンノキ属が高い出現率を示すが、約3万年前以降、これらが減少することがあきらかとなっている。こうした瀬戸内海沿岸の分析結果から、この331地区北壁のコウヤマキ属、ハンノキ属が高い出現率を示す層準は、最終氷期の3万年以前の堆積物に比定される。

こうした3万年以前の氷期の堆積物の上にのる青灰色砂礫層、シルト層中からは、有意な花粉分析の結果を得ることができなかった。層厚2.5m前後に及ぶこの堆積物の年代は、最終氷期後半~後氷期初頭のものと推定されるが、明白な決め手を欠く。

試料No.22は地山を不整合に切る縄文時代晩期以降の堆積物である。試料No.24~28(縄文時代晩期~弥生時代前期?)では、アカガシ亜属とともにコナラ亜属が高い出現率を示す。こうしたコナラ亜属の高い出現率は、この時代の冷涼気候を示している可能性が大きい。



第53図 城山遺跡Jトレンチ・331地区北壁模式層序

一方その上位に堆積する黒泥（黑色粘土層）は、アカガシ亞属の高い出現率で特色づけられる。それとともにイネ属型の花粉が試料No.34以降出現する。イネ属型の花粉は、ミズアオイ属、オモダカ属、キカシグサ属などの水田雑草を含む草本類の増加をともなっており、この時代以降、

水田稻作が始まったことを示している。

二葉マツ亜属の花粉は中世の堆積物までは著しく増加せず、アカガシ亜属を中心とする照葉樹林が、中世までは残存していたことがわかる。最上部の試料 No.50 の近世の堆積物に入って、ようやく二葉マツ亜属は30%以上に達し、森林破壊の影響が顕著になる。

II-2. I トレンチ 303 地区東壁分析結果

I トレンチ 303 地区東壁の層序は第57図に示す如くである。壁面から採取した試料30点について分析を実施した。花粉分析の結果は第57図と第10表に示す如くである。

花粉ダイアグラムの下部、試料 No.36~42 では、ハンノキ属が著しく高い出現率を示す。またコウヤマキ属、トウヒ属、モミ属、ツガ属などの針葉樹と、コナラ亜属、ハシバミ属などの落葉広葉樹も比較的高い出現率を示す。331 地区北壁の下部の堆積物と同じく、最終氷期の 3 万年以前の堆積物とみられる。

この最終氷期の堆積物を不整合におおって、縄文時代中期以前の河道堆積物が堆積し、その上位には縄文時代後期以降の堆積物が、層厚 1.5m 前後にわたって堆積する。縄文時代晩期に相当する試料 No.9 では、アカガシ亜属とともにコナラ亜属が高い出現率を示し、331 地区北壁と類似した傾向を示している。しかしその上位に堆積する青灰色シルト層に入ると、アカガシ亜属が80%以上の高い出現率を示す。ただこのシルト層は花粉の保存が悪く、かわって羊齒類胞子が高い出現率を示す。この時代は弥生時代に相当する。

イネ属型花粉が出現するのは 5 世紀後半以降の試料 No.23 に入ってからである。イネ属型とともにミズアオイ属、オモダカ属、キカシグサ属などの水田雜草も増加する。さらに 7~8 世紀の水田耕土（試料 No. 25~27）でもアカガシ亜属の出現率はいぜんとして 50% 以上の高率を保持し、森林破壊の影響が顕著に花粉ダイアグラムにはあらわれてこない。

II-3 I トレンチ 292 地区東壁分析結果

I トレンチ 292 地区東壁の層序は第58図に示す如くである。壁面から採取した試料引点について分析を実施した。花粉分析の結果は第58図と第11表に示す。試料 No.21 より上位のシルト質粘土～細砂層については花粉の含有量が極めて少なく、有意な結果を得ることはできなかった。

292 地区の堆積物は、いずれも地山より下位の堆積物である。花粉ダイアグラムはハンノキ属の高い出現率で特徴づけられ、やはり 3 万年以前の堆積物とみられる。ここで注意されるのは、花粉ダイアグラムの下部から上部にかけて、中間温帯的な森林相から冷温帯的な森林相へ変化がみとめられ、気候の寒冷化傾向がうかがわれることである。花粉ダイアグラムの最下部（試料 No. 1）ではアカガシ亜属、シノキ属、グミ属、ネズミモチ属などの暖温帯要素の花粉が比較的高い出現率を示す。それが花粉ダイアグラムの中部（試料 No. 3~13）に入ると減少し、かわってカエデ属、トネリコ属などの移行期の植生が増加していく。そうして花粉ダイアグラムの上部（試料 No. 15~19）に入ると、トウヒ属、モミ属、五葉マツ亜属それにコウヤマキ属などの針葉樹の花粉が増加していく。こうした花粉フローラの変遷は、下位から上位に向って気候の寒冷化を物

語るのであろう。

II-4 Aトレーナー140地区東壁分析結果

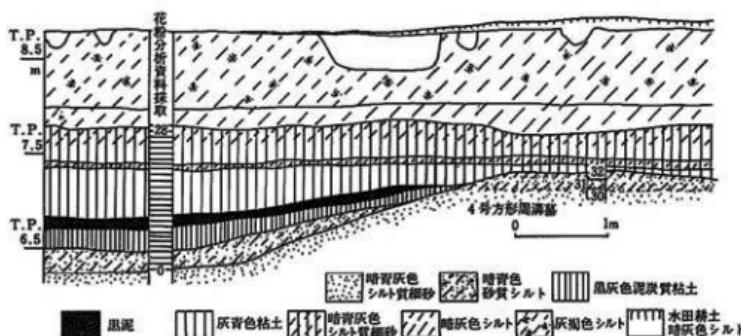
Aトレーナー140地区東壁の層序は第54図に示す如くである。3号方形周溝墓と4号方形周溝墓の共有する周溝部に堆積した有機質粘土層である。壁面から採取した試料21点について分析を実施した。花粉分析の結果は第59図(下)と第13表に示した。周溝部に堆積した有機質粘土シルトであるにもかかわらず、花粉の保存状態がきわめて悪い。KOH処理においては、上ズミ液が黒色に変色し、有機物含有量の多いことを示しているにもかかわらず、花粉の保存状態がきわめて悪い。大半が羊齒類胞子で占められている。それは関東の火山灰層を分析した時とよく似ている。堆積物を注意深く観察すると、無数の直径200~500ミクロン前後の小さな空隙がみられる。その周囲に酸化鉄の沈着が認められるものもある。何らかの原因で酸化状態におかれたことが、花粉の保存が悪い原因ではないかとみられる。

花粉が良好に保存されているのは、試料No.22より上位の、室町期以降の堆積物である。アカガシ亞属が最も高い出現率を保持しているものの、二葉マツ亞属が20%以上の高い出現率を示し、森林破壊の影響を物語っている。しかし、その出現率はアカガシ亞属の出現率をうわまわることはない。いぜんとして照葉樹林の優占する環境がつづいていたことを示している。

II-5 Iトレーナー290地区東壁分析結果

Iトレーナー290地区東壁の層序は第59図(上)に示す如くである。壁面から採取した試料16点について分析を実施した。分析結果は第59図(上)と第13表に示した。Aトレーナー140地区東壁の分析結果(第59図下)と同じく、上部の堆積物を除いて花粉の保存状態がきわめて悪い。

有意な結果が得られたのは7~8世紀の水田耕土より上位の堆積物である。7世紀末頃においては、二葉マツ亞属の出現率は10%以下にとどまっており、アカガシ亞属50%以上の高率を示し



第54図 城山遺跡Aトレーナー140地区東壁セクション

ている。古代河内平野の城山遺跡からそう遠くないところに照葉樹林が残存していたといえる。

III 考 察

III-1 最終氷期の古環境

331地区北壁（第56図）と303地区（第57図）の下部と292地区（第58図）は最終氷期の堆積物とみられた。ハンノキ属、コウヤマキ属などの高い出現率と、¹⁴C年代測定値から3万年以前の堆積物と判断された。当時の植生は、低地にはハンノキ属、トネリコ層の湿地林が広がり、湿地にはミツガシワ属なども生育していた。山地、丘陵部にはトウヒ属、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、マツ属などの針葉樹と、コナラ属、ケヤキ属、カエデ属、ハシバミ属、オニグルミ属などの落葉広葉樹が生育していた。また、この時代の下部ではアカガシ属、シイノキ属、グミ属、ハイノキ属などの暖温帯要素も低率ながらみとめられ、上部に向ってこれらの暖温帯要素が減少し、かわってトウヒ属、モミ属ツガ属などの針葉樹が増加する寒冷化の傾向がうかがわれる。

当時の城山遺跡周辺は、現在の中間温帯上部から冷温帯にかけての植生であったと考えられ、今回得られた花粉分析の結果は、氷期の中でも相対的に温暖な亜間氷期に対応するものとみられる。これに対し、瀬戸内海沿岸のこれまでの花粉分析（前田1984、安田1984）では、最終氷期の寒冷期に相当する亜氷期には、ハンノキ属の花粉やスギ属、コウヤマキ属の出現率が著しく低率になることが明らかになっている。それは気候の寒冷化とともに乾燥化が進行したためである。これに対し、およそ3万年以前の亜間氷期の堆積物では、ハンノキ属、コウヤマキ属、スギ属などが高い出現率を示し、土壤水分にめぐまれた湿润な環境を物語っている。後氷期の瀬戸内海沿岸の分析結果では、ハンノキ属の出現率は著しく低い。このことから、今回城山遺跡で得られたおよそ3万年以前の亜間氷期の時代の土壤水分条件は、現在よりも高く、かつ現在より湿润な気候であったと考えられる。

III-2 弥生時代の古環境

城山遺跡Aトレント140地区東壁の試料は3号方形周溝墓と4号方形周溝墓との間の共有する周溝部から採取した（第54図）。しかし、方形周溝墓の上面や周溝部の堆積物からは、羊歯類胞子、鮮苔類胞子、ヨモギ属、イネ科が多産するだけで（第12表）、樹木花粉の出現率は著しく低率であった。弥生時代中期の方形周溝墓や住居址の堆積物が、羊歯類胞子、ヨモギ属などを多産する傾向は、これまでの瓜生堂遺跡の分析結果（安田1981）などと同じである。比較の意味で、第60図と第61図に瓜生堂遺跡ポンプ場第2号方形周溝墓の周溝部の層序と花粉ダイアグラムを示した。周溝部には瓜生堂遺跡でも城山遺跡でも黒泥が堆積する。瓜生堂遺跡でも弥生時代中期の方形周溝墓直上の泥土は、羊歯類胞子やヨモギ属が多産する。城山遺跡から瓜生堂遺跡まで、集落や墓地周辺には、弥生時代中期には、こうした草原が広がっていた可能性が大きい。しかし、瓜生堂遺跡では弥生時代中期の集落が放棄されるとともに、周辺は、イチイガシを中心とする森林の多い環境となる。ところが城山遺跡では、いぜんとして樹木花粉の出現率は低い（第59図下）。こう

した樹木花粉の出現率が著しく低い傾向は、Iトレンチの290地区（第59図上）や303地区的試料No.17・18・19にみとめられる。こうした羊齒類胞子やヨモギ属が多産する傾向を、そのまま當時は草原が広がっていたとみてよいかどうかには、疑問がある。とくにKOH処理の段階で上ずみ液が黒色に変色するにもかかわらず、花粉の含有率が低いこと。堆積物に無数の空隙がみとめられること。羊齒類胞子やヨモギ属など特定のタクサのみが多産すること。花粉の多くが分解過程にあることなどから判断して、何らかの特異な堆積環境により、花粉の保存の状態が悪いとみなすことも必要である。経験的に城山遺跡の樹木花粉の少ない花粉フローラは関東の火山灰層を分析したときや、自然堤防堆積物を分析したときのものと類似している。現時点では明白な結論を出せないが、河内平野の弥生時代中期前後の特異な環境を考えるうえで、みのがせない事実である。

III-3 水田址の問題

城山遺跡Aトレンチ140地区東壁（第58図下）の、弥生時代中期の堆積物からは、イネ属型花粉がわずかながら検出されている。しかし、それ以外の分析結果では、イネ属型花粉が多産するようになるのは、弥生時代後期の堆積物に入ってから一例えば、Jトレンチ331地区北壁（第55図）では、弥生時代後期以降に比定される黒泥層よりイネ属型花粉が増加していく一である。こうした傾向は、やはり方形周溝墓の密集地帯であった瓜生堂遺跡の分析結果でも同じであった。このことは、墓域と水田址とは、すでに明白に立地を異にし、大量に花粉が飛散しない位置に当時の水田址があったことが推定される。弥生時代後期以降増加するイネ属型花粉は、ミズアオイ属、オモダカ属、キカシグサ属などの水田雜草をともなっており、この時代以降周辺が墓域から水田の多い環境に変化はじめたことを示している。

Iトレンチ303地区の7～8世紀の水田址の分析結果（第56図の試料No.25～27）では、イネ属型花粉は30%以上の高率を示し、かつミズアオイ属、オモダカ属、キカシグサ属などの水田雜草をともなっており、水田址であることはまちがいない。

III-4 古墳時代の寒冷期（？）について

Jトレンチ・331地区北壁（第53図）や、Iトレンチ290地区東壁・Aトレンチ140地区東壁（第59図上・下）にみられるように、城山遺跡では5～6世紀に比定される特徴的な黒泥層が広く検出された。

その黒泥層は、中河内平野の瓜生堂遺跡や山賀遺跡などで検出された弥生時代中期末～後期の黒泥層と類似している。安田（1984）は、瓜生堂遺跡などの黒泥の堆積した弥生時代中期末～後期は、気候悪化期に対応していることを指摘した。

城山遺跡の花粉分析の結果からは、古墳時代の5～6世紀の黒泥層が堆積した時代が、気候悪化期に相当しているという結果は得られなかった。しかし、坂口（1984）は、尾瀬ヶ原の花粉分析の結果から、AD270年とAD510年頃を寒冷期のピークとする、3世紀頃から8世紀にかけての寒冷・多雨期の存在を報告している。

坂口は「古墳時代は過去7600年間でもっとも長くきびしい寒冷期」（坂口1984、31頁）と指摘し

ている。この説にしたがえば城山遺跡で広く検出された黒泥も、この古墳時代の寒冷気候下で形成された可能性が高いと言えよう。

こうした黒泥が氾濫原の後背湿地に起源していることは認めてよい。河内平野ではこれまでに黒泥が広く発達した時代は弥生時代中期～後期と、古墳時代の5～6世紀である。その時代はいずれも現在より寒冷な気候が支配的であった可能性が大である。

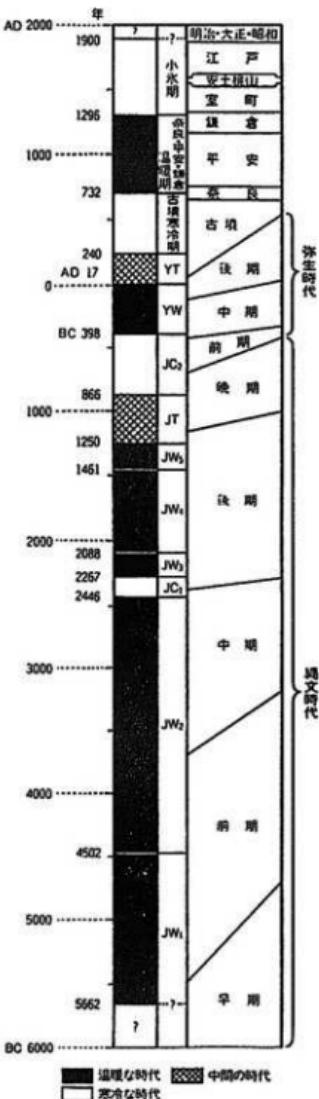
もちろん黒泥は気候変化を前提としなくとも、堆積の場の変化のみによって形成された可能性も否定できない。遺跡周辺が自然堤防の環境から、後背湿地的環境に変化しただけと捉えるか、それとも、その背景に気候の変化を想定するかは、議論のわかれ所であろう。

いまのところ、河内平野では特徴的な黒泥の発達する時代が、特定の時期に集中していることから、その背景に気候変化を想定することに、筆者はより同調的である。その際問題となるのは、気候変化と黒泥の発達の因果関係を明らかにすることである。この点については今後の課題として残されている。

III-5 歴史時代の古環境

I トレンチ303地区の7～8世紀の水田址の分析結果（第57図の試料No25～27）ではアカガシ亜属とシイノキ属が高い出現率を示し、二葉マツ亜属の出現率は低く、10%以下にとどまっている。このことは、古代においてはいまだ照葉樹林が広く残存し、二次林としてのアカマツ林は広く存在しなかったことを示す。これと同じ結果はI トレンチ290地区的分析結果（第59図上の試料No28～31）でも得られている。

一方、鎌倉～室町期に相当するA トレンチ140地区東壁（第59図下の試料No22～28）では、二葉マツ亜属の出現率は20%前後に達する。しかしアカガシ亜



第55図 尾瀬ヶ原の過去
7600年間の気候変化(阪口1984)

属の出現率はこれを上まわっている。森林破壊がかなり進行し、アカマツの二次林が拡大してきたものの、いまだ照葉樹林が優占していたことを示している。とくにマツ属の花粉生産量が多いことを考えると、中世における河内平野周辺の景観のなかで、アカマツ林の占める位置はそれほど大きくなかったとみられる。

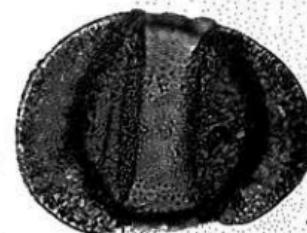
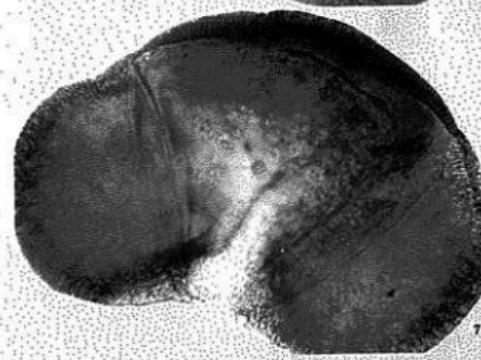
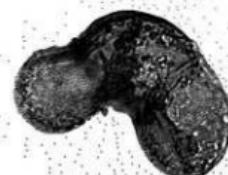
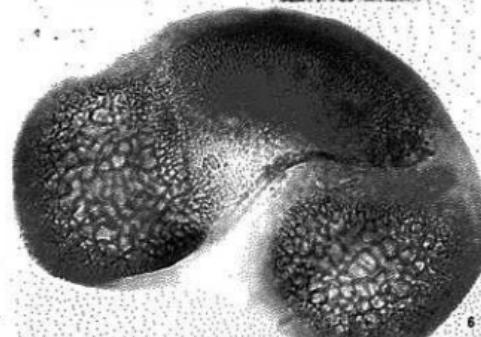
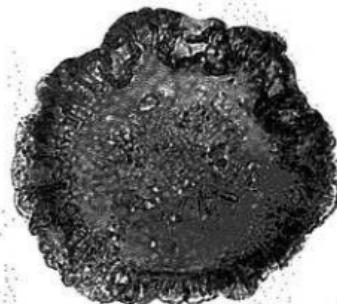
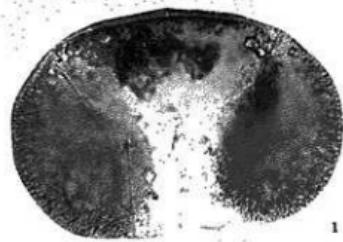
二葉マツ亜属がアカマツ亜属の出現率を上まわるようになるのは、近世の堆積物に入ってからである。I トレンチ 331 地区北壁の最上部（第56図の試料 No.50）において、はじめて二葉マツ亜属は30%以上に達する。このことは、近世に入って、ようやくアカマツ林の優占する景観が現出したことを示す。しかし、それでもアカガシ亜属はいぜんとして30%前後の出現率を保持している。今日のように二葉マツ亜属のみが著しく高い出現率を示す花粉フローラは、藤井寺市の西大井遺跡の分析結果（安田1983）では、近世中頃以降にあらわれる。このことから、おそらく、J トレンチ 331 地区北壁最上部（第56図の試料 No.50）の堆積物は近世前半の堆積物とみられる。

（広島大学総合科学部助手）

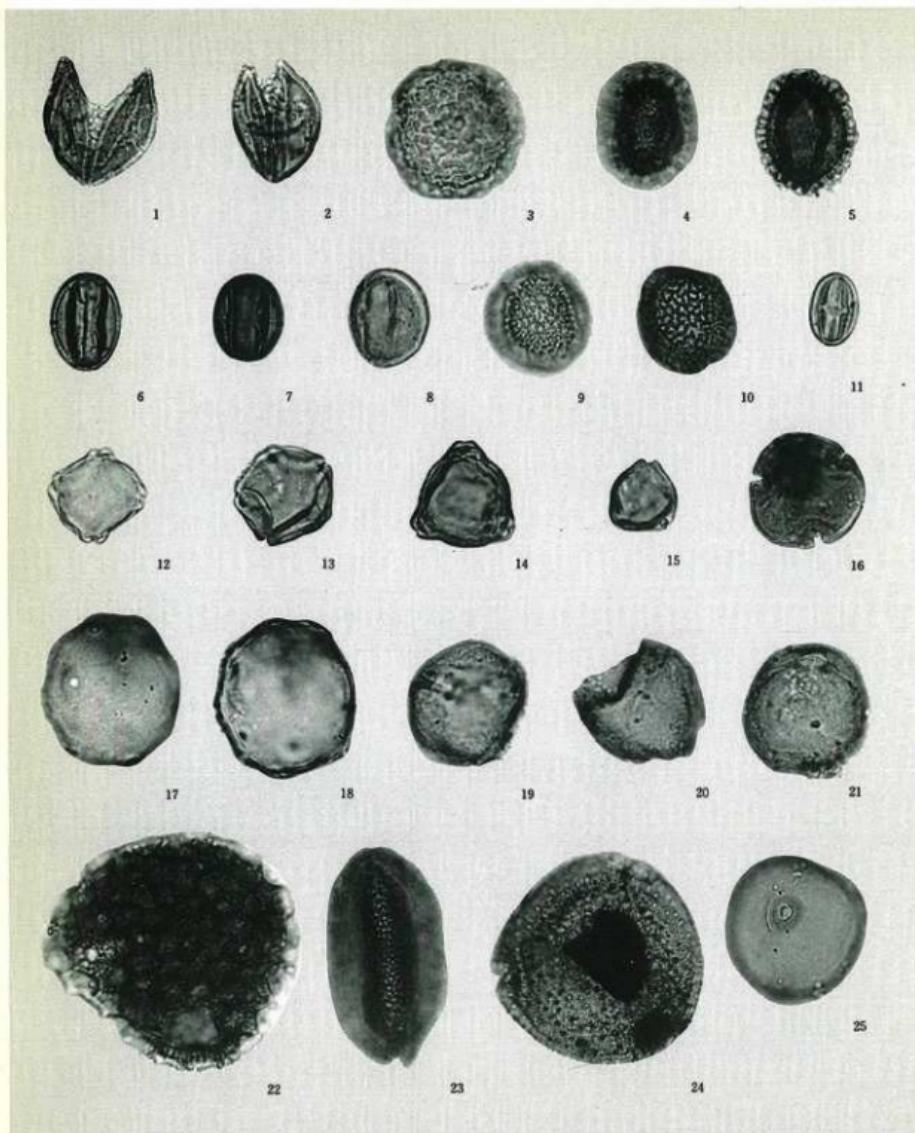
引用文献

- 古谷正和（1984）「花粉化石調査」中世古次郎編「関西国際空港地盤地質調査」灾害科学研究所
前田保夫（1984）「六甲アイランドの最終氷期相当層の花粉分析」『地球』72
阪口 豊（1984）「日本の先史・歴史時代の気候」『自然』5
安田喜憲（1981）「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析（Ⅲ）」瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡Ⅲ』
同（1983）「西大井遺跡の泥土の花粉分析」大阪府教育委員会「西大井遺跡第3次発掘調査
概要」
同（1984）「環日本海文化の変遷」『国立民族学博物館研究報告』9-4
同（1984）「統・倭国乱期の自然環境」「高地性集落と倭国大乱」雄山閣出版

花粉分析用の土壤サンプルの採取については、331 地区、303 地区、140 地区では安田氏が行ない、290 地区・292 地区のものは安田氏の指導のもとで藤永・阿部が行なった。その方法は、幅15 cm の柱状に 5 cm 間隔で連続的に採取するものであるが、粗砂層については 10 cm 間隔を 1 単位とした。



1. トウヒ属($\times 325$ 倍) 2. ツガ属($\times 750$ 倍) 3. マキ属($\times 750$ 倍) 4. 五葉マツ亜属($\times 750$ 倍) 5~7. モミ属
 $\times 750$ 倍)



1・2. スギ属 3. コウヤマキ属 4・5. モチノキ属 6～8. アカガシ亞属 9・10. ネズミモチ属
11. シイノキ属 12・13. ハンノキ属 14. カバノキ属 15. ハシバミ属 16. シナノキ属 17・18. オニグルミ属
19～21. イヌブナ型 22. サナエタデ節 23. ソバ属 24. スイカズラ属 25. イネ科
(×750倍)



1~6. ミズワラビ属

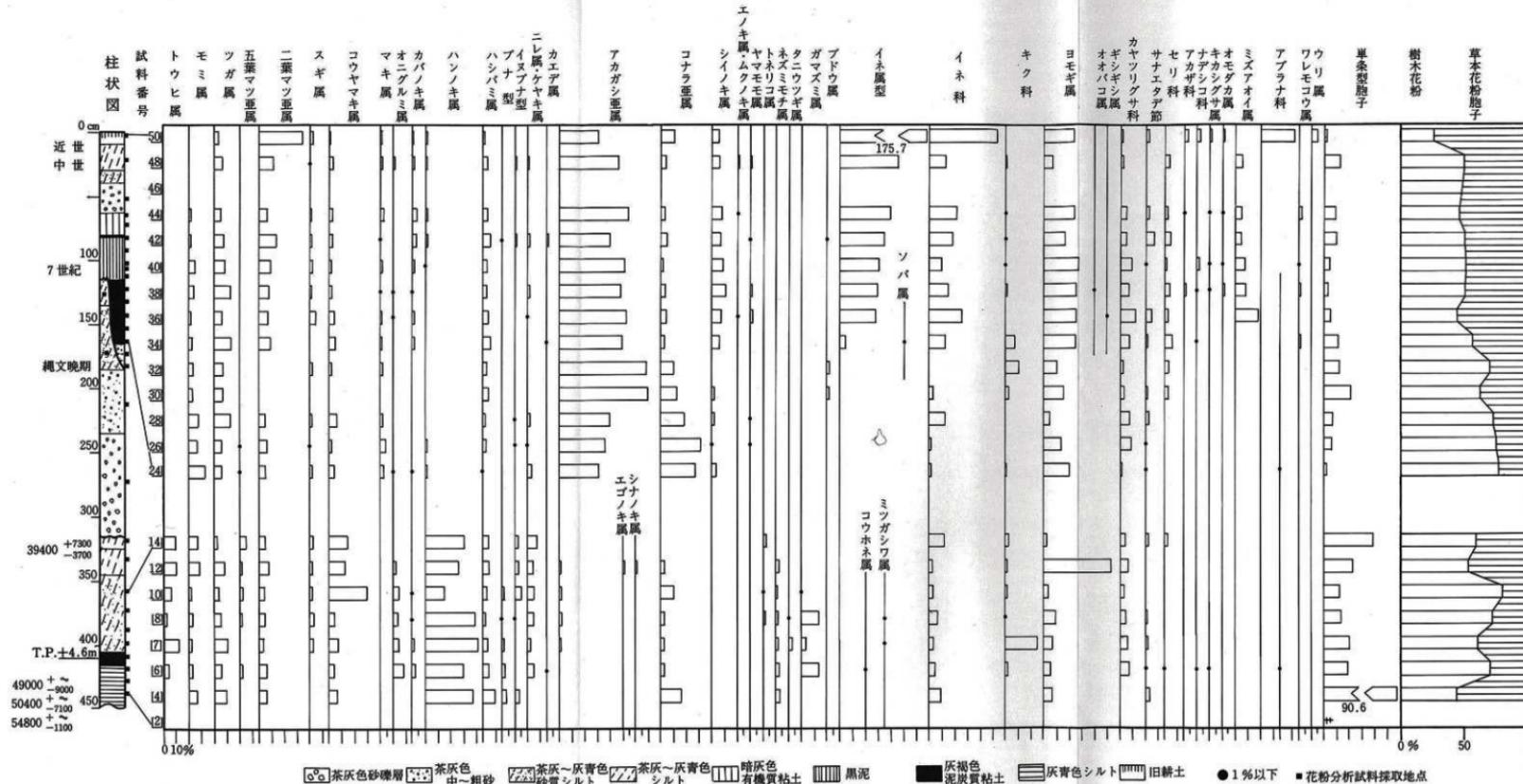
1・3・5. ハイフォーカス

2・4・6. ローフォーカス

(×750倍)

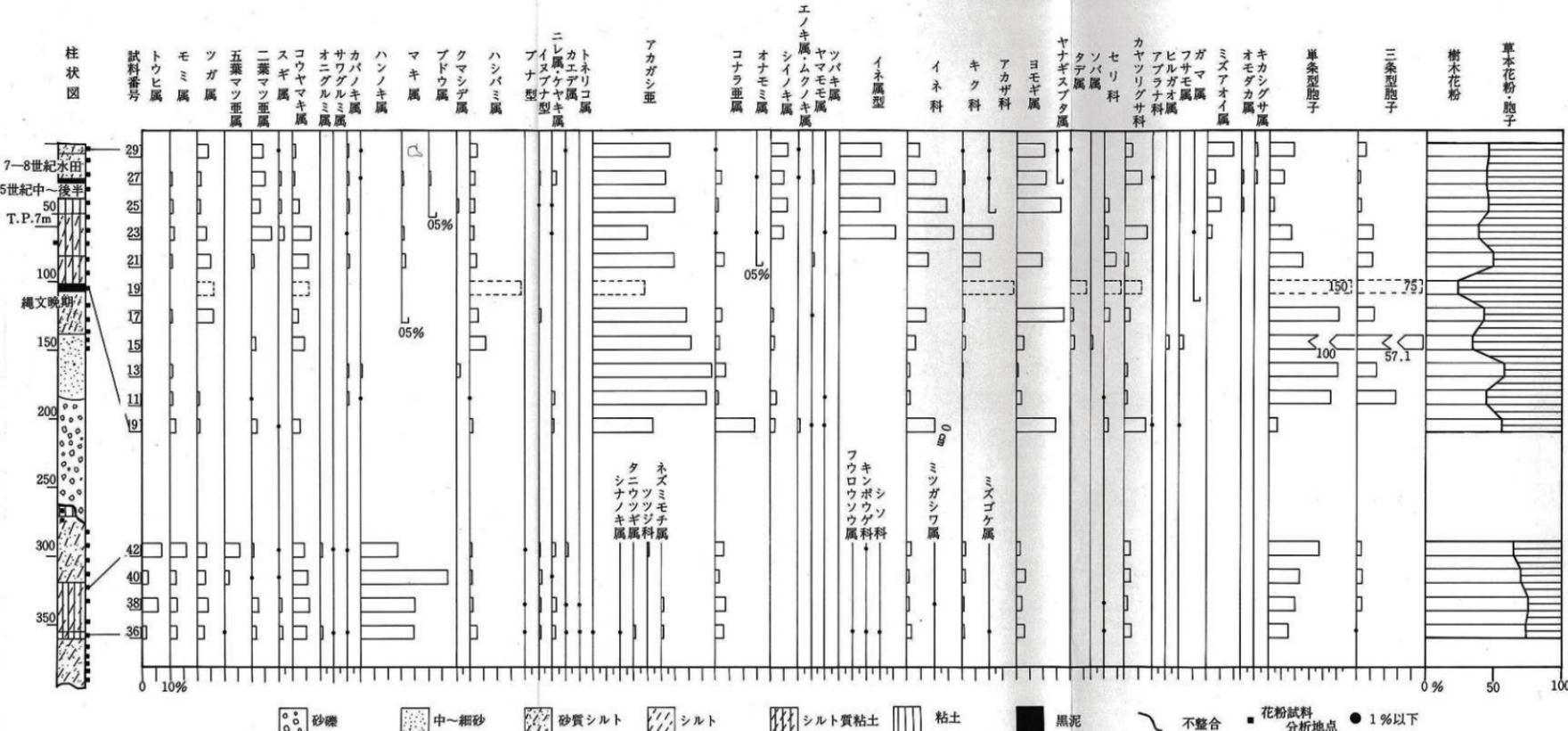
第9表 城山遺跡 Jトレント331地区北壁花粉・孢子出現率表

試料No.	2	4	6	7	8	10	12	14	16.	17.	18.	19.	20.	21.	22.	23	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46	48	50															
Picea (1の木)	2	6.3	9.4	4.1	11.3	8	3.1	15	6.4	11	10.5	4	9.5																1	0.6															
Aibus (ミズク)	2	6.3	6.7	2.7	2.1	9	3.5	6	2.5	9	8.6	3	7.1																																
Tsuga (ツガ属)	3	9.4	13	5.9	10	10.3	13	5.1	9	3.8	8	7.6	1	2.4																															
Pinus (マツ属)	3	1.4							5	1.9	5	2.1	2	1.9	2	4.8																													
Pinus (Diplophyllum) (二葉マツ属)	2	6.3	14	6.3	3	3.1	12	4.7	11	4.7	8	7.6	2	4.8																															
Cryptomeria (ヒノキ属)									2	2.1	8	3.1	4	1.7	2	1.9	1	2.4																											
Laurus nobilis (ガジュマル属)	1	3.1	5	2.3					2	2.7	5	2.7		1	1.0																														
Schindelia (コマツヤ属)	2	6.3	8	2.6	7	7.2	10	3.9	60	29.2	13	12.4	6	14.3																															
Podocarpus (モクヤ属)																																													
Salix (ヤナギ属)	'	0.5																																											
Juglans (オニグルミ属)	18	8.1	4	4.1	8	3.1	10	4.2	2	1.9																																			
Betula (カエデ属)	3	1.4	1	1.0	2	6.8	2	0.8																																					
Alnus (アシナガカエデ属)	12	37.5	66	29.0	40	41.2	100	36.2	34	14.4	28	26.7	13	31.6																															
Coronopus (コロナガ属)									0.5																																				
Corylus (カシワ属)	3	9.4	16	4.5	3	3.1	3	1.2	8	4.4	5	4.8	2	4.8																															
Fagus cretica type (チバナ属)	1	3.1	5	2.3	1	1.0	2	0.8	3	1.3																																			
F. latifolia type (イタマタ属)	1	3.1							2	0.8	11	4.7	3	2.9	1	2.4																													
Ulmus (レバノンウルム属)	1	0.5																																											
Zelkova (ヤマザクラ属)	9	4.1	2	2.1	7	2.7	9	3.8	3	2.9	3	7.1																																	
Acer (カエデ属)	2	0.9																																											
Rhus (クマザサ属)																																													
Aralia (ウラジロ属)		1	0.5																																										
Quercus (クセローブル) (アカガシ属)			1	1.0	3	1.2	3	1.2	1	1.0																																			
Q. (Lepidophloeum) (コナラ属)	5	15.6	6	2.7	2	2.1	8	3.1	24	10.2	3	2.9																																	
Catastoma (シイタケ属)		1	0.5																																										
Castanea (カシワ属)		1	0.5																																										
Celtis+Aphelinus (エノキ属+ナムクノ属)																																													
Myrce (ミズモチモキ)																																													
Fraxinus (カシスリ属)	1	0.5							3	1.2	2	0.8																																	
Ligustrum (ホソミモチ属)	6	2.7	2	2.1	3	1.2	3	1.3	1	1.0	1	2.4																																	
Weigela (テラウツキ属)	1	0.5	2	2.1	1	0.4																																							
Viburnum (マツモト属)	31	14.0	3	3.1	35	13.6	2	0.8																																					
Ericaceae (ツツジ属)							2	0.8																																					
Hedera (ヘビイヌクサ属)									1	0.4																																			
Vitis (ブドウ属)									1	0.4																																			
Tilia (シナノイチイ属)										1	1.0																																		
Styrax (エゴノキ属)											1	1.0																																	
Rosaceae (バラ科)											1	1.0		1	1.0	1	2.4																												
Fragaria (サンショウ属)											1	0.4		1	1.0	1	2.4																												
Total AP+NAP (総花粉合計)	32	221	97	257	236	105	42											273	154	169	69	57	151	155	159	167	153	129	145	185	183														
Ostrya spp. (カシカ属)																																													
Gramineae (イネ科)	2	9.4	16	4.5	3	3.1	17	6.6	7	3.0	3	2.9	5	11.9																															
Compositae (キク科)	1	4	1.8	24	24.7	3	4.0	3	1	1.0	1	2.4						6	2.2	2	1	3.1	21	12.4	2	2.9																			
Artemisia (セリ属)	2	6.3	12	5.4	6	6.2	24	9.3	9	3.8	56	53.3	1	2.4				3	1.1	3	0.6	1	0.6	2	2.9	6	10.5	10	6.0	2	1.1	1	0.7	1	0.8										
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	18	8.1	7	7.2	14	5.4	8	3.4	7	6.7	2	4.8						4	1.5	4	9.1	8	4.7	11	3.9	13.6	27	25.8	40	34.5	47	25.8	21	28.1	26	17.0	31	24.0							
Pterisaria (サザンカ属)	1	3.1	2	0.9	2	2.1	3	1.2										1	0.4	1	0.6	5	3.0	1	1.4																				
Umbelliferae (ウツボグサ科)	1	0.5							1	0.4																																			
Cyperoideae (カヤツリグサ科)	1	0.5																																											
Rotala (ホシクサ属)	1	0.5																																											
Sagittaria (オオダマスイ属)		1	0.5																																										
Monochoria (ミズモチ属)			1	0.5																																									
Crociherba (アラナカ属)				1	0.4																																								
Plantago (ハコベ属)					1	0.4																																							
Rhus (ミズモチ属)						1	0.4																																						
Myrsinaceae (ミズモチ属)							1	0.5																																					
Nyphaea (コホネ属)	1	0.5																																											
Mesnyathes (ミツバチソウ属)								1	0.5																																				
Ranunculaceae (キンポウゲ科)	1	0.5																1	0.4																										
Lycopodium (クモクサ属)									1	0.4									1	0.6																									
Lycopodiella (クモクサ属)										1	0.4									1	0.6																								
Liliaceae (ユリ科)											1	0.4																																	
Cucurbitaceae (カボチャ科)	6	18.8	61	23.1	43	44.3	63	24.5	27	11.4	67	63.8	11	26.2				71	26.0	39	35.3	51	30.2	21	30.4	15	26.3	101	66.9	183	118.1	175	96.2	154	12.7	130	4	295.4	295.6	295.8					
Ashborneria (ゼニケ属)																		3	1.1	1	0.6																								
Molinia speciosa (ミズモチ属)	29	90.6	40	18.1	20	2.6	34	13.2	29	12.3	24	22.9	16	38.1				6</																											



第56図 城山遺跡Jトレンチ 331 地区北壁 花粉ダイアグラム

第10表 城山遺跡 トレンチ303地区 花粉・胞子出現率表

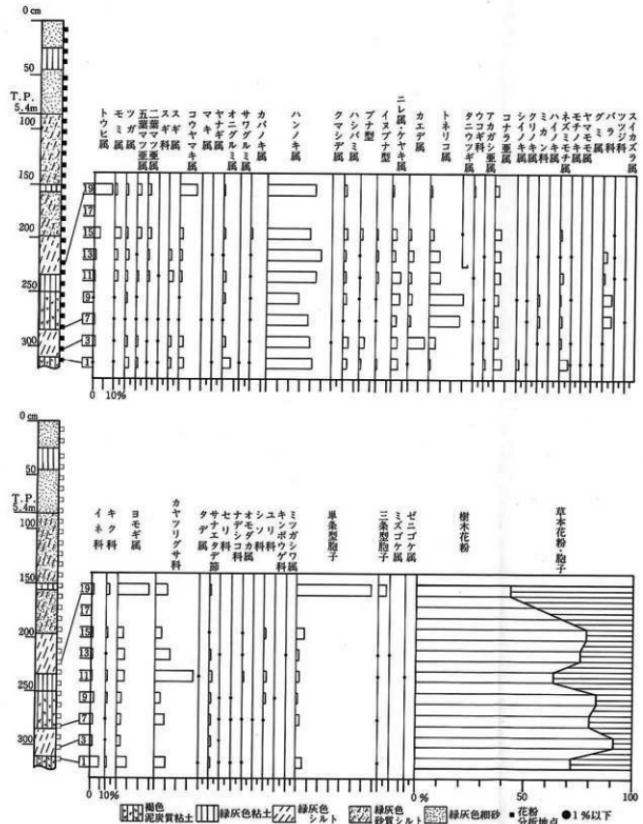


第57図 城山遺跡1トレンチ303地区東壁 花粉ダイアグラム

第11表 城山遺跡 I トレンチ 292区花粉・胞子出現率表

(回 %)

科・属・種	MVN%	1	3	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25-26
Pites (トウヒ属)	2 0.8	7 1.9	6 1.6	1 0.3	5 1.4	16 3.0	17 6.9			11 16.9			
Alees (モミ属)	2 0.8	1 0.3	2 0.5	1 0.3	10 2.8	13 2.1	14 5.6			1 1.5			
Trogs (ツガ属)	8 3.2	4 1.1	3 0.8	4 1.2	4 1.1	12 2.3	5 2.0			1 1.5			
Pisum (豆属)	3 1.2	5 1.4	3 0.8	3 0.9	4 1.1	5 0.9	10 4.3			2 3.1			
P. (Diplopanes) (五葉マメ属)	2 0.8	2 0.6	2 0.5		4 1.1	6 1.1	7 2.8			2 3.1			
Taudiaeae (ヌリ属)	2 0.8	1 0.3	1 0.3			2 0.8							
Cryptomeria (スギ属)	6 2.4	5 1.4	3 0.8		14 3.9	10 1.9	1 0.4						
Sciadopitys (コヤマキ属)	10 4.0	11 3.0	2 0.5	2 0.6	6 1.7	13 2.5	6 2.4			10 15.4			
Podocarpus (マツ属)				1 0.3									
* Salix (ヤナギ属)	1 0.4		2 0.5				1 0.2						
Juglans (シナガヤ属)	18 7.1	6 1.7	2 0.5	5 1.5	7 1.9	4 0.8	3 1.2			1 1.5			
Prunus (サクラ属)	1 0.4												
Betula (カバノキ属)	1 0.4	3 0.8	1 0.3	1 0.3	2 0.6	3 0.6	2 1.2						
Alnus (アシナガカ属)	106 43.1	147 40.7	140 38.5	97 35.0	166 45.7	98 26.7	50.4 40.3			29 44.6			2
Corylus (カバノキ属)		1 0.3											1
Corylus (カバノキ属)	10 4.0	30 5.5	3 0.8	9 2.6	8 2.2	12 2.3	9 3.6			2 3.1			
Fagus cretica type (ブナ属)	4 1.6	17 4.7	3 0.8	1 0.3	3 0.8	3 0.6	6 3.2						
F. isensis type (イヌクサ属)	4 1.6		1 0.3	3 0.8	9 2.5	13 3.5	3 1.2						
Ulmus (ユレカ属)	6 2.4	11 3.0	5 1.4	1 0.3	6 1.7	3 0.2							
Zelkova (ヤケヤナギ属)	8 3.2	9 2.5	13 3.5	3 0.8	23 7.1	24 6.6	18 3.4	10 4.0		1 1.5			
Acer (カエデ属)	2 0.8	59 16.3	10 2.7	14 4.3	12 3.3	25 4.7	8 3.2						
Fraxinus (トリノキ属)	4 1.6	23 6.4	102 30.0	104 32.2	34 9.4	46 8.7	10 4.0			1 1.5			
Araliaceae (ワタケ属)	1 0.4		1 0.3		1 0.3								1 1.5
Quercus (シロカシ属)	3 1.2	3 0.8	1 0.3	2 0.6		1 0.2							
Q. (Lepidobolana) (コラマツ属)	17 6.7	14 3.9	12 3.3	13 4.0	23 6.3	33 6.2	29 11.7			3 4.6			
Castanopsis (シラカシ属)	7 2.8		1 0.3										
Castanea (クリヤキ属)	2 0.8		2 0.5	1 0.3									
Rutaceae (クルミ科)		2 0.6	5 1.4	5 1.5		1 0.2							
Symplocos (シモツケ属)		1 0.2											
Ligustrum (カズミヤナギ属)	18 7.1	5 1.4	5 1.4	4 1.5	10 2.8	5 0.9	2 1.2						
Den (モノム属)	1 0.4	3 0.8		1 0.3		3 0.6							
Myrsin (ヤマモモ属)	1 0.4												
Elaeagnus (アガツム属)	1 0.4												
Ressouss (バウリ属)	1 0.4	1 0.3	31 8.5	27 8.4	6 1.7	20 3.8							
Moraceae (クワ科)			1 0.3										
Lomixia (スカラオガ属)		1 0.3		1 0.3									
Eriococcidae (ツブムシ科)				2 0.6	1 0.2	1 0.4							
Weigela (テラカゲ属)						1 0.4							
AP Total (樹木植物合計)	352	361	364	323	363	530	248			65			
Gramineae (イネ科)	23 9.1	10 2.8	11 3.0	13 4.0	5 1.4	10 1.9	6 2.4			2 3.1			
Compositae (キク科)	4 1.6	3 0.8	3 0.8	4 1.2	6 1.7	4 0.8	3 1.2			2 3.1			1
Aristolochia (ミモザ科)	24 9.5	13 3.6	14 3.2	17 5.0	39 7.4	15 6.0				19 39.2			
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	25 9.9		32 8.8	16 5.0	131 34.1	75 14.2	14 5.6			7 10.8			
Polygonum (タケノコグサ科)	1 0.4				1 0.3								
Persicaria (シナガヤ属)	3 1.2	7 1.9	7 1.9	5 1.1	11 3.0	9 1.7	1 0.4			1 1.5			
Urticaceae (ヒルガ科)	1 0.4	2 0.6	2 0.5	1 0.3	1 0.3	2 0.4	2 0.3						
Coryphellaceae (タケノコグサ科)	1 0.4		2 0.6	2 0.6									
Retsch (モクシノキ属)	1 0.4												
Septoria (モミジダケ属)	1 0.4		3 0.8		5 1.4	3 0.6	1 0.4						
Potamogeton (ヒルムシロ属)		1 0.3											
Labiatae (シソ科)		1 0.3											
Liliaceae (ユリ科)		2 0.5	4 1.2	10 2.8		4 1.6							
Ranunculaceae (キンポウゲ科)			1 0.3										
Menyanthes (ミヅバチク属)						1 0.2							
Monodelphis (毛虫型孢子)	15 6.0		10 2.7	5 1.5	10 2.8	15 2.8	19 7.7			45 69.2			1
Trilete spore (三角形孢子)	1 0.4		2 0.5		1 0.3	1 0.2	1 0.2			5 7.7			1
Sphagnum (ミズカケ属)						2 0.4							
Antherosphaera (セニゴノ属)						1 0.3							
NAP Total (裸花粉・胞子合計)	100 39.7	35 9.7	88 24.2	63 19.5	209 57.6	161 30.4	66 26.6			81 124.6			
AP+NAP	352	396	452	386	572	691	314			146			
Z/AP・Z/NAP	71.6/25.4	91.2/8.8	80.5/19.5	83.7/16.3	65.5/36.5	76.7/23.3	79.0/21.0			44.5/55.5			
Charcoal (炭灰)	38	10.5	15 4.1	10 3.1	36 9.5	50 9.4	134 50			98 130.8			



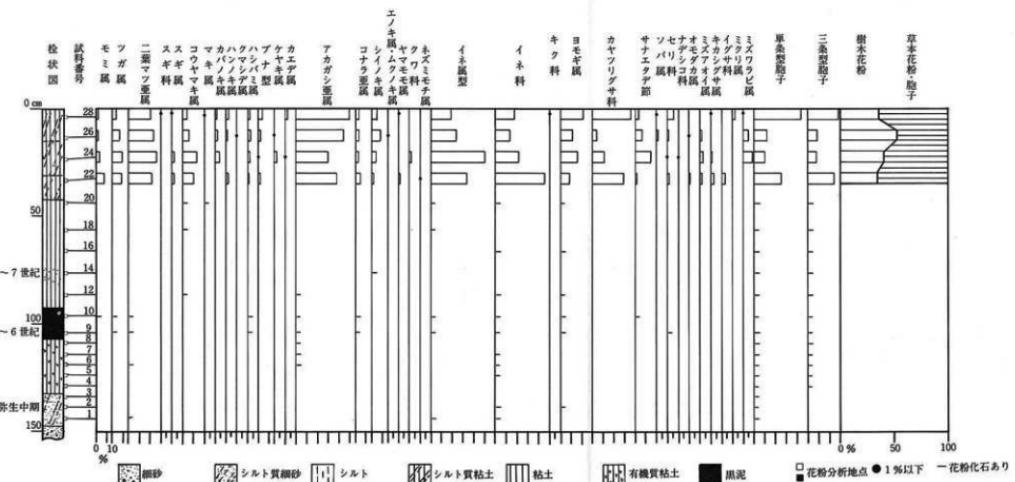
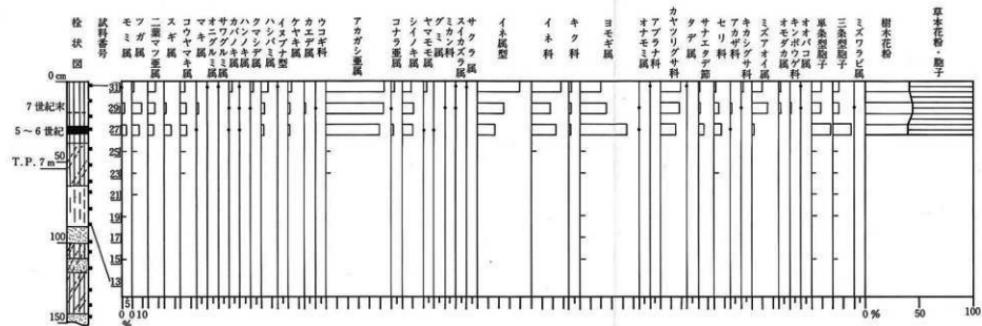
第58図 城山遺跡 I トレンチ 292 地区東壁 花粉ダイアグラム

第12表 城山遺跡 I トレーンチ290区 花粉・胞子出現率表

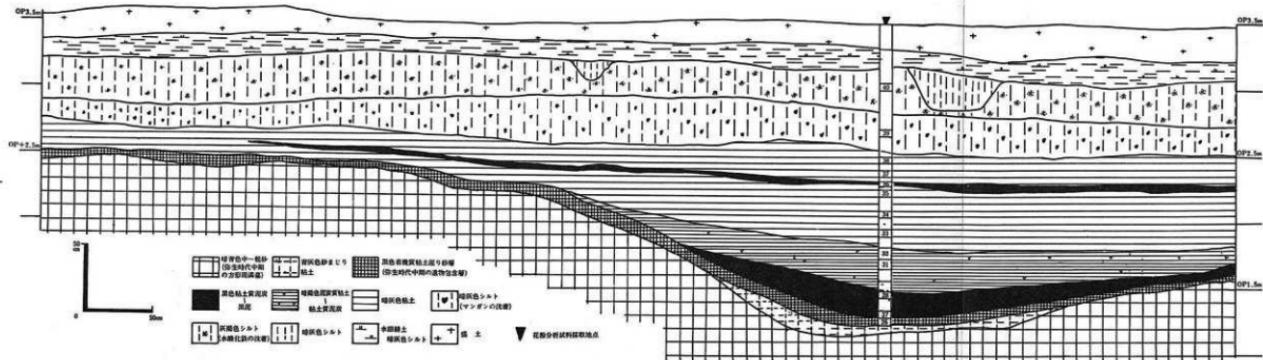
	MNN%	1~13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	(%) %
Aleur. (モコモ)		2		1				1 9.2	7 4.9	2 3.5	1 0.7	
Tsuga (ツガ科)				1	1		4 36.4	10 7.0	17 9.1	3 2.1		
Pines (Diploryxylon) (二重マツ属)								7 4.9	12 6.4	10 7.0		
Taxodiaceae (スギ科)												
Cryptomeria (スギ科)								16 7.0	3 1.6			
Sciadopitys (コウヤマキ属)				1	4 36.4	9 6.3	10 5.3	6 4.2				
Podocarpus (マツ科)								1 0.7	2 1.1			
Juglans (カニダツ科)										1 0.7		
Prunus (サクランボ科)											1 0.7	
Betula (ベニバナ科)								1 0.7	3 0.5	4 2.8		
Alnus (ハシキ科)								1 0.7	3 0.5	1 0.7		
Carpinus (カシ科)								1 0.5	3 2.1			
Corylus (ハリバチ科)								4 2.8	6 3.2	8 5.6		
Fagus japonica type (イヌクサ科)										1 0.7		
Zelkova (ケヤキ科)								2 1.4	2 1.1	4 2.8		
Acer (カエデ科)									2 1.1			
Anthriscaceae (コウザ科)									1 0.5			
Quercus (Cyclobalanopsis) (アカガシ属)		1	2	18.2	70 49.3	108 55.5	76 53.5					
Q. (Lepidobalanus) (コナラ属)					3 2.1	1 0.5	4 2.8					
Castanopsis (シノノミ科)					15 10.6	39 10.7	13 9.2					
Colitis+Aphanius (エノキ属+ムクノキ属)												
Morisia (ヤマモモ科)								1 0.7	4 2.8			
Rhamnaceae (ヤマモモ科)								1 0.7				
Elaeagnus (エライグサ科)								1 0.7				
Rutaceae (ミカン科)								1 0.5				
Lonicera (スズラン科)								1 0.5	1 0.7			
Prunus (サクラ科)								1 0.7				
AP Total (樹木花粉合計)	め。	1	1	1	3	11	114	187	142			
Oryza type (イネ属)	て							24 16.9	47 25.1	57 40.1		
Gramineae (イネ科)	少				4 36.3	33 23.2	33 17.6	46 28.2				
Compositae (キク科)	な					3 1.4	2 1.1	3 2.1				
Artemisia (カモミラ科)	い	1	1	5	6	14 12.7	63 44.4	47 25.1	28 19.7			
Xanthium (オナシス科)						1 0.7	1 0.5					
Cyperaceae (カワラグサ科)						21 14.8	36 18.2	27 19.0				
Polygonum (タデ科)								1 0.7				
Pterisaria (ササシタケ属)						8 5.6	3 1.6	2 1.4				
Umbelliferae (セリ科)				1		9 6.3	8 4.5	2 1.4				
Chenopodiaceae (アザキ科)						1 0.7	2 1.1					
Caryophyllaceae (ナデシコ科)												
Crotoniferae (アブナ科)								1 0.7				
Rosaceae (カゴメガ科)								1 0.5	3 2.1			
Mosochora (ミツアキ科)					3 2.1	27 14.4	14 9.9					
Sagittaria (オモダカ科)						4 2.1	3 1.4					
Ranunculus (ランゴウラ科)						2 1.1						
Plantago (オバコ科)						1 0.5	1 0.7					
Juncaceae (イグサ科)												
Musciota spore (本条説明)	1		12	4	18	13 118	27 15.0	6 8.6	14 8.9			
Trilete spore (三糸型胞子)	1		3	9	39	15 145.5	25 17.6	11 5.9	8 5.6			
Ceratopteris (ミズタマ科)								1 0.5				
NAP Total (草本花粉・孢子合計)	3	1	20	13	64	47 427.3	217 157.8	246 128.2	203 142.0			
AP+NAP						58 327.3	359	427	345			
EAP / ZNAP								39.6 / 60.4	43.8 / 56.2	41.3 / 58.8		
Charcoal (炭灰)	3		6	6	18	14 131	37	105				

第13表 城山遺跡 A トレーンチ140地区 花粉・胞子出現率表 (1983年12月採取)

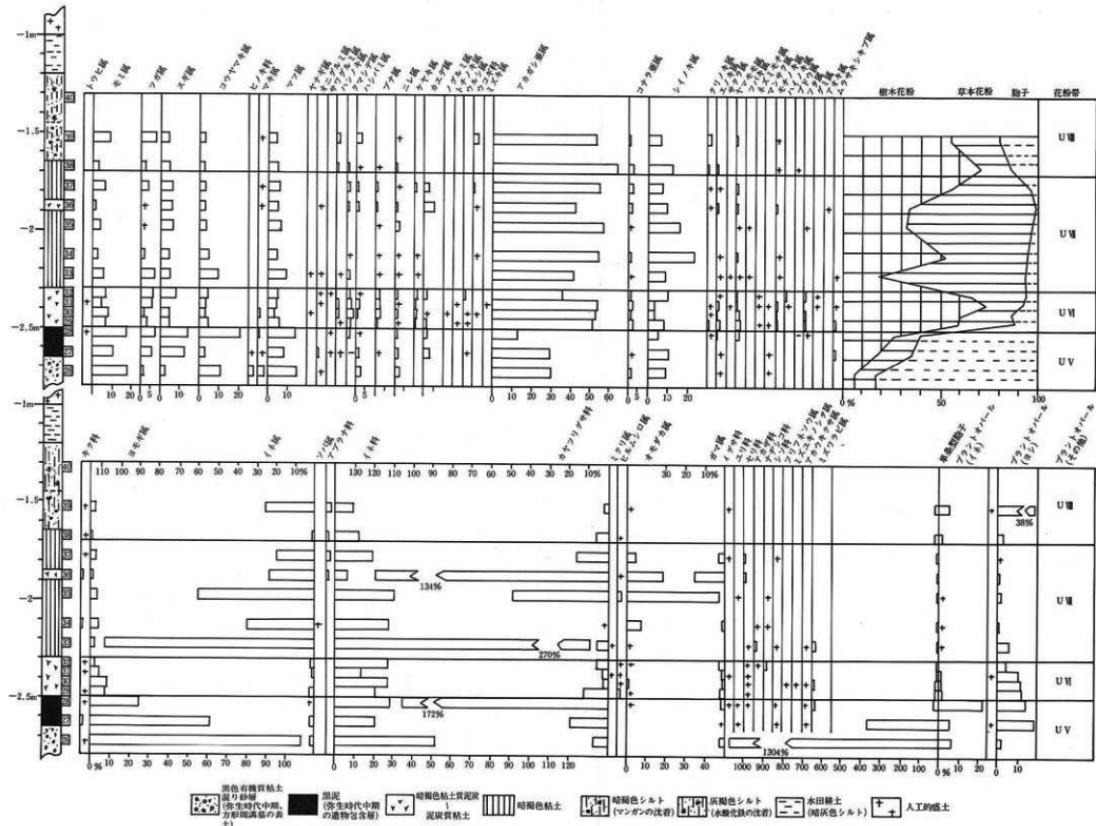
	MNN%	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	14	15	16	18	20	22	24	26	28	30	32	
Aleur. (< 1%)										2							7 7.2	4* 3.3	3 1.5	3 2.0				
Tsuga (ツガ科)										1	3						8 8.2	11 9.1	13 6.3	5 3.3	1			
Pines (Diploryxylon) (二重マツ属)		1						1		1							21 21.6	31 25.6	27 22.8	21 20.3	1			
Taxodiaceae (スギ科)																	2 2.1	2 1.7	1 0.7	1 0.7	1			
Cryptomeria (スギ科)																	1 10.3	16 13.2	12 5.8	6 3.9	1			
Sciadopitys (コウヤマキ属)																	1	0.7	1 0.7	1 0.7	1			
Podocarpus (マツ科)																	1	0.8	5 2.4	4 2.6	2			
Betula (カバノキ属)																	5 4.1	4 3.9	2 1.3	1 0.7	1			
Alnus (ハシキ属)																	2 3.1	2 1.0	3 2.0	2	1			
Carpinus (カシ科)																	1	0.5						
Corylus (ハシキ属)																	1 1.0	2 1.7	3 2.0	2 2.0	1			
Fagus crenata type (イヌクサ属)																	36 37.1	25 28.9	90 43.7	76 49.7	1			
Q. (Lapidobalanus) (コナラ属)																	4 4.1	3 3.5	6 2.8	5 3.3	2			
Castanopsis (シノノミ科)																	2 2.1	5 4.1	15 7.3	8 5.2				
Celtis+Aphanius (エノキ属+ムクノキ属)																	Myrsia (ヤモリモチ属)							
Marcusia (ワケワタ科)																	Ligustrum (ホソミセナ科)							
AP Total (樹木花粉合計)	3																2 97	121	206	193				
Oxycy type (イヌ属)	1																1 42	43.3	61 50.4	49 35.8	28 16.3			
Gramineae (イネ科)	1	2						1	2								2 44	45.4	36 21.5	27 18.1	37 17.6			
Compositae (キク科)							1																	
Artemisia (カモミラ科)	2																21	11	9	1				
Cyperaceae (カワラグサ科)																	1 8	19 15.7	23 11.2	20 10.9				
Persicaria (オナシタケ属)																	28 26.6	13 30.7	8 3.9	54 35.3	4			
Fragopyrum (ソバ属)																	1 1.0	18 14.9	14 6.8	6 3.3				
Umbelliferae (セリ科)																	2 2.1	1 0.8	2 1.0	9 5.9				
Caryophyllaceae (ナシコ科)																	1 0.6							
Sagittaria (オモダカ属)																	2 3.1	4 3.3	4 1.9					
Rosalia (モクシダ科)																	3 3.1	2 1.7		1 0.7				
Acaciaea (イグサ科)																	3 3.1							
Ranunculaceae (キンポウゲ科)																	1 1.0	1 0.8						
Sparganium (ミクリ属)																								
Crociaceae (アブナ科)																	23	24 24.7	12 9.9	25 12.1	67 43.8	2 6		
Monilete spore (单生型胞子)	2	2	1	2	7	15	21	35	15	14	22	11	36	18		10	24 24.7	10 8.3	17 8.3	46 30.1	1 5			
Trilete spore (三糸型胞子)						1	2	5	8	10	14	20	16	6	12	5		11 9.1	11 5.3	1 0.7				
Ceratopteris (ミズタマ科)																								
Moss spore (好苔植物の孢子)																	1 1.0							
Total NAP (草本花粉・孢子合計)																	90	91	91	42	18 103	94		
AP+NAP																								
EAP / ZNAP																								
Charcoal (炭灰)	5	3	4	5	12	24	35	38	38	131	150	82	40	36	38	47	90	92	42 34.7	24 11.7	94 61.4	3 3		



第59図 城山遺跡 I トレンチ 290 地区東壁(上)と A トレンチ 140 地区東壁(下)の花粉ダイアグラム



第60図 瓢生堂遺跡第2号方形周溝墓北壁の断面図 (安田1981)



第61図 瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓の周溝部花粉ダイアグラム (安田1981)

あとがき

城山（その3）の調査結果で特徴的なものを列挙すると、

1. 台地部から低地部へ移行する場における、各期の土層の堆積状況がある程度わかったこと。
2. 弥生中期～庄内期に、低地部で採土坑かと思われる多くの土坑がうがたれていたこと。殊に弥生中期のものは、個々の輪郭がつかめないほどに密集していたこと。
3. 当初予期された古墳はなく、長原古墳群の範囲の外にあったこと。
4. 7世紀前葉以後、砂等で埋もれた水田が7層にわたって検出されたこと。

この内 a. 第2水田とした7世紀後葉～末葉頃の水田には、条里に先行する長地形地割があり、ここから「富官家」の墨書き器が出土したこと。

- b. 第3・第4水田のごとく、ひどい氾濫の後でもそこに必要な土壤さえ残っておれば水田として再利用されていること。
- c. 平安時代以後の水田では水路の存在頻度が高くなり、一筆の田が大きくなる傾向にあるらしいこと。

などが注意される。

弥生時代の土坑群は、これを土器製作用の採土坑とした場合に、得られた粘土による土器がどこで使われたかの問題がある。後期ならば北接する（その2）調査区に集落があるものの、中期については近くにこれまでのところない。周辺にこれを求めるとき、北へ約1.2km離れた亀井遺跡が浮かびあがるわけであるが、これらは当時の集落のエリアの問題とからんでくる。

また7世紀前葉以後の灌漑水田の状況はある程度判明したが、それ以前との関係は不明のまま残った。花粉分析結果からは、弥生後期以後周辺で水田が増えていたことが予想されている。更に同じ花粉分析結果からは、7世紀以後も周辺に照葉樹林が広く残存していたと予想されている。これらは現状では発掘調査によっては確かめようがなく、Ⅶ章においても触れることができなかった。

なお編集にあたっては、一般的の順序と異なり上位の新しい時期から始めている。沖積地で造構が重層し、殊に水田が重なるような場合には土壌そのものの検出状況の記述が重要と考えたからである。しかし必ずしも成功したとは言えない。大方の御批判を乞う次第である。